

鹿兒島県史料集
(51)

西藩烈士干城録(三)

鹿兒島県立図書館

刊 行 の こ と ば

県史料集の刊行は、郷土資料の保存を図るとともに、地方史の研究や県民の文化向上に役立てることを目的としております。

今回は、鹿児島県史料集第五十一集として「西藩烈士干城録」(三)を刊行することになりました。

「西藩烈士干城録」は、戦国時代から近世初期にかけて活躍した島津歳久をはじめとする島津家家臣の列伝です。島津久光の師である上原尚賢(別名、鴻)が編纂し、後に島津久光が精写したもので、今回は、巻二十七から三十五までを刊行することといたしました。

本史料集第五十一集「西藩烈士干城録」(三)は、第四十九集「西藩烈士干城録」(一)、第五十集「西藩烈士干城録」(二)と同様、黎明館学芸課長の徳永和喜氏によって、原稿作成・編集・校閲・校訂が進められ刊行の運びとなったものであります。

長期間にわたる同氏の御苦労に対し心からお礼を申し上げますとともに、この史料が郷土史の研究に大いに役立てられるよう期待いたします。

平成二十四年三月

鹿児島県立図書館長

脇田 稔

目次

例言 i

西藩烈士干城錄 卷二十七、卷二十八

二階堂安房列傳第八十	1
八木正信列傳第八十一	1
谷口重定列傳第八十二	2
山口大藏列傳第八十三	2
高崎能宗列傳第八十四	3
高城重治列傳第八十五	3
米良重隆列傳第八十六	3
小野則次列傳第八十七	4
平田純貞列傳第八十八	4
毛利元房列傳第八十九	5
長野祐為列傳第九十	5
丹生民部列傳第九十一	7
勝目兵右列傳第九十二	7
大山經綱列傳第九十三	7
遠矢重良列傳第九十四	9
梅北國兼列傳第九十五	9
入田義實列傳第九十六	11

西藩烈士干城錄 卷二十九ノ卷三十二

上野忠元列傳第九十七	11
黒田頼清列傳第九十八	12
黒木實利列傳第九十九	13
久保行久列傳第百	13
野邨利綱列傳第百一	14
面高英俊列傳第百二	16
本郷義則列傳第百三	17
甲斐重種列傳第百四	17
帖佐宗光列傳第百五	18
日高義秋列傳第百六	19
阿多加賀列傳第百七	19
有川常盛列傳第百八	20
川越重賢列傳第百九	21
蒲地五郎列傳第百十	21
有馬重純列傳第百十一	21
赤塚真賢列傳第百十二	23
川内源五列傳第百十三	24
久留半五列傳第百十四	24
平野友治列傳第百十五	25
肥後盛秀列傳第百十六	25
瀬戸口重勝列傳第百十七	26
安樂兼惟列傳第百十八	26

佐谷田重遭列傳第百十九	26
鮫島宗秋列傳第百二十	27
税所敦朝列傳第百二十一	28
酒瀨川武安列傳第百二十二	30
酒匂新左列傳第百二十三	30
堀丹後列傳第百二十四	30
鳥丸重統列傳第百二十五	31
富山備中列傳第百二十六	31
大寺大炊列傳第百二十七	31
大脇利為列傳第百二十八	32
小川有季列傳第百二十九	32
鬼塚助八列傳第百三十	32
大河平隆屋列傳第百三十一	33
松岡勝兵列傳第百三十二	34
池田貞秀列傳第百三十三	34
家村重昭列傳第百三十四	35
猪股左近列傳第百三十五	36
市成掃部列傳第百三十六	36
今井兼諫列傳第百三十七	36
指宿忠政列傳第百三十八	36
飯牟禮光家列傳第百三十九	37
大重久實列傳第百四十	37
大迫元勝列傳第百四十一	37

西藩烈士干城錄 卷三十三（卷三十四）

鹿島重國列傳第四百二十二	38
横山玄蕃列傳第四百二十三	38
宅間與八列傳第四百二十四	38
財部盛弘列傳第四百四十五	39
田中掃部列傳第四百四十六	39
竹内實康列傳第四百四十七	40
高橋種直列傳第四百四十八	40
田尻統種列傳第四百四十九	41
田上筑前列傳第四百五十	41
園田實明列傳第四百五十一	42
中村義種列傳第四百五十二	42
中江意温列傳第四百五十三	42
奈須美作列傳第四百五十四	43
山鹿鎮幸列傳第四百五十五	43
福島忠辰列傳第四百五十六	43
古市實清列傳第四百五十七	44
國分友積列傳第四百五十八	44
河野通泰列傳第四百五十九	45
弟子丸備前列傳第四百六十	45
簗輪重親列傳第四百六十一	46
志賀播磨列傳第四百六十二	46

西藩烈士干城錄 卷三十五

志岐親昌列傳第百六十三	46
靱木隼人列傳第百六十四	47
阿蘇惟永列傳第百六十五	47
皿良貞行列傳第百六十六	48
江田兼年列傳第百六十七	49
隈岡長守列傳第百六十八	49
赤崎丹後列傳第百六十九	49
諸氏合傳第百七十	50
沙門列傳第百七十一	77
歸化列傳第百七十二	83
七國諸侯列傳第百七十三	85
日向一	85
肥後二	86
豐後三	88
肥前四	89
筑後五	90
筑前六	90
豐前七	91
上原氏列傳第百七十四	91
附錄	94

例言

本資料集は、鹿児島大学附属図書館玉里文庫（島津久光旧蔵）「西藩烈士干城録」（全二十五巻）を底本とし、三ヶ年にわたり全三冊として刊行するものである。今年度は巻二十七から巻三十五までを『西藩烈士干城録（三）』として収めた。

- 一 漢字は、原則として底本の体裁である旧字体を用いた。
- 一 干城録引書は、底本のままとし、「○」・「ゝ」の符合も残した。
- 一 読点は、底本を重視したが本文中で割書を付している部分についての読点は割書の下に読点を移した。
- 一 凡例及び底本文の頭注は、（頭注）と註記し、頭注内容は「」で示し、行間の該当する場所に移した。
- 一 闕字は、底本の体裁とおりとし、一字・二字あけとした。
- 一 本文の附録書きは、体裁とおり一字下げとした。
- 一 割書は、底本体裁とおりとしたが、左右の文字数は調整した。
- 一 底本の判読史料として、東京大学史料編纂所所蔵「西藩烈士干城録」を参考本として用いた。

西藩烈士干城錄(三)

西藩烈士干城錄卷之二十七

二階堂安房列傳第八十

二階堂安房介、不知何許人^{刀稱番}、其先左衛門尉行雄^{建武間人、刺髮號行存}、之第二子近江守直藤之後也、天正六年、大友氏來侵我日州、是時安房介援山田有信、率兵入守高城、十一年、十月、出守八代城、十二年、冬、以安房介為湯浦地頭職、於是十二月三日、安房介朝覺府、賴伊地知周防守^{此云奏}、而拜其辱、此日特命子三郎次郎、任帶刀長云^{覺兼日、記兼日}、十五年、五月、豐公西下、新納忠元據大口城、是時安房介與瀧聞越後士持大膳亮、俱議召兵莊內、將往援忠元、會忠元以公命下城、因不果、忠元遣書於三士謝之、其書猶存世、子與右衛門重行^{初稱三郎次郎、又帶刀}、為厩別當、從慈眼公伐朝鮮、慶長三年、泗川之捷、被紺緋甲、擊敵多殺、十一月十八日、戰沒於海上、子安房、母平田宗清女、為京師知邸、子與右衛門、生死不知其年月^{今二階堂與右衛門、即此人之後也}、

二階堂行廣、自稱源左衛門^{六、初稱彌、}事松齡公為厩別當^{按上野宗秋自記、天文三年、隨堂彌六、加元服於公庭、名行廣、而給事公云、}、年十八、從戰關原、軍敗、從而歸國、賜褒牒及田祿五十石、寬永十四年、正月廿日、卒、法號慶安紹永居士、墳墓在椿窗寺、有子曰采女正^{今二階堂源太夫、即行廣之地也}、

二階堂行恒、稱傳右衛門、從松齡公伐朝鮮、死時不知年月、有子曰五左衛門、

二階堂内匠、吉田士也、天正中、選舉謀臣五十四人、内匠其一人也、

二階堂三郎五郎、弘治中、從戰蒲生、有功、

二階堂四郎左衛門、從戰木崎原、執弓射殺敵將伊東加賀守、

二階堂出羽、天正十二年、三月、五日、代倉岡地頭吉利久金至宮崎^{覺兼日、記兼日}、

二階堂城之介、元和初、覺府田祿籍云、城之介領三百八十四石、

野史氏曰、

八木正信列傳第八十一

越後守八木正信^{初稱新四郎、又主木、}、三字姓日下部氏、父日和泉守信親^{初稱新、四郎、}、大父曰次郎太郎實信、刺髮號宗西、正信事貫明公、以能書使之學於青蓮院尊朝親王、書成、為右筆兼真幸院吉田地頭職、食田祿二千餘石、後傳書法公云、天正元年、正月、遣正信及實持院^{初稱實、別當、}渡海至根占、重長置戍兵海岸、於是正信急匿舟底、實持院乃大呼曰、身是使僧、公等幸登吾岸、戍兵等議焉、則導至東禪寺^{在舟、}、乘夜正信潛出舟亦至焉、寺僧便告之重長、重長招正信城中、而和議成、二人遂還報、十二年、三月、正信以書記從公子家口至島原、造檄諭松浦肥前守、十四年、七月、諸將進攻岩屋城、正信從雷在八代城、八月申浣、遣正信及濱田經重使豐後入田、路謀津箇牟禮城而還、十五年、羽柴秀長驅至日州、是時正信引兵入守高城、既而從公刺髮於雪窗院、號嘉笠^{一作奈、}、直從謁豐公於泰平寺、十七年、五月廿四日、嘉笠等十七人造盟書獻之、公及松齡公、事秘不傳世、某年七月十七日、病卒於富隈、法號鄰松城德庵主^{初嘉笠吉田從覺府、預築石塔于興國寺、至誓問、住僧姓強忍、盡廢石塔、見埋沒、以故子孫、}、子丹後守豐信^{初稱新石、}、亦能書、與父俱書倭漢朗詠集、上之近衛信尹公、因賜褒牒云^{或云、嘉笠父子共書倭漢朗詠集、獻納之、}、後為大坂藏奉行、寬永四年、七月初一日、卒、法號鶴安玄耕庵主、墳墓在南林寺、子

高崎能宗列傳第八十四

高崎播磨守能宗初稱聖若、衛門、剃髮號有閑、其先大友氏始祖左近將監能直第六子太郎兵衛景直、其子次郎忠能、采食於豐後高嶺、因氏焉、及道鑑公娶大友近江守親政女、忠能與小田原某俱從興而來薩、遂委質於我、忠能二男、道鑑公親加冠於二男、且賜諱一字、長名忠直、稱次郎四郎、次名久邦、稱彌四郎後更四郎、左衛門、久邦生武邦、武邦生尾張守久能初稱久、太師、久能生彦三郎能充、能充生播磨守能名作地名、為伊、能名生能宗、自忠能至能宗凡七世、能宗事大翁公為國老、至大中公之世為伊作地頭職、子兵部少輔能實初稱一作實、一作實、繼父為伊作地頭職、子大炊

介能廣初稱廣、六、亦為伊作地頭職、從擊相良義陽、後以近侍從伐朝鮮泗川、越云、緋甲、、子伊豆守能乘初稱聖若、衛門、貫明公手自加冠、後為用人、累遷伊作羽月地頭職、寬永十四年、四月十九日、卒、法號春齋宗雲居士、子惣右衛門能延初稱謙、五郎、即能延之子孫也、

高崎越前者、能宗之弟也、屬公子家口為家老、天正中、數從軍有功、

高崎介次郎、弘治三年、四月十五日、戰沒於蒲生北村、野史氏曰、

高城重治列傳第八十五

高城武藏守重治、落合六郎重貞之十四世孫也、初寶治年中、重貞等兄弟五人自鎌倉至薩、而重貞領高城、因氏焉、至重治世々采食於高城、而重治為禰答院良重家老、當貫明公之世、重治以籌策冒良重、遂約和議、因召重治于栗野城、給事、松齡公或云、良重死後、重治歸入來院氏、及入來院氏降我、重治知事于我、未也、、子左京允重說初稱太郎、或云、按諸家系譜、重說父周防介重謙、未知孰是、、為長野地頭職、以船奉行與

三原諸右衛門俱濟朝鮮、後為兵具奉行、及班師之日、重說先衆衝敵艦、及歸國、賞賜田祿若干石、國老與重說書證之云、重說無男、以同宗主馬重尚之長男喜太郎為義子、是曰主馬亮重貞、為兵具奉行、從軍浪華、寬永中、重貞領田祿一百七十石今高城主左衛門、即重貞之子孫也、

高城主水允、天正中、松齡公選智勇士五十四人、主水其一人也、

高城珠長、善連歌、天正中、游京師、為宗匠紹巴門人、一日有着笠連歌會去詳考、依再考、、題曰、行音由、盡音多留、盡音多留、東音阿、路音能波天、路音治、諸生皆難之、有一人廣歌者曰、事音古、問音亮波、問音亮波、答音與、答音一、答音與、都音密、鳥音亮里、一都鳥、鳥名、都音密、鳥音亮里、一都鳥、鳥名、紹巴賞曰、是必珠長也、使脫笠、果是也川續實云、廣歌者長、、十四年、九月、珠長從軍八代、十六年、從朝京師、野史氏曰、

米良重隆列傳第八十六

米良隼人重隆初稱小右、、重隆父石見守者、菊池氏之支族、世々領山中米良之地在日州、、屬伊東氏、其後通志於我、木崎原之戰、石見斬獲伊東氏敗卒於米良山中、天正六年、大友氏來侵我日州、石見率兵來援我、貫明公一作松、賞其功、賜大腰刀備前長光、、一把、慶長四年、莊內之役、重隆與弟縫殿助重供、將兵一千餘人來援我、以其父子有勤勞於我、慈眼公數召禮之於覺府、後賜重隆田祿五百石、重隆乃使重供來仕於我、因請以所賜五百石與之重供、而已居日州繼父後日州米良氏、即、重隆之子孫也、重供二男、長曰隼人、為兵具奉行、慶長元年、十一月十四日、卒今米良小宗子、、次曰大藏、祖父石見守徵諸米良、賜之寒川邑、以為米良氏小宗子、以故大藏往居寒川、或來居覺府、子孫遂為我府下士、今米

良藤右衛門、即其子孫也云、

米良右京亮、仕我為平野地頭職在日州、天正九年、水攻之役、有米良右、京亮者、以紙屋地頭職從焉、未知孰是也。

米良駿河、仕 松齡公、為須木地頭職、後轉紙屋地頭職、

米良三學坊重盛一作重實、從 松齡公入朝鮮、

米良豐前兵衛重親、慶長五年、以 公命徙居高岡邑云覺誓日記、天正十一年、九月、佐敷之役、有富里士

米良氏者從焉、蓋重親也、而無、他據、因始記於此、以俟後識者。

米良千助、從 松齡公伐朝鮮、

米良木工之允文曰堂、岐、嘗居五箇別府村在龜山、為行司職、大永七年、大中

公出清水城、至小野、匿園田實明家、是時實明請木工允以為導、遂得俱全而至田布施、

米良壽椿初稱休右衛門、鎌殿重世之、其人之外祖父也云、俟再考、 米良權之介比二人未詳其事、

解魔法師米良重慶法印、其先權僧都重臣第二子重遍或有云、重遍亦任權僧都、

為花園寺在日州大先達、是曰薩摩坊、重慶乃其九世裔也、亦為花園寺大先達、而給事 松齡公、有戰功、子伊豆守長重初稱彌六、亦事 松齡

公今米良忠兵衛、即重長之裔也。

野史氏曰、

小野則次列傳第八十七

小野則次、自稱鄉右衛門、弘治中、從戰蒲生、有功、其後從 松齡公伐朝鮮、手刀多殺敵、慶長五年、又從軍關原、軍敗、則次按轡立

馬於岡上、貴島柳右衛門謂之曰、如今日之戰、大丈夫效節之日也、則次笑曰、然、遂策馬冒敵陣、而為數槍所刺斃、有子亦稱鄉右衛門、

小野出雲、高山人、天正中、選謀臣五十四人、出雲其一人也、下大隅之戰、出雲及柳田外記等、出謀田上城、而取勝於敵云、

小野右京、以兵具役、從擊朝鮮、又從討莊內、野乘氏曰、

平田純貞列傳第八十八

平田治部少輔純貞、姓藤原氏、剃髮號純喜、其先不知何許人、曾食邑於牛屎院在平田、及太良院在平田、因為平良氏、其後子孫更平良為平田氏、純喜事 大中公、元龜二年、辛未、六月廿三日、公薨、純喜

為 公禱冥福、經歷日本六十餘州、翌年二月、歸國、越三月廿三日、臨南林寺前海岸、向東而咒咀曰、伊東氏我 公之賊、我子亦為賊所殺、我今死當為厲鬼、以滅賊、瞋目切齒、三躍而没海、法號廉

州淨貞大禪伯、墳墓在松原山、一、二男、長十郎次郎、天文十八年、己酉、四月五日、擊伊東氏、戰死於護擁舞辻、法號由岳藤緣禪定

門、墓在父墳側、次純昌、稱九郎右衛門、號安處、母壹岐加賀女、安處二子、長純繼、稱休右衛門、次純正、稱清右衛門、慶長十二

年、生、事 慈眼公為納殿役、賜秩祿五十石、後增賜五十石、寬永十四年、丁丑、二月、公疾病、於是乃使純正齋傳世寶藏渡谷愛染

明王木像同弘法大師奉、嵯峨帝之勅、而取藤延木上、其枝濟谷上、而一刻二拜製佛像、高側手、俗謂之渡谷愛染明王、或云、而授之、得佛公、於建寺于滿家院厚、及摩利支天畫像本邦、神謂之摩利支天、多田、滿仲、傳此像、傳之、其地村、號平等王院、而安置此像、

餘兩腰刀一光忠所作、鷹巢小刀三條宗近所作、有鷹管覆蓋、授之 寬陽公于江戶邸是時

為世子在江戶戰、十八年、二月、幕府命獻島津系譜、於是六月、使川上久

國使江戶、純正副焉、而齋系譜上之太田資宗守備、承應三年、甲午、

十二月、命純正及鎌田政勝、編島津家譜總三百卷、明曆三年、丁

酉、正月十五日、賞其功、賜秩祿一百石、而轉高奉行按高奉行稱、寬永末、純正在職、寬文二年、壬寅、十月十七日、卒、法號天心又玄菴主即今平田十郎次

子孫、

野史氏曰、純貞言行雖有過中、而亦一世之偉人也哉、其後未幾、元

凶憂死、餘賊皆降、可謂詭異也、

毛利元房列傳第八十九

毛利元房、自稱覺右衛門、姓大江氏、蓋中國毛利氏之支孽也、初事

因州刺史宮部繼潤善祥、食祿三千石按記、元房、因州、幼稱、為叔父名山繼潤所養、長事毛利

千石、而從戰日州目白阪、後致為臣而去、慶長四年、依增田和泉守、

來事 松齡公、賜祿一千石、且百人俸、是歲從 慈眼公討莊內賊、

五年、秋、陣没于關原、無男、以弟肥前守元親肥前守為之嗣、慶長五

年、伊東氏臣稻津某侵暴我日州、元親與諸將往討平之、十四年、元

親率兵二十五人赴琉球、及國王出降、諸將使元親等至八重山島、丈

量始起稅、後歸國、轉遷兵具奉行・船奉行・支配奉行、寬永十八

年、二月廿一日、為大邸地頭職、正保元年、五月、卒今利勝太六、元房之子孫也、

毛利主殿助、永祿七年、從 松齡公徙居飯野城、

野史氏曰、

長野祐為列傳第九十

長野祐為、稱仲左衛門、其先鎌足公之裔長野祐貞者、與從騎廿二人

從 得佛公而下薩、其後子孫不知居何許、至祐為事松齡公、永祿七

年、選知勇士六十人、徙居飯野城、祐為其一人也、十一年、正月廿

一日、我軍敗於羽作瀨羽作瀨、是時祐為拒後戰没於川中、子祐譽、亦稱

仲左衛門初稱助、居栗野、而領田祿四十石、朝鮮之役、以三人賦賦在別從

之焉、是時官約曰、役畢而歸國、乃益賜子祿五十石、既反、而移居

出水杉城、官變前約賜之田祿十六石、祐譽乃上言曰、願如約、於是

慶長十三年、三月十五日、比志島國貞・島津忠長・賜連名署曰、方

今官賞功、穀祿不足、侗日相謀、必益與之、子姑俟焉、子祐詠、稱

式部少、有故去出水、居野田、子祐遠、亦稱仲左衛門初名祐果、稱、母羽

月士庾島太郎兵衛女、及長、高崎伊豆守羽月邑、召祐遠為吏、於是祐遠

養某氏子因冒長野氏、留居野田、而嗣父後此子孫今在、野田邑、而已與母俱之羽

月祐遠子孫今、在羽月云、

長野勘左衛門祐口、祐為次子按羽月士長野氏系譜、祐口、祐譽次子、而居歸子島、為知假、從

松齡公戰豐後及朝鮮、慶長四年、以普請奉行、自帖佐徙居出水、五

年、上國東西師起、是時 公在于伏水、而徵兵於薩、於是八月十五

日、祐口等乘舟、發阿久根、徑大坂、至伏水、從軍關原、九月十五

日、我軍敗績、祐口冒堅陣没焉、年五十、法號自心長然居士、

按長野氏上書曰、祖父長野仲左衛門祐為、蒙恩辱居 松齡公廳下、

公在栗野城時、偵報曰、求麻寇至、公急邀擊、寇易我兵少、大

衆薄之、我兵不利、公退涉川、從兵僅五人二膳堂右衛門、遠天下總、財部傳、仲

左以為寇若追及焉、則公危矣、於是獨止後拒、寇窘迫于川中、仲

左與寇相搏、撥其吊腿、刺其股、是時寇數十騎急來擊殺之、而爭

其頭、公遂退去於三弓場、仲左妻某氏、少守義、大中公父子遣使者曰、汝夫死節、而聞有遺孤、方今錄鞠之、庶慰汝哀情、及長稱勘左衛門也、亦事松齡公、公在帖佐城、從居焉、擢普請奉行、祇役出水邑、當此時、石田三成方謀合西諸侯、將有事于中原、時公在于伏水邸、徵兵于薩、我將士多應命赴之、於是勘左乃借銀倩人、往取所藏甲冑及槍于帖佐邑、而與中馬大藏・竹內宮內・花棚善兵俱乘舟、發阿久根邑、至大坂、謁公于伏水邸、先是公謂左右曰、向徵兵于國、先衆馳至者、必長野勘左・中馬大藏、及至、公喜曰、二子果先至、自伏水、從至關原、道路凡三四日程、以衆之故凡七日乃至焉、勘左擐甲冑、腰間佩兩刀小刀長寸、小者云小者、倭也、俗此少弱也、俗云小者、及三日、疲痛後衆、不能以執槍、勘左乃自執槍、公賞曰、數日擐甲、而執長兵、可謂壯也、九月十四日、關東大軍次于赤坂、西師諸將議明日決戰于關原、於是我國老川上忠兄遣勘左往偵焉、還報曰、東軍遠來、陣營未全、今夜如假吾敢從之士百五十人、則分為三隊、白衣朱巾宜進衝敵、君等與西師繼之、或可以克之、機不可失也、吾思西師烏合、諸將各自異心、若待明日、東軍狡計百端、恐變生不測、我師徒送禽耳、忠兄曰、子嘗從豐後及朝鮮之軍、屢出偵大敵、今計東軍有機、勘左曰、大抵八萬人、忠兄曰、善、乃謂之曰、今子所謀非不善、然僅百餘人以突大敵、我恐其徒戰沒、況今日公兵寡不可以分隊、且與西師繼之、謀亦難決、思無佗計、明日決於一戰耳、其議遂止、當夜、勘左謂大藏曰、明日之戰、予恐諸將中必有包藏禍心、而卒然與寇者、則西師必大敗、子勿必與寇擊死、勿與諸人爭功、勿被小創、勿離公側、子膂力絕人、公退必有事於險阻焉、或負或扶、或導或衛、尽心竭力、始終以全而歸國、其功誰有賢於子者、

方今予亦欲為子所為、而年五十、筋力已衰、予誠不能、明日予必先衆死敵、子必勉之、則予長結艸、大藏曰、謹聽命昔唐荀勗存首曰、予在君、子以晉免、我請死、亦是之類也、野史氏曰、(頭注)轉音交、轉音割、車馬喧雜兒、、宣者、蓋鮮矣、今揭勘左在伏藏之語、其與人處曰、兩盡其義如此、嗚呼、寡人之處變、失其、翌日詰朝、東西師大戰于關原、西師敗、勘左進獲甲首、遇川上忠兄證之、即舍首而執槍復進、突入敵中、遂不復還、出水士平山九郎左衛門為忠兄部下、在忠兄側親見之、初二階堂右衛門・遠矢下總俱居栗野城、後去焉而俱來居於出水邑、臣亦寓居焉、因親聽祖父死節之事、又況世人所徧知、父勘左戰死於關原、臣詳聞之中馬大藏、大藏已死、平山九郎左衛門今猶存焉、明曆二年、丙申、九月十三日、後長野勘左衛門押字自慶長五年、至明曆二年、凡五、十七年、今子孫世々為長島士、

長野六兵衛、從擊朝鮮酒川之捷、實、、子祐幸、稱助七郎、後更亦稱六兵衛、從軍朝鮮、後從于田、手自刺殺猛虎、新寨之戰、被赤沼甲、南海之戰、與樺山久高等五百人窘迫攀上海島、語在別記、

長野勝三郎、六兵衛弟而祐幸叔父也一作祐、亦從伐朝鮮、按有長野少次郎祐幸者、以步、敵艦所寄于海島、蓋勝、、郎同人而謂自稱也、

長野隱岐、天正十五年、從公子歲久在白仁城、三月、諸將罷兵而歸、是時歲久有病不能發、欲白公于府內、而賊兵前後塞路、衆皆束手而無佗議、獨隱岐奮曰、臣願潰重圍而往告焉、而後直徑日向而歸國、若不能達、則今日固永訣耳、衆皆服其傑烈、既而歲久與病而般師、隱岐亦以全而還國、死時不知其年月、

長野祐豐、稱織部、松齡公置納殿衆十四人、祐豐其一人也、從軍朝鮮、

野史氏曰、仲左父子同死節、且觀勘左還報於忠兄之言、其有知勇、

而無一毫沮撓之意、至告大藏之語、則又君臣之大義、曉然於方寸之間矣、如斯人者、世豈多見之也哉、然無其子之上言、則其義聲湮滅而不見世、信哉言之不可已也、

西藩烈士干城錄卷之二十七

西藩烈士干城錄卷之廿八

丹生民部列傳第九十一

丹生民部、事 大中公、天文七年、十二月廿九日、陣沒於加世田城、無男、以德永隼人長子彌二郎者為之嗣、因冒丹生氏、更曰備前、元龜三年、從公子歲久擊破肝付賊、拔廻牛根二城、力戰之功寇於衆、天正元年、九月廿七日、從擊破前陣皆在下天、十年、十二月、勤戍八代城、後祗役於京師、居數年、其後為倉岡地頭職、慶長五年、秋、往援穆佐邑、擊破稻津掃部伊東氏、十三年、正月八日、卒、法號圭翁全白居士、墳墓在倉岡絲原村、子新三郎、元和間、甕城田祿籍云、新三郎領五百石、卒時年二十一今丹生助右衛門、即民部子孫也、野史氏曰、

勝目兵右列傳第九十二

勝目兵右衛門、父曰加賀守、慶長五年、關原之役、加賀留在浪華城、兵右為兵具奉行、從軍朝鮮、與相良玄蕃等往戍故館砦、慶長三年、九月廿八日、命棄砦而退新寨、明兵覺而逐之、是時兵右被黑緞甲、尚猩々皮陣羽織、且戰且退、既近新寨、顧問其僕曰、玄蕃何在、

僕曰、既戰死矣、兵右悵然曰、余與彼約死生同時、不可以不死、乃脫所佩小刀、與之僕曰、汝宜持而還國、獻之家君、僕曰、臣亦俱死焉、兵右曰、汝如死、則孰有告余死者、行乎、汝勉之哉、僕泣而訣焉、於是兵右乃揮長刀長三尺、衝萬衆而沒按慶長十四年、琉球之後、勝目兵右衛門從、兵六人而赴焉、此蓋父子、而同自稱也、勝目宮內左衛門、從擊朝鮮、

勝目但馬、宮崎士也、天正十一年、十月、從上井覺兼戰肥後、進破堅志田、覺兼乃遣但馬等、往蓮生寺山上、視結營之地、而遇敵、但馬斬一人、其僚斬三人而還報、

勝目彌次郎、從 松齡公軍關原、軍破、從而還國、賞賜褒牒及田祿一百石慶長五年、十一月十日也、

勝目志摩丞或云、與彌次郎同、又、彌次郎子未詳、從赴浪華、是時食田祿三百三十石餘云、野史氏曰、

大山經綱列傳第九十三

織部佐大山經綱一作鮮綱、稱長太郎、又玄蕃、助右衛門、其先佐佐木源三秀義第四子四郎左衛門高綱、高綱生出雲守光綱初稱彌、五郎、光綱生乃白五郎行綱、行綱出為佐佐木隱岐守義清義子、始來薩州居焉、行綱之四世孫和泉守乘綱、居白絲莊在昔、在州、道忍公賜乘綱西股之地在廣、乘綱之五世孫源兵衛尉友綱、有故没入西股、而往居大山村在額楚郡、兒木、因更佐佐木氏為大山氏、子雅樂介元綱、陣沒於野野美谷、孫掃部介綱次、戰亡於吉田城、經綱乃綱次之九世孫也或云、按大山筑右衛門家系、佐佐木三部左衛門盛綱之後、風參守行綱、從得佛公始下陣、行綱之七世孫、是、未詳、永正十一年、經綱生、及長食邑於大山三十町之地、而身居加

世田、天文廿三年、九月晦日、戰亡於星原在岩瀨下、子金藤次綱實、々々

妻村上式部少輔姊、永祿十一年、生男、稱小太郎、及長名幸綱、更稱新藤、事 松齡公、一日 公命幸綱往誅有罪者、有罪者躡稻藁而顛、遂誅之、因命更稱稻介、且賜褒牒、幸綱乃請曰、願終身結茶筌髮茶筌在家禮儀、按義人結日、和俗近世皆剃去前髮、獨留髮、髮至頂為髻、所謂茶筌髮、燃紙髻後、其形狀如茶筌、以代褒牒、許之、時人以為異焉、

天正十八年、幸綱年二十三、從 一唯世子軍小田原、文祿元年、從入朝鮮、而軍金海城、一日從 世子出獵、而遇猛虎、世子乃執八錢鉛子鳥銃、將放之、虎唬怒震地、幸綱前曰、事危、請以臣肩為架、世子乃據肩引放、丸中虎頭仆、大田忠好遂刺殺之、慶長三年、十一月十八日、南海之戰、幸綱被創、墮海中、衆急扶上之、遂得全而還國、後改大山氏復佐々木氏、元和中、幸綱領田祿九十餘石慶長時、石祿稱石、寬永十二年、六月念一日一作二日、卒、年六十八、法號月山常心居士、墳墓在隆盛院、子勘右衛門實綱、初亦稱新藤今佐々木太郎、即幸綱之子孫也、

大山三次綱宗、幸綱弟也、天正二年、甲戌生、性卓犖以俠顯、終身茶筌絲髮剃去頂髮、耳傍僅存鬚毛如纒、俗此云絲髮、或云、綱宗為人所剪、而統存髮如道治、未知孰是、○野史氏曰、余聞之、古老曰、我邦古戰士、多好鬚髮何則鬚髮元於、而多鬚毛者、寇便弱之較、見於於、鬚獨首發中、是具可麗也、如絲髮、則刀真首、揚之頭、雖死不敵、父母之遺體、知所謂立正位者、又無鬚汚血之類、頭注一塗泥也、自早之、俗云、鬚髮氣、先刀力、故不敵、父母之遺體、知所謂立正位者、又無鬚汚血之類、頭注一塗泥也、自早之、也、○燕、髮、頭注、而合鬚、乃血、伏劍死、則鬚散散之質、亦足以強力、而成功、而成功、則底鬚湯武之、仁義之、前、而興起我東方矣、、狀貌奇偉、從伐朝鮮、慶長三年、十

月、新寨之戰、綱宗被緋甲、與川上久智等、俱由故館道逐北、時明兵據拒石橋、綱宗拔刀長三尺、八寸、自道側前步、而出敵背、斬數十人、刀折、乃拔小刀八寸、八寸、復斬數十人、是時綱宗不被兜鍪、頭被創、危甚、衆大呼曰、綱宗不可不救、戰疾力、俱擊殺數百人、十一月、

復大戰於海上、綱宗與押川公近・黑田宅右、奮擊多殺敵、既而從還國、五年、綱宗祇役於京師、邸人有告綱宗禦人於都門之外者、雖事未明白、而命歸國、於是綱宗辭邸、而候風於浪華川口、一日晝寢於

舟中、有舟子誤墮於船樓、覆壓綱宗、綱宗猜有人逮捕已者、即拔刀

斬殺舟子數十人、既而知其為誤也、乃訴自引刀而謝罪、許之、於是正月五日、官遣有馬藤七兵衛・大井三右衛門、監視其死於浪華邸、時年二十七、歸葬隆盛院、法號勇悍誠忠居士按隆盛院過去稱、記慶長五年、十二月廿二日、監視綱宗自斃、今從此按、是歲上國亂起、以故院中蓋多事、綱宗亦普及十三月始達國、故過去稱、記其月日、或云、按久保之英所見聞秘記曰、慶長五年、八月廿二日、綱宗自殺於浪華邸、未知孰是、

野史氏曰、或云、大山三次修八尺有餘、力能扛鼎、善擊劍、而形貌艷冶本傳三次、蓋不洽、與說異、松齡公嘗謂左右曰、孤視三次會戰大敵、揮長刀而能無懼、譬猶猛虎驅犬羊、孤安於其必勝也、押川公近亦無懼、其進戰也、譬猶鷹隼逐鸛鶴、孤危其勝敵、按記、公近長不滿六尺而、旅力絕人、數有戰功、夫二子之勇、未知其孰賢、而聽

公言可異焉、蓋以其短長故、其所望見者有然耶、抑一子未得守約、而一子志念深矣耶、余不知其所以、一或云、三次奉命、使諸疾營、營中固知其勇候其趨見也、試呼猛犬而屬之、犬將攫三次之

腓噬之也戰國、、三次便手執而壓之於膝下、徐畢使言、破裂大口、則再拜辭去五字、、一又曰、府下惡少年、忌三次居倉卒無遽色窘步、欲試之令畏懼、乃相謀、伺其朝服將出門、使放怒牛觸之、三次疾視焉、牛則畏而蹶趨、亦可想見其勇鷲也、

大山肥前守綱秀初稱平七、又、、織部介經綱之次子也、為厩別當或云、初綱秀為顯建久、為厩別、、天正十四年、諸將攻岩屋城、綱秀從 公留在八代城、子六右衛門秀綱、幼為小姓、後繼父為厩別當、子伊豫介廣綱初稱三郎右衛門、、亦為厩別當、又為使衆、賜田祿五十石、轉徙鹿屋栗野地頭職、寬永八年、二月十五日、卒、慈眼公自作歌、使東鄉重位吊之即今大山權左衛門、、大山外記、蒲生人、天正中、松齡公選謀臣五十四人、外記其一人也、

大山帶刀長、殉死於公子歲久、法號喜叟淨慶上座、
大山三兵衛、入來院又六重通家臣也、寬永九年、六月廿八日、殉死
於重通、

野史氏曰、經綱死國難、幸綱勇悍過人、綱宗也亦兼人、雖不患其不
能為矣、而嫌疑之際不慎、終誤殺人、亦粗率矣哉、

遠矢重良列傳第九十四

遠矢阿波守重良、其先秩父將恒弟小五郎忠道、忠道之九世裔成兼、
始食邑於莫根一作阿、久根何、因為莫根氏、成兼之五世裔左衛門尉成友、成友
第二子左衛門尉成行、居遠矢莫根之、因更莫根氏為遠矢氏或云、成行能勝勁弓、嘗以
遠矢氏云、未知其說如何、、重良即成行之九世裔也、祖父兵部成郡、戰沒於隈
城、父八郎成則、亦戰沒於隈城、重良事 梅岳君、居田布施、無

男、以小宗常繁第二子為嗣、是日對馬守重勝、戰沒於川邊、子金兵
衛尉良兼、天文七年、梅岳君遣良兼謀加世田城、尋攻陷之、賜良
兼小刀備州煮、一口、十四年、戰沒於平松、子信濃守良時、為長野院在郡香
地頭職、天正九年、八月、從軍水股、十四年、七月、命良時及木脇
正徹、為島津忠隣傳、從軍筑紫、戰沒於竹田馱原後在豐、有孤稱又菊、
年甫三、獨與母居長野、貫明公以其曾祖三世死國事、故殊召之、
而加元服、稱金十郎、其後改名重珍、稱金兵衛、亦為長野地頭職、
天正十六年、從朝京畿、其後命重珍及伊地知六郎兵衛、航海勤成人
重山島球在魂、而病沒焉今遠矢金兵衛、
即重珍之裔也、

遠矢十郎三郎某、重勝第二子也、今子孫在長野云、

遠矢下總守良堅、重勝第三子也、永祿七年、良堅與近侍臣六十人、
俱從 松齡公移居飯野城、九年、十月、從攻三山、十年、十一月、
從攻高城城、先登被創、十一年、正月、菱刈隆秋來侵堂崎、公出
擊不利、窘於飛田瀨、良堅與財部傳內等俱殊死戰被創、八月十日、
伊東加賀守將伊東氏、引兵至飯野、結營於田原、廿日夜半、公遣良堅及黑
木播磨將精甲五十、設伏於葦原本地之深壑、明日黎旦、出兵鶉狩於
上小原上野狩就在別記、
小原在田原、、敵兵望見、縱兵追之、伏起夾擊、大破之、斬首過
當、元龜三年、五月、伊東氏遣兵攻加久藤城、公使良堅將兵五十
人、自間道急出敵背、良堅乃與久留半五、俱執槍先登、敵兵敗走、
天正間、公擢良堅等五十四人為謀臣、其後卒、法號悅岩榮松居
士、墳墓在恒吉德泉寺、今子孫在恒吉云、

遠矢軍兵衛、日州高城士也、戰沒於岩屋城前筑、
野史氏曰、

梅北國兼列傳第九十五

梅北國兼、初氏宮原、名景法、稱刑部左衛門、初梅北宮內左衛門
者、天文中、陣亡於加世田、無嗣、以故命景法續之祀、因冒梅北
氏、名國兼、亦稱宮內左衛門、為人也勇敢、而有智、國人徧知其
名、後為步卒將、食邑於北山山在船橋、、天文廿三年、九月十二日、從
大中公出軍岩劍、十三日、放火於脇元民屋、賊兵出戰、國兼與宅間
與八進衛、最、廿日、戰脇元、最、其後以蒲生氏黨菱刈北原賊故、
命國兼為山田地頭職、以鎮松坂城、弘治元年、十一月十八日、松坂
成兵至祁答院交市、國兼睨其亡、急使告之覺府、而覺府多事、遂不

果、二年、三月十五日、公進攻松坂城、國兼大呼曰、身是梅北宮內、先登當磚石、墮濠中、而身無恙、元龜三年、諸將討伊地知重興、軍桑作平崎、進圍牛根城、城兵開壁突出、重興及肝付援兵亦暴至、我兵敗走、是日國兼被白道服、衆指笑曰、白道服者震懼最早遁走、國兼御之、後我兵復與賊相迫、我不能進、彼不能退、會有賊一人、中矢倒兩陣間、時國兼戴赤毛笠、設金菖蒲立物長三尺許、立物說在別記、貫黑熊皮於刀鞘、而被白道服、拔腰刀長三尺有餘、抗頭上、大呼曰、我能斬賊、直突斬賊首、刀貫其首、旋轉復呼曰、白道服者既獲首、汝少年輩何不斬得之、前嘲笑者咸有慚色云、天正某年、國兼轉湯之尾地頭職、九年、從戰水股、十三年、閏八月、從 松齡公出軍佐敷、十五日、率兵出偵三舟城、是日城兵自拔而遁去、乃遣使白之 公、於是 公將諸軍馳至三舟、入城中、十四年、六月、從討筑紫、十五年、從 貫明公朝京師、文祿元年、春、豐公如肥之前州、結本營名護屋、而徵本邦諸將、使往擊朝鮮國、於是 松齡公自將赴之、國兼從至飛蘭島明記、公發兵之日、國兼獨留焉、而有隱謀、大言於部下曰、秀吉故奴隸、一旦以智勇馭群雄、挾天子令諸侯、然嘗攻殺君之子、凶暴殘忍、其所為皆是為身、不為天下後世慮者也、今又出無名之師、遠入異邦、百姓困苦怨望、父子暴骨於原野、此乃無道之極、殘賊之魁、予速發兵、雲蒸龍變、坑彼以拯民於水火之中也、因矯命誘我兵赴名護屋者、及邊境凶徒等二千餘人、而入肥之後州、六月、攻陷佐敷城、以為巢窟、又使田尻但馬父子攻八代城、但馬進放火於松葉瀨、軍小川、肥後人松浦筑前率兵襲小川、但馬父子及從卒一百餘人皆戰沒、國兼僕山蜘蛛者、剛勇絕衆、侵掠近邨、而國兼留在佐敷、境善左衛門佐敷者、與邑人安田彌右衛門謀、聚美女而燕享國兼、國兼及從兵皆大醉、莫能起、善左乃擊盡殺之、函其首、獻之於

名護屋營、於是豐公大怒、執國兼妻子、盡磔之於名護屋、附錄

田尻但馬初稱荒、伊作邑田尻村農民也、性勇悍、及 梅岳君攻加世田城、新納康久召但馬曰、汝若放火烧城營、我白君、擢汝為士、

且以女妻焉、但馬曰、謹奉教、乃潛入城、燒盡營壁、於是 君擢之為士、康久乃以其女妻之、天文十七年、八月、但馬從伊集院忠

朗攻日當山城、先登斬賊七八人、九月、從戰姬木、先登陵畧放火、斬捕頗多、天正十年、冬、松齡公遣但馬及帖佐彦左等八

人、率兵往救筑後田尻氏、而番成高知尾城、十二年、春、俱班師、後黨國兼、與二子荒二郎荒五郎荒五郎妻太田氏、少忠、後長女云、俱被殺宇野史氏曰、但馬善撫士

東鄉重影、稱甚右衛門、入來院重時家臣也、朝鮮之役起、重時有病、不能赴、因命重影及入來院重興、各將兵士七十五人俱往焉、

而重影黨國兼、與從兵俱就所在被誅、而重影父備前重光、及從兵親族亦皆被誅、

荒尾嘉兵衛者、田尻但馬叔父、黨但馬、被誅於市之瀨在肥前、伊集院參河、黨但馬、被誅於始良在肥前、

梅北照存坊、率兵士四人、從諸將征琉球、及國王出降、王之支族或有不肯降者、是時照存與法元仁右衛門等、追破之於敷菜野、而二人

俱被創、野史氏曰、或曰、夫候時徼危者、未有不滅其身者、然國兼如與其黨

二千人、陳船直指名護屋、則明智氏之變復生於今日、亦不可知、故以為國兼智計、不如光秀也、又曰、國兼策馬臨陣、叱咤風生周書行、

可謂壯士矣、而謀叛族滅、譬猶金盃玉盃乃貯狗矢乎孫茂、

入田義實列傳第九十六

入田丹後守義實、號宗和、其先大友氏四世因幡守親吉（傳時）第二子左馬頭（一作兵部）、泰親為入田城主（在豐後）、因為入田氏、泰親生豐後守氏綱、氏綱生豐前守氏賴、氏賴生因幡守親忠、親忠生丹後守氏廣、氏廣生出羽守親廣、親廣生兵庫頭親廉、親廉生掃部頭親直、親直生義實、義實事大友氏為神原城主、而大友氏有罪法事、義實憤怨、因據神原城、事聞我、以故 貫明公使新納忠元遣書於義實、（頭注）以勸以下五字、一作勸令歸附、中書家口又遣書亦如 公言、松齡公亦使佐多越後守・八木嘉竹・使入田城、且贈兵器、於是義實使家臣吉良甲斐・阿蘇勘解由・報 松齡公於八代城、曰、君如有事豐後、臣請獻策、公乃見二使故通殷勤之意、（頭注）每遣書勸請退、而後還去、天正十四年、二月、義實遣堀某告上井覺兼曰、志賀道益（家老）與已同志、以納欵於薩、由是覺兼亦寓書于義實使者、以通道益、因固其屬我之志、事在道益傳、十月、松齡公自帥諸將赴豐後、義實及道益出迎 公、而具陳便宜、至夜、導俱入入田城、因嚴下軍令、悉定部署、自此諸城多降屬我、（頭注）訛妻為藤一族、南北、十二月、利滿之戰、義實一族家臣勲勞殊侔、 貫明公賜書賞其功、十五年、豐公大衆西下、是時九州新屬於我、諸城多叛應彼、獨義實不變盟約、（頭注）兼巡初守唯賜、遂從至薩、其後賜後川內（在香原）田祿一千餘石、因移居焉、義實初謁 貫明公時獻太刀及二種一荷云（說在別家老）、卒時不知年月、子掃部頭氏隆、從軍朝鮮及關原、慶長五年、分高岡別為一外城、命氏隆・及伊地知佐渡守・伊集院助右衛門・平田大休坊以物頭役移高岡（鹿島駿河・平田大休坊為地頭相讓後、其後氏隆上書願移居覺府、 貫明公下令曰、高岡國之封疆、宜嚴守禦、子從軍屢有功、要留子保護焉、因世々居高岡云、初氏隆始謁 松齡公、而獻太刀及二種一荷、其後每謁見輒獻太刀、子刑部親宣、後更稱與三右衛門、始謁見 公之禮、一切從父祖之例云、後騎從 慈眼

公、赴浪華、寬永中、又騎從朝京師（今高岡土入田與三右衛門、即親至子孫也）、

入田右衛門輝氏、號半林、義實次弟也、天文四年、生於入田城、及長大友義鑑使輝氏守馬箇嶽城、天正十四年、與兄俱通志於我、十五年、俱來薩、命居之高崎（在信州）、及兄卒、子氏隆猶幼、輝氏左右之、及長續父後、輝氏子右近將監義氏、陣没山田城（在內）、子九右衛門義昌、告官去高崎、出居北肥、其後復歸、後移居高岡、子九右衛門義豐、移居覺府（今入田諸右衛門、即義豐之子孫也）、

入田筑後如心（初稱治部、少輔、義實第三弟、俱來事我（今入田平右衛門、即如心裔也）、

入田左馬介親增、號增二、入田相模守親門（大友氏支族）第二子右衛門入道常雄長男也、天正十四年、與義實俱降屬我、十五年、與俱來薩、及賜義實田祿一千五十石、義實分與親增二百石云、慶長四年、我有事於莊內、設關於繩瀨、遣親增及諸士交番焉、子東市正親正、先戰沒於朝鮮、子右馬介、移居高岡、

入田市之允、從 慈眼公赴朝鮮（或云、市之允與東市正、親正同人、後再考）、

入田丹慶鎮氏（或云、入田親壽之十世孫、鎮氏之弟也）、與義實俱來薩、後義實分與鎮氏田祿二百石、移居高岡、後命移居覺府、增賜田祿二百石（或曰、鎮氏之三世孫親照從房坊津、至八世孫亮中、權為府下士云）、野史氏曰、

上野忠元列傳第九十七

上野隼人佐忠元、居西之原（在信濃）、從 松齡公戰木崎原、擊敵將米良筑後、斬其首、又從攻三山高原及其降屬我、使忠元移居本城水手口

山三、後為步卒將、移居吉田在真幸、院、天正十四年、從軍豐後、七月、攻鷹取城人、俱為軍事參謀云、六日、忠元與敵將土師兵庫疾鬪、相俱刺而死、子隼人佐忠則、號宗秋、天正九年生、文祿三年、十二月十日、松齡公召忠則於栗野、而加冠、稱彥三郎、四年、移居栗野、慶長五年、又移須木、四年、從邑宰邨尾重侯擊莊內、五年、與邨尾重昌俱攻破義門寺在、斬坂屋原彌助首、而躬被四創、六年、慈眼公召忠則、至細島在、命亦稱隼人佐云、八年、命忠則行射儀於覺城、承應二年、七月、忠則年七十三、為一世自記、卒時不知年月、至今子孫猶在須木邑、

上野伴助、清武士也、從邑宰伊集院久春、攻岩屋城、力戰被創、

上野半介、公子家口家士也、天正六年、從守高城、又從力戰於堅志田、

上野權右衛門泰房、橋口對馬弟也、為慈眼公圍人、朝鮮之役、從出獵於昌原山、為猛虎所害死、

野史氏曰、

黑田賴清列傳第九十八

黑田賴清、稱嘉兵衛初稱文右、衛門、兄曰黑田六郎左衛門、初賴清居市坊、後拔擢士列云云之或云、賴清、右典殿忠特違腹、母黑田氏、因冒之云、及朝鮮之役起、以自賦從焉、慶長三年、新寨之戰、賴清撰紺緇甲、執朱漆橐十錢鉛子鳥銃、先衆多斃敵、四年、從伐莊內、志和地城陷之日、賴清與新納久宣先登於高城城門名、是時慶、田彌吉亦俱登云、、倉卒間、人不審其前後、公召而問焉、賴清曰、臣見

久宣先登、問于久宣曰、臣從賴清而登、公顧左右曰、善哉、二人（頭注）有勇且克讓、使孤有若是臣十人、討叛柔服、何憂之有、因兩賞賜

之、貫明公在京畿、命賴清及新納右衛門為能瀨藏奉行、五年、從戰關原、松齡公嘗賜賴清陣羽織、至今藏子孫黑田新左衛門清直家云

賴清卒時年九月、或云、松原山中有古墳、彫刻寬永四年、二月廿三日、昌荃淨整居士、黑田賴清十九字、是則今黑田清熙之祖先之墓賴清之墓、而非嘉兵衛賴清之墓也云、

黑田與一左衛門貞武、從戰朝鮮及關原、從而歸國、賜褒牒及田祿五十石、貞武子孫今在柁城云、

黑田七兵衛貞昌、柁城人也、從軍朝鮮、慶長四年、春、慈眼公誅伊集院幸侃於伏水邸、其妻使三原大藏密告變都城、新納旅荈聞而知之、於是遣貞昌往捕大藏於路、是時貞昌被謫於綾邑、故旅荈有命焉而原其罪、五年、貞昌從擊破伏水城、元和元年、浪華城陷、其後堀內大學助藤原右京亮者二人來薩而告曰、我等跡秀賴君所、而西下、於是官遣貞昌追捕二人、而送之東武送之板倉伊、賀守所云、、貞昌死時不知年月、子孫今為島津助之丞家臣云、

黑田宅右衛門、慶府人也、從伐朝鮮、我軍衝敵艦之日、宅右與押川公近・大山綱宗等同舟進戰、時敵兵奪金駉旗、宅右乃飛上敵艦、奪而還、既而歸國、

黑田六郎左衛門、從入朝鮮、

黑田石見入道、永祿間、賊魁肝付兼名堀城率兵至數根、放火於上井城麓、石見與隅州兵出戰有功、後石見徙居高岡云、野史氏曰、

黑木實利列傳第九十九

黑木播磨守實利、蕨野伊豫守第三弟也、永祿六年、從 松齡公徙居飯野城、十一年、八月、伊東義祐遣伊東加賀守屯於田原砦、以覘我虛實、於是 公命實利及遠矢重堅、各率兵五十人、乘夜潛出城、伏於葦原、且日猝起斬敵數百人、語在重堅傳、元龜三年、五月、從大破義祐兵於木崎原^{此實利妻親家、與二種持來戰之、松齡、天正間、公選智勇臣五十人、四人為軍事參謀、實利其一也、卒時不知年月、墳墓在飯野} 天公子墓側、實利二男、長子某、陣沒於朝鮮、次子播磨、年十七、從軍朝鮮、今子孫在飯野邑、

黑木七兵衛、天文廿三年、從攻岩劍城、九月、與鬼塚吉內俱入謀城中、遇敵斬殺三人、而與俱死之、

黑木彦右衛門、從 松齡公伐朝鮮、

黑木左近兵衛重室^{初稱太郎}、福山士也、從入朝鮮、南海之戰、敵奪我駟旗而去、重室乃泳海上敵艦、奪而歸、從反國、既而聞上國軍起、重室屬山田有榮、自薩日夜馳至濃之關原、軍破、從而還國、賜褒牒及田祿五十石、寬永五年、以山田有榮為出水邑宰、又使重室移居出水、賜田祿若干石、寬文六年、十月十七日、卒、法號久山元良居士、子孫今猶在出水、

黑木宗左衛門、與伊勢貞昌等同舟赴朝鮮、

黑木甚右衛門、從伐朝鮮、

野史氏曰、

久保行久列傳第八

久保行久、稱伊豆守、其先出於

孝元天皇皇子彥太忍命之二十餘世孫右京大夫紀貫之^{自貫之至行久、行久事}

梅岳君、後 松齡公舉為軍事參謀、數從公有功、一長子行經、稱伊

豫守、從伐朝鮮、戰沒於牧司城、一子子行政、稱平內左衛門、嗣父

後、慈眼公為 公子也、以行政為傳、當是時、公未有食邑、行政

以所領日州竈箇門田五十町獻之 公、以資其費用^{按諸家大概記、行政從松齡公在飯}

野城、後以代官役兼兵糧運送奉行

惡、以邪術惑世、多為 公家之害、於是官選逞勇者、以公命往擊殺

之意^{此上}、而人々恐其強暴、不敢進、之盛獨行、以理屈服彼而自殺、

年十六、朝鮮之役起、之盛不告父母、潛乘火藥船至 慈眼公軍、晨

夕不離 公側、數有功、公以為之盛之勇賢於押川六兵衛、因賜稱

七兵衛、松齡公嘗賜之盛軍扇、及鳥銃^{十餘鎗}、小刀^{下坂所製、長、九寸五節、}、新寨之捷

也、賜褒牒以賞功^{實此段也、公賞賜將士有功者褒牒及白銀若干、及歸國、諸士相謂曰、}、及從如伏

水、幸侃叛逆事覺、慈眼公密命之盛使國、而謀欲誅幸侃事於 貫

明公^{是時幸侃盛年猶少、恐有士大夫與之、於是有士大夫與之、公在太龍寺、御座}

形、之盛入參之、公聽焉、而許之、之盛乃過其門而不入、直馳反命伏水

邸、後從戰莊內、又從軍關原、兵刃既接、之盛馳先衆、及軍敗、之

盛等五人^{川上忠兒、川上忠林、川上忠、川上忠、川上忠、合之盛五人、}、執槍而殿焉、遂俱得全而還國、慈眼公賞

賜之盛腰刀^{所作}、既而從討稻津賊、及 慈眼公初朝東武、命之盛掌

掖庭事、是時 公手自酌酒賜之、後之盛以其殊遇欲殉死以報於

公、公許之、及 公薨、遺言使免之盛死、而事 寬陽公、及是

時、以銳武老臣多死亡之故也云、正保四年、正月十二日、卒、法號

半繁翁玄茂居士、一子之昌、稱平內左衛門、事 慈眼 寬陽二公、

從戰島原、之昌性篤厚好學、又學擊劍於東鄉重位、通其術、以故當

時士大夫多慕之者今久保平內在衛門、即今久保之子孫也。

久保平次郎安高、其先山下忠算者、食邑於谷山在日州三股院、是時更山下氏

始為久保氏云、父曰五次兵衛安次居於川邊、天正八年、安高陣沒朝鮮、即安高裔也。

久保筑前之重初稱八、又作勝八、、姓紀、其先不知何許人、之重為新納忠元附衆

中、居市山及大口城、每從軍有功、永祿十一年、二月、島津家口等

來市山城忠元所、守智所、、俱議軍事、將歸、之重從忠元送至小苗代原、忠元道

遙詣藥師祠、題柱頭曰、花下睡猫心在舞蝶、是時大口賊猝至、之重

曰、寇至、忠元從容猶執筆、賊魁竹添丹後撥槍刺忠元左腹、之重遽

取忠元足引下牀下、忠元乃拔刀斬丹後以上與忠元、傳小異、、後伊勢貞成及弟貞昌

曰、二人為人如何、之重曰、貞成君驍勇絕倫、及長必忠武、貞昌君

才智超群、俱是一時之傑、後果如其言、及忠元薙髮號為舟、之重亦

剃髮號舟帆、謂忠元曰、君已為舟、能以乘主也、僕則為帆、輒送君

等於便處、文祿元年、壬辰、三月、之重與押川公近誅賊臣權兵於佐

賀在豐、後、、事在公近事中、之重男與七兵衛之真、居大口、至孫休益、

寬陽公命移居慶府休益性嗜、茶儀云、、今久保五次右衛門即其子孫也、

久保盛左衛門、從軍朝鮮、

野史氏曰、

西藩烈士干城錄卷之廿八

西藩烈士干城錄卷之廿八

卷之廿九

卷之三十

卷之三十一

卷之三十二

野邨利綱

有馬重純

鮫島宗秋

大河平隆屋

橫山玄蕃

面高英俊

赤塚真賢

稅所敦朝

松岡勝兵

宅間与八

本郷義則

川内源五

酒瀨川武安

池田貞秀

財部盛弘

甲斐重種

久留半五

酒匂新左

家村重昭

田中掃部

帖佐宗光

平野友治

堀丹後

猪股左近

竹内實康

日高義秋

肥後盛秀

鳥丸重統

市成掃部

阿多加賀

瀬戸口重勝

富山備中

今井兼諫

有川常盛

安樂兼惟

大寺大炊

指宿忠政

川越重賢

佐谷田重遭

大脇利為

飯牟礼光家

蒲地五郎

小川有季

大重久實

大迫元勝

鬼塚助八

鹿島重國

鹿島重國

西藩烈士干城錄

廿九之

西藩烈士干城錄卷之廿九

野邨利綱列傳第百一

野邨美作守利綱又稱彌四輔、其先佐々木三郎盛綱之裔野村左衛門賴親、

食邑野村任江、而伊東信濃守一族也、賴親之末葉但馬守義綱、義綱生

治部丞良綱一作玄綱、義綱、第四男也、良綱生太郎左衛門日綱一作次郎左衛門、高成、日綱生太郎左衛

門康綱初稱上郎、四郎、康綱生左衛門尉義口、義口生美作守斯綱初稱少輔、四郎、斯綱

為平佐地頭職、戰功居多、梅岳君賜褒牒以賞之云、斯綱生美作守

秀綱初稱少輔、四郎、亦為平佐地頭職、秀綱生利綱、自義綱至利綱凡八世、

而不知何世始來薩、利綱為山野地頭職、利綱生美作守良口初稱少輔、四郎、

亦為山野地頭職、天正十三年、九月、松齡公使良口及鮫島備後、

自八代使覺府、十五年、從貫明公謁豐公於泰平寺、其後命良口學兵

法於岩切雅樂介・町田越中守、良口生太郎左衛門元綱初稱少輔、四郎、充綱初

居出水邑、後移水引邑、萬治三年、寬陽公命移居覺府、而學兵法

於志和屋左京、悉傳其術、以是傳之於公、子四郎左衛門景綱

初稱少輔、四郎、傳受兵法於父、官賜六人賦今野村兵部、即、泉綱子孫也、

野村右衛門佐良口、父越後守宣綱、祖左衛門義口見子明、宣綱、蓋義口字、天正四

年、八月十九日、良口戰沒於高原、子大學助元綱、初為右筆、後為

用人、賜串木野地頭職、子右衛門佐真綱、為奏者番・及町奉行今野村太郎、即、

野村狩野介信綱、吉田人、父日丹後守友綱見子明、宣綱、蓋義口字、而屬部下、蓋友綱也、友綱父

日新左衛門宗綱、宗綱父日丹後守方綱、方綱父日十郎左衛門存綱、

存綱父日次郎左衛門高成一作太郎左衛門日綱、與見子明蓋同、存綱、高成之第子也、高成父日治部丞良綱

見子、天正中、撰信綱等五十四人為謀臣、十五年、四月、援山田有信

入成高城、六月、從貫明公朝京師、信綱無男、以伊集院藏人第三

子為養子、繼已後、冒野村氏、名全綱、稱勘兵衛、後亦稱狩野介初稱

衛門、今野村勘兵衛、即全綱也、

野郎大炊兵衛豐綱初稱少輔、四郎、志布志人按豐綱自記、豐綱官武士、蓋豐綱、志布志人、而從豐綱移居官崎也、父日佐渡守直綱

初稱源左衛門、又七郎左衛門、天正中、擢謀臣五十四人、豐綱其一也、文祿四年、十

二月、從松齡公朝京師、子後藤兵衛教綱初稱少輔、四郎、孫彌次郎某、及東

西軍起、自薩馳至大垣、與川內源吾出謀敵營、敵覺而逐之、彌次郎

退而誤墮鳥銃、愧之、乃反復執而還營、九月十五日、西師敗績於關

原、彌次郎力戰死、無男、弟與兵衛重綱初稱少輔、四郎、為之後今野村與右衛門、

野村左近、宮崎士也、天正十三年、陳沒於岩屋城、

野村主水佐、宮崎士也、岩屋之役、先登而中石、

野郎甚助、宮崎士、天正十三年、閏八月、從戰隈莊、多斬捕、

野郎備中守文綱初稱少輔、四郎、又、祖日肥前守元綱、父日但馬守松綱、文綱事

伊東義祐、為內山城主在日、天正五年、十二月、叛伊東氏而降我、初

文綱叔母名福、為義益之妾適子、既而家臣伊東大炊助約一條權中納言兼

定司佐國、之女、以為義益之夫人、未歸、而義益疾退去其妾、及夫人來

歸、妬甚、竊命殺之、於是野村氏一族皆怨焉、後夫人有子三人、而

義益早沒年四、自此夫人驕奢日甚、而大炊助為世子傳、與夫人通、野

村黨聞焉、而益惡之、義祐亦日疏遠、當是時、福永丹波亦有恨君之

事、於是文綱與丹波相謀、而通志於我、由是義祐勢日孤弱、日州遂

為我有、二人之為也、貫明公賞其功、賜文綱內山城如舊云、十一

年、十月、文綱出成八代城、時宇都氏將兵侵隈莊、則命文綱為監

軍、至隈莊、而為宇都氏將嘉悅信濃所擊破、亡兵四十餘人、引還八

代、其後豐臣氏西下、公改賜文綱山田城在備、以其嘗有勤勞於我之

故也、文綱三男、長吉次昌綱、陣亡於朝鮮、次但馬守幸綱初稱少輔、四郎、嗣

父後門即其子孫也、次縫殿助君綱初稱少輔、四郎、為國分於香番詳、及荷物役今野村清兵

也、

野邨加賀守重綱初稱盛助、又、肥前守元綱第四子、而文綱季父也、與俱來降我、以功遷從八代志和須崎地頭職、後從 貫明公朝京師、子市右衛門清綱初稱三郎、又稱、又六、為高江地頭職、從戰豐後、豐臣氏西下之日、拒戰有功、又從伐朝鮮、今野村源左衛門、即其子孫也、

野村吉右衛門吉綱初名存綱、稱四郎次、又宮內少輔、文綱弟、俱事 貫明公、賜田祿一千石、無男、以日置吉兵衛久長子而為養子、名國綱、稱彌平、事 慈眼公、子寬綱、公手自加冠、稱源四郎、後更太兵衛一作太郎、累遷吟味役・金山奉行・船奉行・及江都浪華知邸、而為馬越地頭職、今野村嘉左衛門、即其子孫也、

野村與左衛門、初姓上原、名久田、稱織部介、出為野邨其嗣、因冒野村氏、以兵具奉行從入朝鮮、後陣沒於閔原、

野村安右衛門、從軍朝鮮、又從征琉球是時兵賦稱云、野村安、右衛門出四人、

野村早左衛門宗綱、從 松齡公戰朝鮮、

野村藤藏蓋公字家口、陣沒於山田城在莊內、應長四年、六月念三日、法號丹臺香桂上院、墳墓在佐土原天昌寺、

野村宮内少輔、天正十二年以下闕、

野村兵部少輔憲綱、其先佐々木左衛門宣綱、建久中、始來薩、而子孫世々居川邊邑、六世祖太郎左衛門康綱、陣沒於加世田、憲綱事

大中公有戰功、後陣沒於牛根、子民部少輔是綱、事 貫明公為近侍按薩記、野村民部少輔、事 貫明公見通、天正十年、十一月三日、夜、為賊所殺、求而不得、有人言殺彼者阿多原本、平野新左衛門、二人開焉、乃遂其說、是時我兵番成八代、官議以為二賊、或有違礙於彼者、於是本山下等遣書於八代番成曰、二賊如有焉、速可誅之、而不知其所之、十二年、正月廿日、使鎌田刑部左衛門下教曰、前日頭桂左、馬介朝京師、獲二賊於路、即傳送於薩、而誅之於福娃邑、因明告之于國中云、子藏人綱堅、事松齡公於

柅城、為番頭、至綱堅曾孫與四郎、居日當山、以系譜及傳家書籍讓之小宗喜兵衛者云喜兵衛、即綱堅次子六左衛門之後、野史氏曰、今野村喜兵衛、即其子孫也、

面高英俊列傳第百二

面高有泉作泉、坊英俊、其先不知何許人、世以解魔法師居市來邊境諸家公傳、肥前地名面高、蓋英俊、永祿四年、二月十日、英俊奉 大中公命、與子賴俊俱詣鶴岡八幡祠在相、六年、將婦、道經京師、使匠製八幡像三、自負而歸薩、即今清水八幡祠是也、英俊卒、真蓮坊賴俊嗣、永祿九年、十月十五日、從攻小林城、□年、使至京師、謁將軍義照、義照乃賜賴俊腰刀及馬、其後賴俊數奉使他邦、及織田信長遣使至我、使賴俊復報京師、後從軍屢有功、貫明公謂賴俊曰、若日州尽屬我麾下、賜子以善哉坊在深年、天正四年、我有事於日州、賴俊先登巖善哉坊、逐出院主、而已自為院主、八年、庚辰、十二月七日、國老上井覺兼・伊集院忠棟為簡牒、以封賴俊為阿院俱在日州、惣先達職、及我有事於肥豐筑、賴俊運計策於諸方、多勤勞、頭注、十二年間蓋有關文數字、遣賴俊使京師、又使鎌田刑部使京師及中國毛利氏、而謁將軍義照、義照賜 貫明公奧馬二疋、松齡公諱一字、於是遣賴俊往受焉、我之討阿蘇氏也、公子家口使賴俊及井尻常陸坊至高知尾、護質子西越後守而帰、十五年、豐公先鋒至日州、而本食上人山、一色某來議和、公乃又遣賴俊報之、因質伊集院幸侃於秀長營、而使賴俊導送之、及喜入氏・平田氏・山田氏、皆出質、賴俊復導焉、公賞其功、賜賴俊大腰刀、既而從 公朝京師、會 公有病、使賴俊使愛宕山長床坊禱病、不日平愈、從而歸國、翌年從 松齡公復朝京師、慶長五年、二月、莊内賊

降、則遣賴俊及入來院重時使上國、而白之。東照公、則召而賜食於公前、使事畢而歸國、及關原役後、貫明公使比志島國貞奉東照公書、且告賴俊曰、雖子老矣、而為國家奉使於上國、於是賴俊往見井伊山口二氏、約和議而帰、賞賜田祿一百石、其後卒、則召子真蓮坊初云連長坊、俊昌於慶府、而賜田祿三百石、以報父之舊勲也、文祿二年、從慈眼公赴朝鮮、追亡深入敵境是時俊昌有日記、行於世、泗川之戰、俊昌被朱縵甲、多殺敵元和六年、田鞏稱、有中原文連坊者、蓋俊昌、別稱中原氏也、今高連院長院、即俊昌裔也、

面高祐泉坊、賴俊第二子、當兄俊昌移居慶府、官賜祐泉田祿百石、以為善哉坊住職坊住職、祐泉、俊昌之次子、俊昌移居慶府之時、以其弟士馬為善哉、是時有故遺馬移居出水邑、因以祐泉為住職云、傳唐考、

面高主馬、賴俊次子也、初為解魔法師、後慈眼公命還俗、以為兵具奉行、其後山田有榮為出水邑宰、主馬亦從移居焉、因賜田祿五十石、子亦稱主馬、寬文中、長島邑有一向宗亂、是時命主馬、及山田主計、木脇刑部、往理之、及事平、賞賜田祿三十石、
野史氏曰、

本鄉義則列傳第百三

本鄉伊豫守義則、姓源幼名貞則、稱左京大夫、又兵左衛門尉、又久左衛門尉、其先赤松氏枝族、以玉川為氏、後改玉川為本鄉氏、初義則事備前黃門秀家體輝號、以善射御、且能書親近之、及秀家流落於薩、被放於八丈島、以其多蒙我恩故、留義則事我、慈眼公乃學射於義則、甚尊寵之、義則為人敦厚周慎、我州賢士大夫無不愛重之、元和元年、乙卯、三月廿五日、卒、葬於興國寺、法號射弓院殿俊巖良英大居士、至今墓碑猶存焉、慈眼公屬國風追悼之曰、捺列捺列閩・密矢郁訥偕兒木・葛及栗續篤、烏賞

祿膚偕捺訥・遏篤訥葛捺矢察、
野史氏曰、予聞之父老曰、義則為人英敏、讀書好道、博學明辨、且能書、出必帶筆墨、手則常着決拾、又叩禪室、俱談妙理、時人稱之為不器之才、豈其不然哉、

甲斐重種列傳第百四

甲斐右馬頭重種、其先中納言義次、
円融帝嘗封義次以甲州之地、於是天元元年、戊寅、義次往討甲賊、而居焉、因稱甲斐判官源義盛、義盛生大和守義重、義重無男、以新羅三郎義光第二子為養子、是日出雲守義盛、始為武田氏、義盛生中務少輔則義、保元之亂、戰沒於白河、則義生大膳大夫義高、保元之亂、不能保甲州、出奔伊豫、而更武田氏為甲斐氏、義高生甲斐越前大夫重義、元曆元年、去伊豫、始之高知尾州在日、而居田代、重義生越前守氏重、氏重生帶刀長重堅、重堅生越前守重忠、重忠生加賀守重家、重家生左衛門重廣、重廣生大和守重時、重時生太郎左衛門重成、重成與求麻兵戰而敗走、乃去田代居保江尾在高知、重成生出羽守重安、重安去保江居三門、重安生出羽守重賴、重賴生筑前守重張、重張生播磨守重高、重高生備後守重滿、重滿復移居田代、而生重種、天正六年、十月、大友氏來寇日州、攻田代、重種守禦力不能、遂沒陣、其子權助重次、猶幼、故重種弟右京亮重尚假知城事、而撰家政、後大友氏運計策、高知尾諸城多為彼有、重尚獨屬我成田代城、以故十三年、秋、中書家口至高知尾、入田代城、而授之計策、俱進陷石權城佐賀郡少、尋陷小崎城甲斐高門、餘黨不能拒、悉出質而降我、乃以重尚為山中地頭職、十四年、十月、家口由日州入豐後、陷小牧野

津二城、是時柴田禮能據丹生島城、志賀道輝據岡城、俱往來為我軍妨礙、於是遣重尚將高知尾兵據小牧城、以佐我軍形勢、十五年、二月十八日、岡城寇來襲小牧鍋田二城、重尚遂敗死重尚從兵可餘人及家口家臣四戰沒、無男、以兄重種次子嗣之後、是日掃部重則、及豐公西下、重則所領地盡為高橋右近所有、於是 松齡公請之豐公、而復賜重則舊領、十六年、高橋氏發兵來襲、重則敗走、與兄重次至佐土原、賴中書豐久、後來居覺府、重次則去為豐州家臣云、重則有男、曰右京亮重政、今甲斐正右衛門其子孫也、

甲斐勝介、從征琉球、
野史氏曰、

帖佐宗光列傳第百五

帖佐宗光自稱彥左衛門尉、父曰淡治宗治、事 松齡公為步卒將、討莊內賊、慈眼公遣宗治進攻山田城、宗治身禽賊二人、其後卒、宗光繼為步卒將、初天正十年、冬、松齡公遣宗光等將兵往援田尻中務少輔鑑種、而番戌柳川城後在、至翌年四月十八日、賜書而慰其勞、十二年、春、還國、十三年、從赴肥後、水股之戰、先登斬敵、十四年、從軍豐後、公使宗光使公子家口軍、則家口乃請留之、十二月九日、我軍進陷緒方城、宗光身自斬首二級、十二日、與京軍戰於利滿城下、宗光身自斬首五級、翌年三月、從歸佐土原、四月、豐公先鋒羽柴秀長大兵進至日州、連營五十餘所、威勢大震、於是家口使宗光使覺府謂公曰、秀吉既畧定中原、威震四海、今大兵來寇、是誠國家危急之秋也、願我以屬先死之、公等整衆繼之、或可以逞、二公

遣使止之、不聽、於是 松齡公復遣宗光固止、亦不聽、宗光乃袒裼拔刀、而謂家口曰、公子如不聽、臣先自殺狗事、家口急止曰、我聽汝、我不忍徒殺汝、遂不死寇、宗光之力也野史氏曰、長祿之役、甲之請諫其去、反諫身未諫也、非其從甲而巳也、故促甲而巳也、甲之請諫其去、反諫身未諫也、非其從甲而巳也、故促甲而巳也、甲之請諫其去、反諫身未諫也、非其從甲而巳也、故促甲而巳也、

也、十六年、七月、豐公賜我播撰二州之田合一萬石、公遣宗光及市來掃部為之宰此云代、於是二人俱至伏水邸、遙領二州之田、十八年、從 一唯世子赴小田原、斬敵二人、而身被創、世子賞賜黑

緋甲、既而從歸國、文祿元年、從軍朝鮮、主運糧造營及大藥事俗此云積藥議方、是時 世子賜宗光利刀一口長一尺五寸、名鐮子刺、其後 慈眼公賜宗光

書、賞其久勞軍務、慶長三年、從班師、直從朝京師、四年、春、慈眼公使宗光使覺府、潛告伊集院幸侃有叛心、而還報、六月、從復歸國、又從討莊內賊、廿三日、從攻山田城、宗光身斬賊首三級、從兵捕八人、翌日、命宗光復使伏水、則 松齡公留居之焉、五年、八月初一日、從攻伏水城、斬敵十數人、九月十五日、從戰關原、軍敗

是役也、宗光家臣三人戰沒、二人失其處、歸後雖兵衛、六口、與市、大室三吉、野元源二兵衛、團人荒助等、皆捕而後云、宗光始終不離公側、遂得俱全而歸國、十月、賜褒牒及田祿若干石、元和二年、三月十日、卒、年五十七、法號竹隱榮修居士、墳墓在南林寺、子宗康、稱長右衛門、夫妻俱為 寬陽公抱守、今帖佐彥左衛門、其子孫也、

帖佐久右衛門、從赴朝鮮、南海之戰失其處、帖佐治部少輔、領祿一百石、而以 松齡公御手廻從入朝鮮、勤勞凡三年慶長三年、十一月、戰沒於海上、無男、官以肥後盛增稱宗右衛門、長子嗣之後、冒帖佐氏、是日彌左衛門是時盛增別以其所食田祿百石附乘之、慶長十九年、十一月、從赴浪華兵賦種云、彌左衛門出、兵子四人、馬一疋、元和五年、七月、命諸士各以

所食田祿四分一獻之於官府、彌左衛門獻五十石、領百五十石、寬永中、彌左衛門祇役於江都、僑居於邸外、隣有彌作者、本小笠原氏之家臣、冒罪出奔、來居於此、彌左衛門與之為知音、既而小笠原氏遣人糾索之、彌作事急、逋竄於彌左衛門所、小笠原氏來告之於我邸、事波及彌左衛門、因没入其所領田祿及宅地、而逐出之佐邦、彌左衛門流落居于淺艸凡八九年、萬治元年、十二月廿三日、遂病死、子治部宗典、特召復事我焉、

帖佐六七、從伐朝鮮、軍暇、公獵於昌原山、六七為猛虎所傷左股、三日而死、年二十二、六七赴役之日、詣米山藥師堂傳、屬國歌曰、
イノチアラバ、マタモキテ、ヨネヤマノノドウノ
乙訥質遏刺跋・密怛木吉閩密武・郁念鷓鴣訥、鷓鴣失訥獨烏訥・訥
キバアラサスナ
吉跋遏刺斯捺、及死日、人皆悼之、六七為人勇悍、嘗遇怒牛於山蹊、瞋目叱之、牛不敢觸而犇去云、

解魔法師帖佐三五坊、宗光之氏族、天正十年、十月十五日、從攻矢崎城、

帖佐越後守、松齡公在飯野城時、與越後・及和田圓覺・佐谷田武藏、每俱謀軍事、三人忘身盡職云、
野史氏曰、

日高義秋列傳第百六

日高義秋、自稱與市左衛門、號慶月、其先多田源賢、食邑日高郡舊方七百五十町之地、因以為日高氏、而不知何世始來居於薩云、父曰但馬守義朗、兄曰義治、屬島津實久居市來城、義治更為多田氏、稱

紀伊介、義秋獨來事 梅岳君、君賜之市來邑方八町之地、因命義

秋說義治降屬我、不聽、實久聞之、急發兵襲市來城、擊殺義治及妻子、其後義秋卒、子甚四郎義宗嗣、戰沒於肥州、法號源貞、子紀伊守正治初稱善五郎、掃部左衛門、母長谷場慶純女、永祿十一年、三月廿三日、與祢

答院賊戰於永福寺本傳有功、木崎原之戰、正治執槍與久留半五俱先登殺敵、敵又競來事甚危、遠矢下總來援、而得免、既還、二人爭功、

松齡公斷曰、正治以槍先刺、半五以刀先斬、俱是同功、各賞賜田祿若干石、子與市左衛門正恒、母勝目加賀姊、從伐朝鮮、又從征琉球

恒出三人、正、元和三年、為川南村在小根代官豐長中、田祿壹、正恒領百十三石、恒領八十四石、子十兵衛

正盛、母酒匂壹岐女、寬永十五年、先是遣諸將征島原賊、及二月

朔、復使正盛等率兵至島原、廿八日、進攻城、正盛先登、中石被創、墮女牆下是時有野久右衛門、友野七郎、、越五月廿九日、痛創而死法號士、維宗、今

日高與市左衛門其子孫也、

日高新四郎、率兵三人從征琉球、

野史氏曰、

阿多加賀列傳第百七

阿多加賀守、其先加賀守時成、為 怒翁公國老、食邑於揖宿、加賀守事 梅岳君、大永六年、十一月七日、大翁公與 君俱自伊集院歸寔府、是時加賀執 大翁公佩刀、本田紀伊執君佩刀、而從云、加賀子源四郎、戰沒於廻、孫兵部、戰沒於肥後、曾孫藤十郎、戰沒於朝鮮今阿多喜左衛門、阿多加賀子孫也、

阿多忠辰一作忠、秋、稱掃部介、亦時成之庶孽也或云、忠辰、大秋介久賴子、天正中、

為使役、後轉徙川邊・加世田・栗野地頭職、九年、從赴水股、十一年、八月、往守八代城、十四年、岩屋之戰、留守八代城、十六年、從赴上國、忠辰有男、曰甚右衛門、為人愚惡、因分出之、以次子助左衛門嗣已後、今阿多十兵衛其子孫也、

阿多若狹守、天文廿三年、從攻岩劍城、後屬公子歲久、為吉田地頭職、

阿多飛彈守、町田氏七世清久第三子久清初稱源六、慶長七年、四月十六日卒、法號誠齋之後也、天文七年、十二月、從 梅岳君攻加世田城、先登斬賊魁大山內藏介飛彈子孫、今在、志布志邑、

阿多周防介忠春初稱源六、慶長七年、四月十六日卒、法號誠齋、父曰源左衛門忠真初稱源六、慶長七年、四月十六日卒、法號誠齋、亦久清之裔也子長門、長門生刑部少輔忠明、忠明生忠真云、元和、忠春食田祿百

八十石寬永七年、二月二日一作三月五日卒、年八十五、法號洞雲南甫菴主忠春有子、曰勝左衛門忠增、初稱源六、慶長十九年、八月十日、先沒、年四十二、今阿多六郎右衛門、即忠春後也、

阿多忠次、自稱源六、戰沒於南海瀨戶、

阿多但馬、事 梅岳君、

阿多新助、永祿七年、從 松齡公、移居飯野城、

野史氏曰、

有川常盛列傳第百八

有川常盛、自稱六彌左衛門、其先不知何許人、事 大中公為東股在伊集地頭職、從軍屢有功、子但馬守、從攻鹽見城州在伊、被重創、遂沒、子兵部、戰沒於鷺臺在豐後、兵部二子、長五兵衛尉、戰沒於伏見

城、次六彌左衛門、居大口、後移居國分、領田祿五十餘石今有川五兵衛、即常盛也、

有川藤七兵衛、次郎左衛門貞朝之子也、戰沒於豐後、子右近、戰亡於飢肥、子仲右衛門貞守初稱源六、治、事 松齡公為納殿役、後與木脇祐秀俱為旅代官今有川仲右衛門、即藤七子孫也、

有川備前守貞綱、天正三年、四月、使貞綱使出水城豐後日、援山田有信守高城、廿日、出戰亡一作十九日、今有川勘左、衛門、即貞綱子孫也、

有川彥八郎、帖佐宗辰弟也、不知其所以冒有川氏之故云、水股之役、力戰被創、

有川助兵衛貞春初稱大炊、左衛門、永祿七年、從 松齡公移居飯野城、慶長四

年、從至伏見、五年、留浪華邸、而護衛二夫人、是歲 公敗績于關原、遁而至浪華、於是貞春等與衆謀、從二夫人而陰出城門、乘舟至兵庫洋、而遇 公船、則使二夫人徒乘焉、貞春等凡三十八人同舟至森江豐後、與黑田如水所置邏舟人戰殲矣、

有川新左衛門、日當山士也、天文廿三年、八月廿九日、戰沒於懸網川、

有川源七、有川六左衛門、有川藤七郎、從伐朝鮮泗川之戰、隆七、郎、攢紺船甲、

有川新五郎、從 公子歲久戰沒於瀧水、法號加室守慶上坐、

有川休右衛門貞興、寬永十五年、殉死於 慈眼公、法號信葦宗友居士、墳墓福昌寺 公廟前第三地藏石塔是也、

有川伊豆守貞鎮、其先不知何許人、祖曰壽天、父曰美濃、兄曰能登

貞鎮事 松齡公於柁城、為物奉行・及納殿役、後移居覺今有川與左衛門、即能登也。

府、貞鎮嘗以自賦從伐朝鮮、既反、復從行焉、及慈眼公女婦種子島
口時、遣貞鎮從至種子島、貞鎮二男、長與左衛門貞信、為伯父能登
嗣、次長左衛門貞顯、嗣父後、與父俱移居覺府、公率琉球使者至
江戶、貞顯及川上後藤兵衛以後隊從焉是時命貞顯賜六人賦、今有川幸左衛門其後也。

有川平右衛門、事公子家口於佐土原、後移居柁城及覺府、更為伊勢
氏、稱八右衛門元和中、有伊勢八右衛門貞侶者、蓋同人也。今伊勢十兵衛、即八右衛門子孫也。

有川慶助、殉死於島津忠倍、

有川半左衛門貞堅有馬皇子子、豐前守利雅孫也、有川長門通、有馬皇子子、豐前守利雅孫也、今有川伊左衛門、即貞堅子孫也。

野史氏曰、

川越重賢列傳第百九

川越紀伊介重賢初稱九者、其先川越太郎平重賴、重賴妻名北金尾、為鎌、會幕府世子之乳母云。重賴之八
世孫平次郎重秋、居豐後、為眞玉氏、重賢・乃重秋之十一世孫也、
有兄眞玉重轉稱民部左衛門、戰死於山田城佐、無嗣、重賢因為兄嗣、自稱民

部左衛門、後更曰川越紀伊介、大永七年、大中公潛出清水城、臻
伊作、而路遇險、則重賢負 公而從焉、遂俱得全達伊作、重賢子因

幡守重親初稱左衛門、重親子重林、稱九郎兵衛、天正六年、陣沒於高城
按此役也、川越外記者與北經、久盛等俱沒、重林也。重林無男、以某氏嗣之後、冒川越氏、名重恒、稱

助八郎、後更民部左衛門、陣亡於安永城、重恒子重能、稱三右衛
門、今川越三右衛門其子孫也、

野史氏曰、

蒲地五郎列傳第百十

蒲地五郎左衛門、事 梅岳君、戰沒於間瀬川按加世田淨福寺戰沒、天文七年、十二月、蒲地帶刀八郎也。、子伊賀守、號甫心、自幼與大野正右衛門俱近侍 貫明
公、被遇、有二子、長曰帶刀國子孫、今在、次曰四郎左衛門、

蒲地越中、戰沒於木崎原、

蒲地備中、號仲如、為蒲地後在、城主、天正十三年、賴新納忠元而降

我、則賜田祿八百石、慶長十九年、從公女質江戶、寬永五年、始兮

野田邑為一外城、是時以仲如為地頭職、仲如無男、以山田有榮弟為

嗣、名曰鎮昌、稱新助、為小根占地頭職、今蒲地休右衛門其子孫也、

蒲地兵部少輔、高山士也、天正間、選謀臣若干人、兵部其一人也、

野史氏曰、

西藩烈士干城錄卷之廿九

西藩烈士干城錄卷之三十三

有馬重純列傳第百十一

有馬丹波守重純初稱次右衛門、父曰丹波守純盛、以兵具奉行、從 慈眼公赴
朝鮮、文祿二年、癸巳、明兵數十萬來救朝鮮、是時 二公俱在金化
城在、乃使重純率百餘人、出金化城、往援小早川隆景・立花宗

茂・毛利氏於碧蹄館在、正月廿七日、明將李如松率兵來攻營、隆
景等出戰、是時重純先驅戰鬪有功、慶長三年、十月朔旦、明大兵來

攻新寨、時 慈眼公登正門左櫓、自放鳥銃、且射弓、公所蔽盾外

面飾以黃金、燦然奪目、敵多放巨砲、重純乃尚筵以韜蔽其光、是時公所控弦二斷、重純輒弦之、十一月十八日、明戰艦圍我兵五百人於南海島、是時遣重純及伊勢貞昌等往救、事在貞昌傳、及振旅之日、從還國、以功為佐多地頭職、十四年、以兵具奉行將兵十五人、從諸將征琉球、事平而還國、十六年、命與相良勘解由俱復檢地於琉球、於是四月七日、乘舟自根占至琉球、七月十五日、事畢而還、元和四年、閏三月十二日、卒、葬南林寺、法號楊庵宗柳居士、慈眼公作倭歌追悼之、其辭曰、孤木篤捺栗・結武栗篤吉謁矢・篤栗邊訥ノクサバモシゲルツユナミダカナ、孤躑跋木矢傑兒・賞幽捺密怛葛捺、重純無男、以伊勢貞朝次子為嗣、名純生、稱次右衛門、因冒有馬氏、為納戶奉行・及羽月地頭職、今有馬次右衛門、即純生子孫也、

有馬豐前兵衛純秀初稱七郎次郎、又舍人部、祖父筑前守純安初稱七郎、安所居地名狹城云、居太宰府在筑、至文明三年、辛卯、十二月、晦、來居蒲村池牟禮在日州馬關田邑一純、而創建菅神

祠純安倭家臣人知祭祀事、其子孫畫瓜為衣章、而不詳其姓名、至今神前有古碑、背銘曰、有馬舍人九六、○純安有弟三人、仲嗣曰部左衛門純政、為龜氏、今高左野七龜川者、右衛門其裔云、叔曰近兵衛純孝、為十右衛門、子榮詳居鹿野云、李曰部次郎純盛、為一龜氏、子孫純盛、初稱七之連、三年、九月廿五日、行總公於飯野城、而馬關田邑之地田畠三百

子孫純盛、為一龜氏、父筑前守純豐初稱七之連、三年、九月廿五日、行總公於飯野城、而馬關田邑之地田畠三百、其是、蓋是、兄志摩守純信是為有馬、衛守祖、純豐有所藏大小刀二口江作、以大刀讓

之純信、小刀與之純秀至純秀子孫世、元祿七年、甲戌、正月七日、夜、大風按樹、屋宇破損、財器焚亡、、

純秀事 松齡公於飯野城、元龜三年、壬申、五月、戰沒於木崎原、

法號義安良忠居士、子山之丞純喬初稱源、為一實直敢往、永祿十二年、己巳、五月廿五日、貫明公公曾木長野城衛所新兵、是時 松齡公

遣鎌田政年進圍城、純喬亦屬焉、城兵突出、勢甚烈、純喬謂政年

曰、事急矣、余止拒後、子索路可去、遂戰沒、家奴俱死者九人、政

年得與數十騎遁去、公惜其死、而召其孤七時年甫、賜稱源七郎、因尉安

愛養焉、及長名純房、更稱藤七兵衛、近侍 松齡公於帖佐城、從赴

朝鮮、班師日、直從至伏水、慶長五年、正月四日、遣純房・及大井七右衛門於大坂邸、而監視大山綱宗死、語在綱宗事中、七日、還報、八月初一日、從攻伏水城、執槍若州冬藏孫所作、先登於松丸口名城門、與白坂源六共深入刺殺五六人、遂俱沒陣純房戰後善七及善、時純房年三十八、法號慶宗順賀上座、墳墓在天福寺佐、彫刻戰死於城州伏見之數字善精魂、純房二男、長茂右衛門純成初稱伊勢、不詳其生死年月日、墳墓在椿窗寺在鹿、法號風山常全居士、子孫在柁城云、次左近將監純實千代稱菊又源、天正十九年、辛卯、生、年甫十、松齡公殊召之曰、汝父祖世々死節焉、以國之多難未汝恤也、今命汝以近侍小姓、夙夜在公、母廢前勞法在句、至慶長九年、甲辰、正月十五日、使國老伊勢貞昌賜純實

菱刈邑田代村田祿三十石、及茶器腰刀長尺、寬永元年、甲子、從慈眼公至江戶、後數年還國、十二年、乙亥、下教曰、夫賜純實子孫世々以歲俸十五石、其父祖三世死國難之故也、十四年、丁丑、南蠻船漂到琉球國、是時遣純實及東風親方人、奉使上言之於瓊浦官府、使畢而還、是歲肥前島原賊起、翌年命純實及甲斐掃部往使於天草營島津久元、十六年、寬陽公自江戶邸還國、純實迎 公於伊豫十一島、是歲使純實往寓居京師、凡四年、因數使江戶及高野山、死時不知年月、初純實居帖佐、後從 松齡公徙柁城、其後又徙居覺府今有馬七兵衛、

有馬純信、稱次郎兵衛、事 大中公、子純成、稱平左衛門、居隅州新城、從軍為多、子純勝、稱隱岐初稱平內、善射、純勝二男、長次郎三郎、戰沒於高原城今有馬源太左衛門、次純辰、稱平左衛門云、有馬寸右衛門、從赴朝鮮、新寨之戰、寸右被甲、兜鍪設錫杖立物、執二十錢鉛子鳥銃、多打殺明兵、無男、以某氏為嗣、冒有馬氏、是稱六右衛門、其子稱九右衛門云、

有馬軍彌左衛門、事 梅岳君為軍奉行、每從軍有功、永祿十年、十一月、從攻馬越城、先登陣沒、軍彌三男、長又次郎、戰沒於某役、助、即字次、次某、出嗣某氏後、次三左衛門、天正十二年、從戰島原、而殿、又從伐豐後・及朝鮮、慶長三年、奉使 東照廟、而賜衣服云、

有馬玄蕃、有馬源兵衛、有馬善右衛門、有馬甚兵衛、有馬安右衛門、皆從軍朝鮮、

有馬右衛門兵衛、蒲生人一作曾於、天正間、擢參謀五十四人之一人也、後以 公命襲公子歲久於瀧水、殺津留多主稅、

有馬八左衛門、有馬善左衛門城子孫在松、俱以 松齡公馬卒從戰關原、軍敗、從而還國、俱賞賜褒牒及田祿十石、

有馬半五左衛門、寬永十五年、二月廿八日、戰沒於島原今有馬次郎左衛門、即半五孫也、

有馬新二郎純口、陣沒於蒲生、無男、以野村但馬長男為之嗣、冒有馬氏、稱掃部左衛門、號久雲今有馬善左衛門、即久雲子孫也、

有馬吉右衛門、從征琉球、野史氏曰、

赤塚真賢列傳第一百十二

赤塚真賢諱、一作聖、初名重直、稱太郎次、又源左衛門、號普休賢、任備刀左、其先齋藤助宗守越前第四子宗景、稱三郎、又內舍人、又後從五位下、改齋藤氏始為赤塚氏、宗景之六世孫範房守越前、屬新田義貞戰沒於函谷、範房生藤重四郎稱實宮介、又、始來薩、事 齡岳公、藤重生真景、

事 齡岳 怨翁二公、真景生景榮初內舍人、後武藏守、景榮生重鄉左衛門、高次郎、又稱、重

鄉生宗光初太郎、次郎、又源大夫、後越前守、又信濃守、事公子友久、宗光生真親初名重直、又武藏守、事

梅岳君、真親生光重初稱左衛門、亦事 梅岳君及 大中公、光重生重

德初稱太郎三郎、永祿四年、五月十七日、戰沒於比曾木野山在福、初重德妻

滿尾貞利衛掃部武女、天文廿一年、五月五日、生真賢於加世田邑、弘治

三年、真賢年十六、四月、從戰蒲生及菱刈、獲甲首、永祿四年、七

月、從攻廻城、獲甲首、賞賜槍、七年、從 松齡公徙居飯野城、天

正四年、八月廿四日、高原三山二城降、命真賢為步卒將、兼三山地

頭職一作三山、而徙居三山城、居凡廿有餘年云、初我有事於高原之日、

真賢與佐竹義照、俱行伏鉞術於敵境、及日州平定之日、公巡行召

二人而問焉、則猶有其證云、其後選五十四人為軍事參謀、真賢亦與

焉、六年、二月、遣真賢及久留木掃部等、誅權現宮在藤、座主民部卿秀

澄僧都、伊東義祐嘗命置諸斯云、後真賢奉使嶽米良氏、又游偵求麻

諸城、其後從 松齡公軍肥豐、及志賀親置守吉道城、屬於我、遣真賢率三

山士三十人往保守菅迫城、既而歸國、十五年、三月、公班師於豐

後、十三日、遣真賢率步卒五十人、使菅迫城、賜伊集院三河・及犬

童美作甲冑・鳥銃各一、而俱旋軍、是時敵據清田嶮、恐其躡歸路、

真賢乃伏兵於利滿川、平且三河等引兵出城去、敵望見果下嶮逐之、

半過川、真賢伏兵猝起、敵大驚、真賢急擊破之、斬首數十、遂解

去、其後從夫人質於京師、凡三年、慶長五年、關原軍敗、是時真賢

留守浪華邸、而衛護二夫人、乘船而去、至西宮洋、遇 公船、則命

二夫人及真賢・廣瀨源助等、而徙乘 公船、俱得全於難而歸國、六

年、築蒲生新城、而擇真賢及勇士七百餘人徙居焉、因益賜真賢田祿

五十石、真賢自弘治二年、至天正十五年、凡四十四、每從 松齡公

軍、自斬敵凡廿六人、身亦被數創、寬永十年、八月十四日、卒、年

九十二、法號木學賢重居士、子重政、稱三右衛門初稱太郎一節、、天正十五年、目白坂軍敗、松齡公使重政及細田覺右、質栗山重晴營、留猿瀨營原在、凡可四十日、六月晦日、羽柴秀長班師、因命重政而還家豐後、其後從赴朝鮮、子重位、稱平左衛門、寬永八年、祗役於江戸、有故籍没田祿及家財、子主膳、不能為家政、遂讓大宗子於同宗源太左衛門重勝云重勝子孫在龜府、主勝子孫在蒲生、

赤塚重直、稱源助、真賢弟也、事 松齡公、每從軍有功、天正十四年、七月、戰沒於岩屋城、子重種、稱利七、亦事 松齡公、慶長二年、從赴朝鮮、三年、擊明兵於新寨、有功、及旋軍、遇敵艦、遂戰亡、無男、以兄真賢次子太郎二郎為之嗣、是曰重增、稱吉右衛門初稱左衛門、從戰關原、後從征琉球、慶長十六年、正月廿一日、貫明公薨、重增殉死焉、年五十一一作廿一、、法號一山宗將居士、福昌寺 公廟前第九地藏石塔、是為重增墳塋、子重昌、亦稱吉右衛門、居大口邑、寬永十五年、與曾木重廣廣字吉、俱以兵具奉行、從新納加賀守戰島原、正保二年、六月廿五日、卒、年三十九、子重頼、亦稱吉右衛門、居大口、寬文中、命移居覺府、而為納殿役、今赤塚吉右衛門其子孫也、
野史氏曰、

川内源五列傳第百十三

川内源五長稱源、從伐朝鮮、又從攻伏水城、擊破松丸口、直從至大垣、勤番曾根、是時薩兵多續至、有野村彌次郎者、告源五曰、吾輩始至焉、未觀我軍先鋒陣營、子為吾先導、源五乃俱往觀之、時豐久

在井樓上、源五謂之曰、敵方樹柵築營、吾挑戰與彼戲、君試諸、乃放鳥銃於敵營、則敵騎多出逐之、執裝金槍者最先進、源五射之、墮馬、敵騎續逐、本田伊賀援源五而退、翌日、石田三成來我營曰、聞昨日 公部下獲敵騎、請少間與之相見、公見之焉、三成乃賞與之國廣刀、関原軍敗、源五與押川公近奮擊深入、相失 公之所、潛遁至大坂、是時 幕府嚴監察、而不入流亡於城中、源五不得已、棄刀於路傍、微服逃難、後 公而還國、子孫今在柵城云、

川内主殿、與其僚六十人、從徙居飯野城、

川内重利、稱織部、事 慈眼公善擊鼓云今川内織右衛門、即重利子孫也、

久留半五列傳第百十四

久留半作留、半五左衛門、少有武名、我有事於牛根之日、新納忠元命半五及本村筑前堀城岸、而逼入城、城遂陷、木崎原之役、半五與遠矢下總等、執槍先登有功、天正十二年、九月、從擊破小代城在肥後、慶長十四年、率兵四人、從諸將討琉球、及國王出降、其臣猶多不肯降、是時半五與梅北照存等、追擊至鋪菜野、而被創、

久留軍兵衛、永祿十年、先登於馬越城、後戰沒於木崎原、

久留善兵衛、從赴朝鮮、

久留休齋、慶長五年、從攻伏見城、

平野友治列傳第百十五

平野丹後守友治初稱六郎、左衛門、又六郎左衛門、剃髮號宗鐵按舊記、有五代氏始祖三郎時康忠第三子、事梅岳

君、子丹後守友知初稱民部左衛門、又六郎左衛門、剃髮號栖山、為納殿役、賜吉田地頭

職、天正十五年、公以伊集院忠棟・及友知、質羽柴秀長營、六月、

從龜壽君、謁豐公於泰平寺、遂從君至京師、後有故、改平野氏為國

分氏、其後慈眼公命復平野氏、及有犬追物之儀、以友知為喚次役、

子左近將監友種初稱淵、九郎、天正十三年、從 松齡公軍三舟、十六年、從

貫明公如京師、子六郎左衛門友將、其子彌九郎友貞、無男、以小宗

民部左衛門友益為後云四郎兼子、貫國分氏、後復平野氏云、一說云、左近將監友種次子民部左衛門、後改稱分

後、而出為國分氏義子、貫國分氏、其子集人、後更亦稱丹後、而以弟其、

平野良仙友宣初稱十郎、又治左衛門、又壽仙、其先不知何許人、父曰休兵衛友昌初稱新、

祖曰宗精精一作清、宗於濃華、友宣以醫事 慈眼寬陽二公、子伊兵衛友將、號時

得軒止齋初名友長、稱采友友、又友貞、、寬永九年、友將為 寬陽公典書記、學會我流

禮書於久保正元稱吉左衛門、即友將子孫也、且學射於東鄉重尚今平野次郎兵衛、

即友將子孫也

肥後盛秀列傳第百十六

肥後盛秀、稱權之丞、父曰駿河守盛貞、號一清、祖曰大和守盛治、

號恕清、食邑高城在下天、為伊集院竹山地頭職、黨島津實久、戰沒於

竹山城、至盛秀、（頭注）後嗣衰落、衰了凡語一、家道衰落、遂讓大宗於小宗盛吉、慶長十六年、正

月、貫明公薨、越二月廿日、盛秀自殺以殉焉、年五十二、法號花

翁道榮上座、今福昌寺 公廟前第四石塔、是為盛秀墳墓、子盛次、

亦稱權之丞、

肥後盛家開防、恕清第三子也、食祿谷口院在伊集、不應實久之招、及被侵

陵、乃去谷口、來慶府、大中公賜之花棚村及綱屋地、、天正十五

年、從公子歲久入豐後、有功、子山城守、事 貫明公見遇、無男、

以町田助太郎子久倍次、為嗣、改曰肥後勝兵衛盛親、又更盛吉、家居花棚

村、後受盛秀之讓、為肥後氏大宗、其後兄町田忠綱卒於朝鮮、無

嗣、故盛吉嗣兄後、復町田氏、更名久幸、而以町田久政次子某為己

後、冒肥後氏、名盛次、稱平次郎、盛次早卒、無男、以其弟町田長

次郎久政弟、為後、冒肥後氏、名盛行、稱長左衛門、號清飲、累遷十人

衆役、奏者番、吟味役、轉徙七島・羽月一作吉、・甕島地頭職今肥後平左衛門、

肥後藏人盛吉、事 梅岳君、為泊地頭職、初盛吉無男、以平田宗茂

第三子為義子、冒肥後氏、名盛房、稱新次郎、戰沒於市山、其後盛

吉生子、是曰與五郎、事 貫明公、

肥後掃部左衛門、事 梅岳君、天文七年、十二月、與宮原隼人等俱

陳沒於鵜塚之地世、、子宮內少輔、天正十五年、援山田有信守高城、

肥後掃部左衛門名前與掃部同姓、而與隼人同姓、、天文十七年、九月、從破北原氏兵於姬木城、

肥後內膳、以兵具奉行、從 慈眼公、討莊內賊、

肥後壹岐盛昌、種子島人、以武勇、殊命徙居富隈、後又移新城、食

祿一百石、後從擊莊內賊、

肥後勘兵衛、亦種子人、命移居國分新城、食祿一百四十石、

肥後民部少輔、事 松齡公於飯野城、元龜三年、五月三日、夜、公

燕城中、至曉、民部開戶而望見加久藤城外火光起、急入告之 公、

明且從大戰木崎原、

肥後新助、戰沒於木崎原、

肥後讚岐、公子歲久家臣、每從軍有功、

瀬戸口重勝列傳第一百七

瀬戸口重勝、稱八郎右衛門、東郷氏支族自重勝以上年月未詳、重勝從戰木崎原、

與竹下又左等俱斬強敵長峯彌四郎、獲其首、後從赴豊後及朝鮮自朝鮮歸時、卒時不知年月、子孫七兵衛、有故、下土籍為船手附、以其祖有武勇故、延寶八年、命復列士籍、今瀬戸口八郎右衛門其子孫也、

瀬戸口重為、稱藤兵衛、東郷氏六世氏重第四子三郎次郎之苗裔也、三郎次郎嘗食邑於瀬戸口在、因始為瀬戸口氏云、重為事 貫明公、天文廿三年、以旗指役、從攻岩劍城、後從軍屢有功、重為三男、長曰彌八左衛門某、次曰重治、次曰重位、彌八嗣父後、重治重位俱改瀬戸口氏為東郷氏、事在東郷氏傳、永祿十年二年、彌八從討肝付氏、戰亡於垂水、無男、以山田長四郎者為之嗣、冒瀬戸口氏、是曰三左衛門重照、後子孫亦更瀬戸口氏為東郷氏、

瀬戸口彌十郎、瀬戸口金右衛門重勝、瀬戸口小左衛門、俱從伐朝鮮、

安樂兼惟列傳第一百八

安樂兼惟、稱五郎左衛門、從伐朝鮮、又從戰關原、軍敗、從而歸國

一本作安樂小左衛門從而、歸國、蓋兼惟嘗稱之也、 賜褒牒及田祿三十石兼惟子孫今在帖佐

安樂大炊介、後改伊豫、肝付氏之支族也、居日州櫛間、及肝付氏為

寇之日、大炊來事于我、天正二年、大炊修覆西方權現祠在櫛間、公子久逸嘗所建、經是電、祠室破壞、於是大炊請地、伊集院久留修之云、、十四年、七月、我軍進攻岩屋、大炊與平田七左・平田

仁左・簗輪狩野、俱格鬪於二丸口、而被創、貫明公賞其功、又從攻緒方城、深入復被創、又從擊破仙石氏等於利滿、十五年、四月、從戰於目白坂、文祿二年、從軍朝鮮、九月、公命大炊及鄉田源左、從石田三成歸日本、直送三成至浪華、船着名護屋、三成則令駒井萬五郎使二人歸薩、慶長二年、七月、大炊與岩切與兵等、以私賦復赴朝鮮、三年、四月、命歸國、遇颶風、舟殆覆、至石見州津島、而後還國、四年、三月、貫明公使大炊陸行告機密於伏見邸、為舟行則或遲緩、而失事機之故也云、是月、慈眼公誅幸侃於伏見邸、莊內之役、貫明公使大炊數使諸將、且諜賊凡四度、及我兵圍恒吉砦、有賊兵立花某者、先衆能戰、大炊乃執鳥銃射殺之、城遂不拔、而引歸、五年、正月、公遣大炊使於山田本營、而告機事於慈眼公、公告大炊曰、昨夜賊出擊破我營柵、汝往視焉、視而還報、公賞賜繪絹、六年、二月廿八日、益賜田祿一百石、後命移居新城是時在、十一月、正月、官獻城石於江戸、漕舟凡三百艘、是時使大炊・及田中對馬二人俱唐國分・山鹿彌助府屬・稅所助兵帖佐・為奉行、至江戸、則俱謁本多佐渡守、而奏事、事畢、則佐渡守與四人衣服、而還報、公亦賜道服各一襲、其後卒、子孫今在國分邑云、

佐谷田重遭列傳第一百九

佐谷田或作才田、又細田、又西江田重遭、稱武藏、父曰駿河重治初稱平二郎、實、近侍梅岳君、天文廿三年、重遭從攻岩劍城、先登獲甲首、賊兵轉戰、我軍殆敗、重遭前被頭創、猶克奮迅擊賊、賊遂退散、梅岳君 貫明公俱賜褒牒、賞其

勇、後從 松齡公為步卒將、及復小林城伊東氏管、命重遭移居云、元龜三年、從戰木崎原或云、是夜也、有津田八重者、疑是武藏別也、一子重忠、稱後藤兵衛、陣沒於

木崎原、年二十五、其孤生僅月餘、重遭撫養之、其明年、松齡公使重遭召見孤重遭之、公稱譽曰、士之子哉、因賜稱覺右衛門、多賜物、且命重遭曰、汝撫育孤子勿懈、及豐公西下、覺右衛門年十三、與赤塚重政、俱往質於栗山修理亮營、及豐公帰軍、護衛二人至京師、後原歸國、其後覺右衛門更稱九左衛門、名重正、從赴朝鮮、有功、及歸國、賞賜田祿三十石、又從軍莊内、斬賊二人、將帰營、飛丸洞其股、不能起、永山半六寬永間、有肥後左右衛門者、半六子孫云、扶持而得歸、松齡公在伏水也、加藤清正家臣浮島右衛門者、叛彼而事于我、清正聞而知之、命部下斬殺之、其後我士瀬之尾甚九郎亦叛我事清正、公命押川強兵衛・及大山三次、將往誅之、此時重正辞伏水、將歸國、途遇清正、視之、甚九郎在其傍、重正乃詐呼曰、是吾兄弟也、而叛於我、急迫斬殺之、清正使左右逐之、重正遁入店中、而登階、彼等候來上、而欲俱決死、於是三奉行・及寺澤氏・立花氏・聞之、而謂清正曰、前君之臣事薩、君既誅之、今薩之臣亦事君、而薩人誅之、更互校之、則事相同、君何獨殺彼、清正許諾、事遂平、重正帰國、及関原之敗也、加藤清正遽將兵至水股、將侵我出水邑、公使本田六右衛門命重正謀水股城是時重正謀林田六左衛門、而入城云、重正入城、潜居清正寢室下凡三日、及還報、持城土以為信、賞賜之田祿百石、後為出水米津番成、益賜田祿二百五十石、重正子稱九左衛門生於出水邑、今細田覺、右衛門、即其子孫也、

西藩烈士干城錄卷之三十

西藩烈士干城錄卷之三十一 鮫島宗秋列傳第一百二十

鮫島宗秋備後守、初稱、次郎左衛門、其先鮫島宗家稱四、在薩、食邑駿州之地、而屬鎌倉幕府、戰於石橋山、以功賞賜阿多州在薩地頭職、因始下居阿多城、而并食山田在河邊、宗家生家高行刑、號、家高生家景、稱彌、家景生彌二郎、彌二郎生彦五郎、稱道、事、道鑑公、公賜之加世田・知覽・揖宿三邑、彦五郎生蓮性、事、定山公、蓮性生又太郎、又太郎生口宗號、事、義天公、口宗生宗吉、守越中、宗吉生宗滿、三初稱彦次郎、又、宗滿生宗遊、衛門、宗遊無男、弟宗秀嗣、初稱藤七兵衛、宗秀生宗秋、自宗家至宗秋、凡十四世、宗秋事梅岳君、為代官役、兼泊地頭職、後陣沒於日州、子宗昌備後守、初稱又次郎、天正十三年、從、松齡公在八代城、九月七日、公遣宗昌及野村兵部使覺府、其後從軍數有功、慶長十九年、三月廿日、卒、法號梅林成、子宗儔稱次郎、三郎、天正十一年、十月廿五日、先父陣沒於八代城、年二十一、無男、以木脇祐光次子小藏者為嗣、冒鮫島氏、名宗堯大、初宗堯母為、貫明公之妾、名小侍從、有妊、當是時、祐光妻有川飛藏、則公賜小侍從、七月一作、生男、即宗堯也、二年、生、水、從、慈眼公赴朝鮮・及浪華之役、宗堯亦無男、以同宗宗俊第三子為贅婿、遂以為嗣、是名宗當、稱次郎左衛門、承應三年、三月三日、卒、年五十三、法號興屋清隆居士、今數、島次左衛門即其子孫也、

鮫島宗豐守、佐、號雙月、祖曰因幡、父曰但馬、雙月為、梅岳君之傳、後擢為家老、賜田布施地頭職、子又左衛門、兼假知車城事、感應生又左衛門、又按雙月生佐、衛生仲兵衛、仲兵衛為慶府士、又按天正二年、九月七日、貫明公至田布施邑、越十日、命雙月子始加冠服、未知孰是、天文間、亦為田布施地頭職、後陣沒於三山、卒於田布施、未知孰是、又左衛門稱、無男、以永吉采女弟左助者為嗣、冒鮫島氏、是日雅樂介、時年二十三云、雙月子孫在田、

鮫島日向、號孤船、與蒲地甫心俱事 梅岳君、為人謹慎、見寵遇合意最
船子孫也、
市兵衛、孤、

鮫島主馬宗次一作主馬、助宗昌、事 大中公、為高山地頭職、因移居焉或云、宗次非高山地頭、以步卒督屬
高山地頭、而、子宗俊稱筑右衛門、事 貫明公、去高山、移居覺府、而為納殿

役、及朝鮮之役起、宗俊從 松齡公至名護屋、則命為兵具奉行、兼
納殿役、前此 公謂宗俊曰、子食祿五百石、此役也、子如以自賦而
從軍、班師之後、益賜五百石、宗俊曰、謹奉教、至發軍、則先賜二
百五十石或云、宗俊後建國、上書請益祿如約、公使鎌田政直謂之曰、向所賜祿、慶長三年、新寨之

戰、宗俊身被赤緞甲、引勁弓、射殺十數人、十一月、樺山久高等所
乘船為敵所燒、乃捨舟棲南海島、事聞於巨濟營、公乃遣伊勢貞昌
等往告之、以速發舟來援、少焉又召宗俊曰、孤雖既遣貞昌等、孤別
有所思慮、汝宜早往代彼等、故使彼等還於營、宗俊即追及貞昌、告

以 公言、貞昌不聽、與共至南海島、告 公命、於是久高等乘小
舟、遂前比至興善島、援兵方至、乃五百人得全而還巨濟者、宗俊等
之力也按高氏系譜、初、公遣兵五百人於伊久小島、而為敵艦所圍、於是、公使宗俊率五、從班師、至壹岐

風元、即令宗俊監視深野掃部・長崎六郎之死焉、從歸國、則賞南海
之功、賜田祿三百石、後為小根占地頭職、兼大坂藏奉行、而祇役凡
二度、元和八年、壬戌、九月四日、卒於大坂、葬天滿立燈寺法號桂岳寺、

宗俊嘗學射於本鄉義則、至慶長八年、十二月廿五日、盡傳授其術、
是時義則有自書規矩以與宗俊之帖、今藏之其子孫鮫島筑兵衛宗傳家
宗傳家與余為隣、因親視此書、筆力、」宗俊子宗次、母鎌田吉左衛門女、宗次事 慈

眼公、賜稱孝左衛門是時、公謂宗次曰、汝遺言於子孫、世、稱孝左衛門、故宗、為大始良地頭
職、兼大坂藏奉行、寬永十四年、丁丑、正月十日、亦卒於大坂、葬

立燈寺法號桂岳寺、無男、以鎌田政德次子為之嗣、冒鮫島氏、是名宗能

稱五郎左、為牛根地頭職、寬永十八年、辛巳、二月廿一日、卒法號關安秀、

鮫島宗喬稱五郎、刑部允家高第三子兼家四郎左、之孫也、事梅岳君、子隼人
宗能、君女嫁樺山善久、宗能從行焉、永祿十年、戰沒於馬越、子
宗直稱長、及善久之女、嫁島津家口、宗直從至佐土原、家口以為騎馬

役、天正六年、十一月、戰沒於高城、子宗秀初稱藤、居佐土原城、及
幕府沒入佐土原、宗秀移居覺府、而家產消落、遂為坊人、至今子孫
居府下北市、而為伊集院藏主家臣云、

鮫島四郎兵衛者、玄蕃亮、宗延弟也宗延乃四郎宗家之、天正二十四年、正月
十二日、戰沒於某役、

鮫島助六、天正三年、十月、有大追物之儀、助六為喚次役、
鮫島與五郎、從入朝鮮、

鮫島少左衛門、殉死於島津久賀、年五十三法號安山玄、

稅所敦朝列傳第二百二十一

宇多帝之皇子敦實親王一品式、之子篤房正二位大、始賜藤原姓、篤房之五世
孫敦如正五位、治安二年、辛酉、三月廿一日、有故被左遷於隅州曾於

郡名所居地曰曾、敦如之五世孫亦名篤房曾於郡次、篤房第三男敦茂曾於郡七、源平
之亂、有戰功、幕府賜褒牒以為稅所總檢校兩職、因稱之曰稅所大
夫、敦茂第四男祐滿稱長、始以稅所為氏、率兵往戰於和田、有功、而

累遷大隅國大介・兼稅所職・押領使職・曾於郡司職・止上大宮司

職・國太守職・滿家院郡司職・厚地山座主職、祐滿生義祐亦稅所、義祐

生敦秀亦稅所、敦秀生敦胤亦稅所、敦胤生敦直亦稅所、敦直生敦為亦稅所、敦為

生敦定亦稅所、敦定生敦政亦稅所、敦政生敦武亦稅所、敦武生敦辰亦稅所、敦辰

生敦廣亦稅所、敦廣生敦信亦稅所、敦信二男、長亦名

敦秀亦稅所、戰沒於隈城、次敦豐亦稅所、嗣、敦豐生敦朝、天文十六、

丁未之歲生、及長從伐朝鮮、而病卒焉、敦朝二男、長內膳、先卒、

次敦載亦稅所、嗣、事 貫明公、及 慈眼公之世為納殿役按記、敦載初事入來院氏、後來事

所治右衛門、即、敦載子孫也。

稅所篤和盛前守、稱著、助、體休心。、父篤辰越前守、為某邑地頭職或云、天文七年、十二月廿、祖篤家

而稅所介敦昌弟也、篤和仕為使衆、而轉徙曾於郡有職十七、及山野地頭

職、天正三年、三月十五日、有犬追物之事、篤和為射者班野者班、射大

云、六年、從戰耳川、十一年、九月、出軍於佐敷、十月、又出軍於

八代、十二年、從 松齡公軍於肥後、十四年、戰于岩屋、十六年、

從 貫明公朝京師、慶長四年、伊集院忠真以莊內叛、是時 幕府

使山口直友至薩、而命忠真降、不聽、九月、直友帰京師、公乃使

篤和及竹内織部、從直友使 幕府、而拜直友之辱、十一月、

幕府遣直友復使於我、篤和・織部・及本田助之丞・從而歸國、及西

軍敗績於關原、 幕府徵 公於京師、公乃先使鎌田政近拜徵之

辱、至則諭言敦厚、重命 公朝京師、政近還報、公問之于左右、

左右皆曰、言甘而事危、不可朝也、於是復使篤和及織部、而上言

曰、寡君不幸而有疾、不能來朝、使臣等拜再徵之辱、於是 幕府

乃為盟書以賜焉、則 慈眼公代 公、遂朝京師、其後篤和卒、子

篤長備次、即右、、從伐朝鮮、慶長十一年、五月十八日、先卒法號、林秀、子篤

貞亦稱次郎、、寬永六年、十二月廿三日、卒法號、宗白居士、今稅所、

稅所篤清但馬守、初稱彌右、、越前守篤好弟也按篤清、篤好弟、則其時世似不合、、事 慈眼

公、初居國分、後移居覺府、而為使衆、歷轉琉球奉行一作琉球、、及京師

藏奉行、及老命屬式部君、而賜田祿三百石、子日篤則今稅所彌右衛門、即篤則子、

孫也、

稅所助十郎、越前守篤好第三子、天文七年、十二月、戰沒於加世田

城廿九日、

稅所篤澄、越前守篤辰第二子、戰沒於橫川城、年十六、

稅所敦秀備前守、稱著、助、體休心。、艸途伊豫者第二子也、出為稅所敦重家居坂野、稱與助、制繁號樹

氏有功、敦秀嘗學笛於中郎一噌號稱七郎左衛門、、及天正十七年、北條氏直

召一噌於小田原、而弄笛、年老不能如、乃遣敦秀至關東、氏直召之

於雙林寺野在上、、而弄笛、其聲清亮悲壯、氏直感賞、賜之名笛標、、由是

以吹笛顯名於關東云、其後從赴朝鮮、慶長三年、新寨之戰、敦秀聽

敵喊聲曰、聲中黃鐘、今水剋火之時也、此用兵之忌也、彼必敗、又

聽我喊聲曰、聲中盤涉、而應天時、我必勝、果慶明兵二十萬、是日

敦秀貫紺緞甲云、其後適子敦豐亦稱與、、性不好吹笛、故盡以其法、授

之次子佐渡制繁號、、敦秀又好和歌、嘗詠旅行曰、由喜久羅須・多比念

能耶土能・不由能與波、麻知古曾話夫禮・阿計保能能曾羅今稅所孫右衛

孫也、

稅所與右衛門、事 松齡公、為道具衆、從戰關原、軍敗、而從歸國、

稅所助兵衛、慶長十一年、官命取國分帖佐二邑關艦、載大石大木、

使助兵衛督漕諸江都及駿府、以供築城之資、

酒瀨川武安列傳第二百二十二

酒瀨川武安稱豐前兵衛、後奉勝、為人豪宕有略、且能間諜、嘗命與濱田榮臨、俱謀田上城在大、磯在太、永祿九年、從松齡公攻三山城、有功、天正六年、大友氏寇日州、十一月十日、武安等富山伊地知丹後、富山丹後中以其能知地形、殊命率三百餘人、乘夜潛伏於山隘、明朝猝出斬敵將一人、從兵七十餘人、而奪其糧屬、是日敵軍敗績於耳川、其後每有兵事、常與參謀略、十二年、三月廿四日、從戰沒於島原、時人惜之、子某亦稱豐前、兵衛、天正十五年、與伊地知丹後俱陣沒於野津在豐、後、

酒瀨川七左衛門、日當山人、弘治元年、陣沒於帖佐三月廿七日、

酒瀨川強七左衛門、元龜三年、陣亡於木寄原、

酒瀨川彥松、從伐朝鮮、

酒匂新左列傳第二百二十三

酒匂新左衛門者、梶原景長稱太之苗裔也、初鎌臺幕府之世、景長之次子朝景刑部、丞、食邑於相州酒匂、因氏焉、子景貞在衛門、財、命為得佛公之傳、公就封之日、以履役從下薩、後擢為國老、自是累世為國老者數人、其後子孫宗族日衰落、至大永天文間、新左嗣世、累遷川邊日當山地頭職、子治部左衛門後亦稱新、左衛門、戰沒於目白坂、子源左衛門、與其徒三十人、屬伊集院忠朗、居清水邑、後為日當山地頭職按酒匂氏系譜、命屬島津忠將、居上井、而為

日當山地頭職、未知孰是、永祿四年、從島津忠將、戰沒於馬立在豐、色、子景宗稱新左衛門、作次郎在衛門、

年甫九、以父戰沒故、賴島津以久居焉、後貫明公命徙居蒲生、又徙出水、其後又徙覺府、及肝付氏降於我、公命町田出羽・本田因幡曰、景宗為酒匂氏之宗、護衛我傳家之寶器、罔敢失墜、以昭先祖之德、存肅敬之心鎌倉幕府甲冑族世守藏之酒匂氏家、而其家在府城南郡元村、前太公新建所藏屋宇、望之墻壁幽深、喬木葱鬱、實如一神祠、且其父死國難、景宗雖猶幼、宜賜串良之田數十頃、其後景宗無嗣、以小宗景國式部少輔、山田人也、天正間、公遣謀臣、是國亦與將、慶之長子為之嗣、是名景政、志摩介、今酒匂次郎左、長五年、有酒匂式部、從君夫人自浪華至、蓋是國也云、

酒匂紀伊、從松齡公居飯野城、為普請奉行、領祿四百石今酒匂在右衛門、即紀伊子孫也、

堀丹後列傳第二百二十四

堀丹後稱四郎左衛門、又孫右衛門、大友氏支族、堀九郎之苗裔也、初圓室公娶大友政親之女、九郎從輿而來薩、因世々居焉、元龜二年、丹後年二十五、以步卒將、自覺府移福島在日、州、居七年、天正四年、去福島移宮崎、成境場、凡七年、十五年、豐公西下、是時去宮崎、復移於福島、十六年、又移大始良城在隅、州、十九年、幕府下教於諸侯曰、方今國主城主獨宜據城、其餘宜悉下城、是時丹後下城、而徙居上田原藤子村、之地、慶長五年、又移永吉邸在大、崎、寬永三年、五月廿三日、卒法號安清紹、康居士、子興親稱八郎、又稱右衛門、又和、泉、又左衛門、號齋齋、天正六年、慶長元年、年十九、貫明公遣使朝鮮、因留勞軍務凡三年、從歸國、四年、從慈眼公討莊內賊、元和元年、公遣興親齋香木其餘財物、往獻駿府、寬永三年、公扈從幕府朝京師、是時興親以居飼役三三末而從焉、十三年、十一月、使興親等行鐫流馬之儀、卒時不知年月、興親初為船奉行、又為物奉行、及納殿役、且久志地頭職今堀四郎孫也、即興親子孫也、

堀小左衛門、事 梅岳君、居加世田、戰沒於郡山、子和泉、移居清武、後又移穆佐、子大藏移出水、又移橫川、又為甌島附役、萬治元年、移薨府今播磨兵衛、即、大藏子孫也。

堀忠金稱新、助、其先堀忠職號道前、建久中、自鎌倉始下薩、至祖父忠貫稱後初、世々居顯娃邑、父忠親稱伊賀、又、事 松齡公、去顯娃、移居小林、慶長五年、忠金從 公在京師、八月初一日、從攻伏見城、越九月十五日、戰沒於關原今播磨左衛門、即、忠金之孫也。

鳥丸重統列傳第二百二十五

鳥丸重統一作重時、稱六右衛門、又兵部少輔、曾祖重世稱左衛門、東鄉重信次子也、始食邑於鳥丸在東、因氏焉、而屬東鄉氏、祖重躬變後、父重利介紀後、天正初、重利始來事于我、為中鄉地頭職稱職徒日記云、天正二年、八月九日、未牌、平佐城使重慶府、告曰、昨日兵士、重統從 松齡公赴朝鮮、慈眼公繼至名護屋、而使箕匄治部前註三、至朝鮮、上言之於 松齡公、於是 公遣重統與治部俱至名護屋、而迎焉、慶長三年、九月廿九日、重統與押川公近執鳥銃、出營打禽、為養鷹、是時遇相良氏等棄故館皆退新寨、而明兵逐窘之、於是重統潛伏叢中、放鳥銃、射敵先驅墮馬、公近冒陣斬其首、敵兵懼而引去、翌日、明兵敗績新寨、重統出擊有功稱職徒日記云、十一月、從歸國、五年、從戰關原、既反賞祿若干石今鳥丸六右衛門、即重統子孫也。

鳥丸重珍稱右衛門、祖父重躬見子、父重通稱安藝子、重、朝鮮之役、重珍屬島津豐久、戰鬪有功子孫今在米、言也云、

富山備中列傳第二百二十六

富山或在外、備中、屬島津家口、居佐土原城、為家老、食田祿三百石、天正六年、豐後寇入日州、松齡公遣備中及酒瀨川武安伏兵於岨、而敗敵、備中躬自斬首十七級、慶長十九年、四月十九日、卒法號蘭慶常香、居土原城、子義信稱解由左衛門、或云、按諸家大權記、備中無男、以家村木十丞之子為嗣、冒富山氏、名義、天正、間、選知勇臣若干人、義信亦與焉或云、義信來野人、按職兼日記、父泰安備自志和須崎城遣富、從戰朝鮮及莊內、其後命移出水邑、子彌右衛門或云、義信有男、亦稱彌右衛門、某年、事 松齡公居柁城、為兒小姓、列小番籍、公薨之後、為谿山士、兼伊勢貞昌與力、後移薨府、其後為金山奉行今富山傳內左衛門、即此人之子孫也。

富山義陣稱清右衛門、或曰、義陣、父曰左近、領福地云、其先領大始良、因為大始良氏、後更富山氏、得佛公始就封之日、富山梅北二氏忘身徇君、棄家奉國、以故公有以富山為父、以梅北為母之語云、其子孫事 齡岳 大岳二公、有戰功、數賜褒牒云、「義陣以兵具奉行、從伐朝鮮、其後戰亡於伏見城、子義昌左、居帖佐元至義昌子十兵衛、元和、移居豐府云、

富山次十郎、島津豐久家臣也、安永之戰、中銃彈、死於風礮溪、時年十五、

大寺大炊列傳第二百二十七

大寺大炊介、姓惟宗、大寺忠達稱彦左衛門、號幸朝、之後也按記、永正間、有大寺豐盛、事大寺公、歷遷諸邑地頭職、永祿四年、戰沒於馬立、有男、亦稱大炊、為田野地頭職在日、天正三年、十月廿三日、習勒犬追物事、大炊為喚次、十一年、十月、出戌八代城、既反、十三年、九月、復戌八代城、十四年、從上井覺兼、先登岩屋城、中石被創、十五年、諸將

收師於豐後、路至梓山岨、賊兵窘迫、大炊獨止拒後、遂死之、我兵
踰岨而得退、大炊之力也、子政安唯世子計、天正十八年、閏八月、松齡公賜一、為山之
口地頭職、寬永八年、為高奉行寬永九年、兵賦稱云、政安與喜左衛門、俱以山口地頭、出兵于、

大寺刑部者、大炊弟也、戰沒於馬越即今大寺彌兵衛、

大寺大學左衛門、天文廿三年、戰沒於星原日九月、

大脇利為列傳第二百二十八

大脇利為初稱孫四郎、又稱、其先鎮西八郎為朝之次子為清稱次、為清生為綱

朝戰亡之故也、其後從 得佛公下薩、賜日州大脇邸云、為綱生為直

東氏、親為生綱初稱孫四郎、亦氏部、始來事 松齡公、綱生利為、從戰

朝鮮新羅戰、利為身貴、及莊內関原頗有功即今大脇豐兵衛、

大脇內藏允者、利為之支族也、從戰豐後、斬敵二人、後從 一唯世

子朝京師是時內藏允知關原屋道與與家、

大脇為乘稱七、從 松齡公伐朝鮮、

小川有季列傳第二百二十九

小川有季初稱又八、後、復姓日奉、其先日野家賴卿相幸、之後小川季能稱太監、或云、

適於武州、而居西小川、承久之亂、屬北條氏、斬甲斐範賴相幸、賞功封甌島地

子孫因為小川氏云、

其子季直稱小太郎、始下居甌島、季直生季有稱又太、季有生季久、季久

生公季、公季生久季守遠、久季生高季稱又太、高季生久又稱後守、久口

生公口遠江、公口生季安伊勢、季安生忠季守越前、忠季生有季或云、忠季妻吉利思、

世々領甌島、天正十四年、岩屋之戰、有季從成八代城、文祿間、有

故、更賜高橋之地施、田祿一千石、除甌島、因移居焉諸家大概記云、父忠季未

是歟、有季娶島津義虎女、生男、稱藤人、早卒、初有季之外姪伊勢長

次郎者伊勢內記言朝之美、忠季之女、以 慈眼公命、為有馬重純嗣、名純正、稱

次右衛門、至是其父伊勢貞朝上言曰、小川有季有一男、而早死、請

以臣次子長次郎為之嗣、而以其既冒有馬氏故、官命其次第為有季

嗣、因冒小川氏、名尚常、稱喜兵衛、從赴朝鮮、

小川武明、姓紀稱尾平山氏之枝族也、天正中、為牛根地頭職、

小川四郎兵衛、從死島津歲久之難法號文身好、

小川與三左衛門、為 松齡公圍人、從軍朝鮮、又從戰関原、軍敗、

公馬渡不能逝、與三乃解其鞍、自抱而歸國鞍帶黃金、重十二支、毛、賜褒牒及

世祿十石徐杜云御、子孫今在重富、世々為圍人俗杜云御、至今子孫猶賴其世

祿、

鬼塚助八列傳第三百十

鬼塚助八、從 松齡公戰木崎原、初助八與宮路紀伊介、為刎剄之

交、是戰也、短兵相接、事危急、二人乃共冒敵而死、子主稅介、天

正十四年、冬、從軍豐後、歸則命急築平佐城自十一月十一、是時主稅及宮

路三之允主糧食之事、慶長四年、五大老賞新寨之功、加封以出水五

州薩、

州薩、

萬石、此時命主稅介及福崎主水、奉檄至出水、徧諭之邑人、寬永十年、屬公子忠朗徙柁城、至今子孫在柁城云、

鬼塚兵部左衛門、助八弟、天正十四年、戰沒於野津、

鬼塚三藏、殉死於一唯世子法號即傳傳、空海定門

鬼塚吉内左衛門、天文廿三年、從攻岩劍城、與黒木七兵衛、俱入謀城中、賊兵知之、遮帰路、二人戰沒於瀨郷山六日、九月七

鬼塚對馬、從松齡公、戍飯野城、

西藩烈士干城錄卷之三十一

西藩烈士干城錄卷之三十二

大河平隆屋列傳第三百一

大河平隆屋守前、姓藤原、其先鎌足公之十七世孫則隆延文延久、延文二年、始下肥後菊池邑、因為菊池氏、則隆之六世孫、隆直守肥後、隆直第二子隆俊稱五、始更菊池、以八代為氏、隆俊生俊房稱大、俊房生光隆

守駿河、光隆生隆行守駿河、隆行生隆綱守駿河、隆綱生隆氏守駿河、隆氏生隆章守駿河、隆章生隆助守駿河、隆助生隆慶守駿河、隆慶生隆蓮守駿河、隆蓮生隆貞守駿河

隆貞生隆季守佐、隆季生隆屋、隆屋食邑於日州飯野大河平、屬北原氏、而不詳其何世始自肥後來居大河平之故云、當松齡公移治飯野城、隆屋始來事我、更八代氏為大河平氏、因命戍大河平城、而備伊東相良二氏、永祿五年、二月十三日、卒、年七十三法號宅宗前早七、按記、永祿五年、北原氏屬我、七年、公移

飯野城、與傳文不、隆屋生隆充左近侍、永祿二年、三月七日、先卒、年五十三合後讀者

隆充三男、長曰隆利稱仲太左、次曰隆豐稱左衛門、戰沒於求麻野木、次曰隆次稱左衛門、永祿五年、伊東氏來攻大河平城、衆寡不敵、外廓已破、家臣等多戰死居木場院後、渡邊三兵衛、竹下次郎兵衛、窟摩右衛門兵衛、川野千右衛門、内山為左衛門、渡邊三兵衛、助、黒江三郎右衛門、谷口主稅、吉原田良右衛門等、以下數百人戰沒、

隆利奮戰死守、内城遂全、公賜褒牒・及鍋・灰塚・榎田境内、三月廿八日、隆利卒、年廿八法號玉翁明、珠隱居士、無男、以弟隆次嗣之後、永祿七年、三月、北原兼親稱野地上言、公曰、今城拒飯野不遠、若有變、則宜步騎急來援之、請止所置戍兵、從之、伊東氏間知之、至五月卅日、義祐自將陣枯松尾地名、而圍今城、因遣使僧城中、而勸其降屬己、不聽、義祐乃急攻之、城兵力戰矢盡、於是隆次開城門、與宗族家臣百三十餘人一作百、餘人及援兵稱口越後坊、八重尾兵部、八重尾兵部、野添新右衛門、春日兵右衛門、興松等、奮戰皆死之、隆次時年十五法號花岩香、居士、無嗣、命以皆越六郎左衛門

為之嗣、初隆次姊嫁六郎左衛門、及今城陷沒之日、伊東氏遣使求麻相良氏、使者因宿六郎左衛門兄家、而密謀挾攻飯野城、六郎左衛門妻隔壁聽之、乃遣家臣八重尾石見、上言之於飯野、既而伊東氏兵果入飯野加久藤、於是乎、公有備、以故相良氏不出兵以援之、義祐遂敗績者斯妻之力也、永祿十一年、正月、召六郎左衛門夫妻、而來事飯野城、二月、賜六郎左衛門大河平地、而嗣隆次後、冒大河平氏、名隆俊稱左、其後、公再枉駕於隆俊家、且賜鳥銃云、隆俊亦無男、至慶長五年、十二月、上言、公、而以小宗隆重稱早子長子為嗣、名隆商稱小右、去年隆商年十七、從軍莊内、先登於山田城、城陷日、掌城門鑰、及是年十月、稻津掃部侵日州、隆商戰於八代宮崎、而自斬賊首、元和八年、五月廿四日、隆俊卒法號生山清水上座、寬永七年、十月廿七日、妻隆來香妙是六號、年九十一、法號來香妙是六號、是

年十一月、慈眼公將朝京師、道至於上江野、隆商往謁焉、命稱治部少、寬永十二年、七月廿二日、卒、年五十三法號財宗、僧居士、子龜千代、

母上村治部左衛門女、元和八年、從父始謁 慈眼公於上江、公使敷根中書賜各隆賢稱休兵、寬永十四年、十二月廿六日、公召隆賢至慶府、使兒玉筑後賜之鳥銃及錢一萬、續父戍大河平、十五年、正月七日、隆賢朝賀慶府、因獻鈴羊一、報賜錢二千、其後抵役於江都、萬治三年、十一月四日、寬陽公賜隆賢軍神摩利支天畫像於芝邸、十四日、泰清世子亦賜隆賢以手自所寫豐于圖詳本、延寶七年、二月十一日、卒法號圓山寺、子孫至今世々居守大河平、

大河平隆堅稱孫次、隆屋第二子、永祿七年、與長子隆光稱孫次、俱戰沒於今城隆光法號直島宗章居士、隆堅法號直島宗章居士、次子隆重、年甫六歲、為敵所擒、在飮肥凡三年、公遣商人齎金易之、因攜而還、稱源太左衛門、文祿元年、從伐朝鮮、慶長二年、七月、從衝敵艦於巨濟、八月、從攻南原城、三年、十月、戰於新寨、斬五六人首此時隆重據詳甲、尚書稱陣羽藏云、十一月、進衝敵艦、隆重先乘飛上敵艦、奮擊遂死之、年三十五心居士、長子隆商為宗室隆俊嗣、以故次子隆尚稱細石衛門、細石一作若門嗣父後、前此隆尚親戚多居大河平、以其近敵境、人々疑或其生變、於是元和八年、十二月、公召隆尚而居於柁城、至寬永十五年、正月、慈眼公封公子忠朗柁城、命諸士屬焉、是時隆尚請移居慶府、萬治元年、十一月三日、卒法號性靈院、林居士、

大河平隆貞稱是右、衛門、父曰隆文隆屋第四子、稱治部、左衛門、號清山、天正十三年、八月、隆貞攻堅志田城、被創、某年月日卒、年七十四法號心覺堂、安居士、

松岡勝兵列傳第三百三十二

松岡勝兵衛、伊勢人、初織田信長遣神戶左馬頭、監國司木造大膳亮軍于伊勢、左馬頭無男、以田中岩助大膳亮世臣、戰於美濃寺、戰子為贅婿、遂為嗣、冒

神戶氏、稱休五郎、及信長滅亡、海內板蕩、國家播遷、休五郎流落阿波津、松齡公在伏見之日、召其長子千熊為近侍、當是時、北國人丹羽五郎左衛門約卑休五郎祿千五百石、休五郎欲往、公聞焉、乃遣新納旅庵謂休五郎曰、幼子南下、而子北去、別離參商、音信難通、孤聞傷中情、孤以祿三百石與子雖寡而父子同居如何、休五郎感慟、遂委質於我、是時更曰松岡勝兵衛、慶長五年、八月、西諸侯圍伏見城、公命勝兵衛及久富休齋為仕寄奉行、詰朝勝兵衛先登松丸口、飛丸中股、創傷退營、是日城陷、以其重創故、公日親臨賜藥、以故不能從赴大垣、還大坂邸、賜俸米六十石、而養病、閑原敗後、攜妻子、從二夫人而出城遁、船至兵庫洋、遇 公船、既而船至細島、先是夫人厨船至豐後森江、與黒田如水邏舟人戰、闔舟戰沒、此時夫人乘輿為敵所燒、至是夫人假勝兵衛妻輿、而使妻騎馬而從、俱由八代還帖佐城、尋賜祿五百石、宅一區、居頃之、國中浪言、幕府大兵西下、於是使勝兵衛築蒲生城、設望樓於山頭此云堀井戶口、北尾崎矣、而番守之、未幾浪言止、十一年、命徙居平松、十三年、又徙柁城、子千熊、慶長四年、年甫十三、賜歲俸二十七石、以為侍童、五年、閑原軍敗、從而歸國、賜褒牒及田祿百石、有千熊閑原日記行世余別既記之、當繼、後更稱神戶久五郎、子孫更為江田氏、至今在柁城、

松岡九郎、弘治三年、六月戰沒於蒲生留野、

池田貞秀列傳第三百三十三

池田貞秀稱左、衛門、其先不知何許人、父曰土佐有兄曰太孫、左衛門云、事松齡公、兄曰源六、從朝鮮、而屬鎌田藏人成故館砦、及明兵來攻、力戰沒之、貞

秀自幼事 松齡公於飯野城、從討伊東氏、及選謀臣、貞秀亦與焉、後從攻堅志田獲首、又從入豐後、後與木村主殿俱從 一唯世子小田原、又從 松齡公行朝鮮、居數月、賜休暇而歸國、既而 世子復召貞秀於薩、貞秀乃與伊勢貞昌等、俱乘舟至朝鮮、去 公營猶數日程、貞秀以為山路若有急而無火、鳥銃難以為用、獨火於火繩而行、遇二鹿奔出、衆皆欲爭捕、貞秀曰、鹿驚走、賊必至、急教衆火於火繩、敵果多至、衆皆打斃之、貞昌等大責其智、及 世子薨、貞秀等奉柩而歸國、又從納 世子屍於高野山、慶長四年、從莊內、番成森田營、既而我兵進攻山田城、島津豐久使貞秀俱賊、復報曰、賊銳勢堅、急攻恐有失、豐久乃復使貞秀徹隊而退、衆不聽、貞秀亦曰、若退則為賊所乘、餘賊亦來援、則我兵多為斃、不若君親鼓而陵城、所謂疾雷不及掩耳、豐久從之、城遂陷、松齡公在伏見遙聽之、則使有川助兵衛來賜貞秀書、賞其臨機能制勝之功、五年、貞秀以步卒將往戍出水是時賜田祿、元和五年、七月、公薨、八月十六日、貞秀自剖腹於實窗寺川原而殉焉、年六十一、葬蒲生永興寺法號孝翁永忠居士、當是之時、嚴禁殉死、而為死者築地置石塔於寺院傍、其第三塔乃貞秀塔也、貞秀二男、長貞盛稱治、次貞安稱孫、貞盛從朝鮮、新秦之戰、斬敵七人、又從關原而陣沒、一貞安從父之莊內、九月慶長四年、平田增宗使貞安為導出山田砦、巡行都城近邑、賊出鬪、貞安被創、及賊伏兵多殺我騎兵、伊勢貞昌請舉貞安為麾下、後為近侍、賜田祿若干石、其後從父移出水邑、又增賜若干石、十月慶長五年、與加藤清正兵戰於肥後佐敷、而被創即貞安之子孫也、

池田平四郎、從 松齡公赴朝鮮、

池田右近、事 松齡公 慈眼公於柅城、為兵具奉行、寬永十四年、從諸將行島原、

池田市右衛門、事 慈眼公為柅城兵具奉行、

池田軍兵衛、伊作人、事 大中公被遇、

家村重昭列傳第三百三十四

家村六左衛門重昭、初稱福山大助、其先伊集院氏支族也、曾祖源兵衛久信、祖父曾兵衛久貞信佐司、父三太夫久亭、黨伊集院忠真戰沒於野尻、重昭去佐司來于覺府、而賴外戚家村重治、而娶其女、遂為之養子、冒家村氏、生子、是曰長右衛門重義口口公、為、近侍、稱候云云、因以重義為家嫡、而重昭為家村氏小宗、後從浪華島原有功今家村喜平太、即重昭子孫也、

家村筑後守信是又稱彦次郎、其先涉谷莊司重國、其子中山太郎重實、其子口口、領遠州家村、其子孫始來薩、父曰源左衛門信定稱彦次郎、信是事 貫明公見遇、子源左衛門信房稱彦次郎、善連歌、亦事 公、天正十五年、從朝京師疑是信房子、而亦稱源左衛門也、今家村次郎左衛門、即信房之子孫也、

家村木工之允、慶長之初居蒲生、十一年、命移居平松、十三年、又移居柅城、每從軍有功、

家村若狹、屬伊集院久春居清水城、永祿中、肝付氏出兵放火數根村落、延燒上井邑、隅州兵出救之、賊兵急迫之、我兵不能退、久春望見之、乃與若狹等率兵出城、疾前突賊、賊兵驚散、我兵乃還、後我兵出刈廻邑之麥、賊兵卒至、久春與之戰于上箇尾、而被創、若狹奮擊援退、其後命徙居蒲生、

家村清兵衛住常阿崎平三太夫重家長子中山一節重實、證之廿六世孫家女信康第一子節也、學劍術尾東鄉重位、及肥前島原

賊起、從諸將血戰有功今家村孝右衛門、即住常備也。

家村讚岐信是弟、或後守、不詳其事業今家村平八郎、此人之裔也。

猪股左近列傳第三百十五

猪股左近者、伊東氏家臣也、祖父曰紀伊介號常閑、領日州粟生野境內二邑、父曰宇右衛門、居都於郡、而通志於我、遣左近姊質於我、姊為人温良恭敬、而寡言、及公女此云菊、質於京師之日、乃擇姊命局役、賜名新太夫、及田祿三百石、從而行焉共後至藏子孫家於新太、新太夫之質於我也、左近亦從而至薩、後命左近為新太夫後、而為近侍、及松齡公朝於京師、從而抵役於伏見邸、賜田祿六十石、慶長十九年、浪華之役、命左近為造戰艦奉行我浪華出賦籍云、猪股為右衛門、領田祿二百、而田四卒一馬、左近初蓋稱為右衛門、其後命為代官役、子為右衛門則康、為郡奉行今猪股為右衛門、即左近之裔也。

市成掃部列傳第三百三十六

市成掃部兵衛、七世祖周防介忠秀者、即義天公弟也、而為平山越後守養子、冒平山氏、後有故出平山氏、居市成邑、因為市成氏云、掃部初居伊作、而事大中公、見遇、天正十五年、六月、從貫明公朝京師、十六年、豐公賜茅野野州在播磨、能勢在播磨、二邑於我、於是公命掃部及帖佐宗張為代官役、而留伏水有年、子左介、有故改市成氏復為平山氏、從戰朝鮮及莊內、又從諸將渡海征琉球楚時長賦籍云、市成左介出兵七人、子平山掃部兵衛、孫內藏之丞忠春、更平山氏復為市成氏云、今市成藏之丞、其後裔也。市成周防、天正初、命為膳宰、

今井兼諫列傳第三百三十七

今井市兵衛兼諫、剃髮號松閏登、初稱能、仁禮賴景第二子、而為今井道與泉州境坊人、即養子、初松齡公以茶事與道與交、關原敗後、道與為公盡忠、而得還國、公德之、因賜田祿千石、而遙領焉、後道與數詣薩、因請曰、若以公臣之子、而為臣之養子、則附與之所賜田祿、而長奉公家之勤、於是以兼諫為之養子、而分賜田祿七百石、後為納戶奉行、轉徙小山一作川百次地頭職、兼諫之子孫也、

今井仲兵衛貞則、寺澤氏之支族也、父曰今井十右衛門貞舊、事唐津城主寺澤兵庫頭正成、而為家老、領田祿三千石、正成以其姊妻之、數以事諫正成、不聽、讒人因間之、正成遂賜死於貞舊、是時貞則去唐津、轉客他邦、慈眼公知其父死忠、而憐其飄泊、寬永六年、召之於薩、而賜田祿三百石、貞則諱今井氏更為佐藤氏即母、正成聞焉、請將誅之、公不可、其後復今井氏云、今井貞則子孫也。

指宿忠政列傳第三百三十八

指宿清左衛門忠政初稱民部、祖能登守忠次指宿郡時彦次孫、父清六左衛門忠次或云、忠次始嘗為島津尚久妻、覽誓日記、天正十一年、忠政從伐朝鮮、又從戰關原、軍敗、從而歸國、賜褒牒及田祿一百石、寬永二年、乙丑、三月十一日、卒、年八十三、法號昌卜利繁居士、墓在福山不動寺、子內藏助忠易、寬永五年、自移居出水、十月十一日、增賜田祿五十石指宿清左衛門、即其子孫、

指宿安藝守忠貞、事梅岳君、

指宿主税介、事 貫明公居國分、列為小番籍、公年老齒落之日、遣主税藏之龍昌寺、慶長十六年、國分田祿籍云、主税領八十五石、

指宿丹後、弘治元年、正月廿五日、與弟子丸播磨俱戰死於蒲生北村重洪記、以丹、後作石馬光。、子四郎次郎、從父苦戰於北村、

指宿十郎右衛門忠利、從伐朝鮮、泗川之捷、被赤緞甲、慶長五年、命居高岡子孫至今、

指宿壹岐慶長十六年、國分田祿籍、指宿加賀天正初年、指宿左近兵衛忠廣、指宿丹波、四人共不詳其事業、

飯牟禮光家列傳第三百二十九

飯牟禮光家、稱紀伊介、事 貫明公、慶長十四年、從諸將入琉球、及國王降、主將樺山久高遣光家及貴島賴張稱采、歸國、而上言之於慶府、十五年、公疾病、使吉田六郎右衛門、命光家・及伊地知勝左衛門曰、自今以後、煩爾等、以托翁主、其盡力奉事焉、又遣命光家・及末田主馬・皿良善助曰、孤沒則汝等監孤浴尸、而他人勿與焉、遂從之十六年、國分田祿籍云、

飯牟禮權右衛門忠辰初名光秀、、其先不詳何許人或云、有僧自稱者、居紀州、後遷後、名光宗、、飯牟禮權建嗣於伊集院邑、始為飯牟禮氏、光秋生對馬光昌、光昌生部兵衛、、貫明公命忠辰給事國分君慈眼公、、至 慈眼公之世、改飯牟禮氏為町田氏不知何由為、、移居覺府、慶長末年、為秋目地頭職初天正十五年、井牟禮豐五郎者、蓋忠辰也、、子忠繼初稱勝十郎、、某年命至琉球、而病卒、

大重久實列傳第四百十

大重久實稱三、、其先伊集院氏四世國第五子彌三郎忠秀、始為大重氏、忠秀之十三孫安房助忠貞、生久實、久實從關原、從歸國、路戰沒於豐後森江、長子某、次子久永初稱五郎右衛門、、從討島原賊大重五郎右子孫、

大重忠安稱六、、曾祖左京亮久永大重氏十、、祖對馬忠廣久永次、、父八郎左衛門忠光、忠安從如豐後及朝鮮、元和九年、三月十四日、卒、年七十九、子忠修初稱平六、又大次長、、為 松齡公從卒、慶二年、年十四、二月、從渡於朝鮮、又從關原、既反、賜褒牒及田祿十五石、寬永九年、命移居蒲生、有忠修自記行於世忠修子孫今、

大迫元勝列傳第四百一十一

大迫元勝稱佐渡、、父曰對馬某稱三子、、元勝事 貫明公、奉命行成肥後佐敷、又從軍入豐後、公始謁豐公之日、元勝肩行 公輿、而扶杖甚大或曰、竹杖內、、爾來俗呼大杖、謂之佐渡杖云按記、天正十七年、八月、文祿元年、六月、慶長六年、、長子五郎左衛門、慶長元年、九月賜田祿若干石、命移居高岡、元勝乃讓之家督、而分財行焉、後與其田廬財器於次子鄉兵衛、以為小宗、而俱居伊集院伊集院、

大迫元重初稱彌兵衛、、又對馬、其先不詳、父曰對馬元義、元義本氏柳田、稱傳左衛門、事 貫明公、子元信初稱彌兵衛、、居伊集院、後命移高岡邑、子元親稱彌兵衛、、為島津久元之與力、後為高山士、其後又為覺府士元親之孫也、、大迫隼人、殉死公子歲久、法號佐叟善香禪定門、

大迫龜相、木崎原之役、敵敗績、公踞交椅而俟步騎旋、有一人提甲首而走至者、公謂左右曰、敵計而來邪、汝等警焉、左右問誰何、答曰、身是大迫村^{野在飯}之百姓、向刈藪而還、適見單騎涉隘而遁、狙擊之、墮馬、以鎌鉤斷其首、極龜相^{龜相、俗謂、}之稱、公賞曰、身是農民、功乃武夫、夫擢彼士列、因賜姓大迫、稱龜相^{必足稱也、其秀民之能為王者、}、後養飯野士為子、冒大迫氏、稱源次郎、其子孫居大迫村、

鹿島重國列傳第四百十二

鹿島重國、稱駿河^{初稱右、}衛門、姓平、父曰鄉兵衛、其先從得佛公始下薩云、天正中、重國勤勞於國家、慶長元年、七月六日、近衛信輔公自坊津至覺府、又至志布志、而乘舟歸京師、重國與本田源右衛門俱為先導、後從慈眼公朝鮮、新寨之捷、被黑緞甲云、四年、公誅伊集院幸侃於伏水邸、而命重國下薩、上言之於貫明公、五年、為地頭相談役、移居高岡、十五年、命重國及毛利元親為奉行、航海丈量琉球、其後又命為奉行、丈量覺府、以勘定士人宅地、重國三男、伯仲早卒、叔國途^{稱憲兵、}、嗣、為馬廻、移居覺府、國途有一男通國^{稱傳、}、為泰清世子門子、萬治三年、覺府浪說曰、堀田正信^{稱上野介、都下總佐會}據城陰招致天下亡命者、此時世子在江戶、於是通國以自賦急馳至江戶、世子賞賜白銀若干云^{今鹿島傳五左衛門、即通國子孫也、}

鹿島七右衛門、號德安、猿渡信光弟也、鹿島重國請以為養子、因冒鹿島氏、後從信光居羽月、及信光戰亡、其子信豐續為羽月地頭、而猶幼、以故命德安為假地頭、子太郎兵衛、號宗仙、率羽月兵從島原、其後命本田右衛門為羽月地頭、宗仙與之相訟、事不直、因命宗

仙徙居坊津、

横山玄蕃列傳第四百十三

横山玄蕃^{初稱助、}允、父曰大泉坊、玄蕃初居山田^{佐在帖、}、下大隅之亂、移居向島、而從地頭鎌田出雲攻牛根城、有功、後轉居上井、及田上^{水在垂、}、大崎、財部、宮崎、有戰功云、子忠篤^{初稱左藤次、}、及松齡公自飯野移栗野、召而賜稱弓內、後居帖佐、從朝鮮、及班師、命自博多歸國、慶長四年、從如莊內、攻恒吉城、有功、九月、命歸覺府、而使至上國、從攻伏見城、関原之敗、手自斬敵五人、從至駒野嶺、則公疲甚、乃脫甲捨之路、忠篤曰、不忍捨、公甲於原野、臣請貫而而代、公、遂從至住吉、乃遣忠篤告君夫人於大坂邸曰、今日乃公無恙而得至住吉、因贈忠篤所貫甲于君夫人^{後稱甲于京師、}、是時夫人賜忠篤等杯酒、還報、公賞賜忠篤吉光刀、及還國、賜褒牌及田祿若干石、寬永間、病卒、

横山義員^{稱四郎兵衛、其先府內守輝信之第二子也、後守輝請、稱清之十七世孫、常陸介義隆、義隆第三子也、等義隆、義、}、朝鮮^{今横山五郎右衛門、義員子孫也、}、

横山平次郎、関原之敗、從而歸國、

宅間與八列傳第四百十四

宅間與八左衛門、天文十七年、九月、從戰姬木、廿三年、九月、以步卒將赴岩劍、天正十五年、羽柴秀長抵日州、與八援山田有信守高城、十六年、從公朝京師、其後為納殿役、從慈眼公如朝鮮、慶

長三年、十一月、松齡公進衝敵艦、時 慈眼公疾而留在興善島、翌日聞巨銃之音大起、於是扶疾、而乘舟赴南海島、路聞 公戰危、即貫甲急乘戰艦、與人留護 公船、既而從班師、舟至博多津云、及上國亂起、與人祗役於大坂、關原敗後、公遁至大坂、從而歸國、路至豐後洋、與黑田氏邏舟戰、遂死之、

宅間八兵衛道重、柁城人、後為柁城步卒將、

宅間樂右衛門、祗役江都櫻田邸、寬永十二年、七月十二日、夜、江都大火、延燒及邸、君夫人及諸公子將出而避火、內庭門鎖固、樂右衛門乃擊破門板、因俱得出、賜田祿二十石、

財部盛弘列傳第四百十五

財部傳內左衛門盛弘、其先種子島氏支族、世々領日州財部、因氏（領也）三世職也焉、其後子孫衰微、不能自立、因屬本田氏、永祿間、盛弘為本田氏戍笑隈城、後徵為廳下士、從軍屢有功、及伊東氏侵飯野、盛弘迎戰被重創、歸城而死、子盛明（初稱傳內、又傳石、衛門傳一作典）、從如朝鮮（新泰之戰、貫結浦甲、設鐵鑪以為前立）、又從攻伏水城、先登與敵相搏、俱刺而沒、子盛清（稱基兵、衛兵）、亦赴朝鮮、慶長三年、九月廿八日、公命盛清自新寨使故館、而使戍兵退、至則明兵既圍故館、盛清單騎衝中堅、遂入城、告 公命、復衝重圍還報、是時多中矢、甲堅不洞、十一月、衝敵艦而陣亡（按財部某次、從如朝鮮、蓋盛清之別稱也）、弟盛秀（稱淡、治）、嗣父後、松齡公親教盛秀馬術、後以為厩別當、盛秀有智計、為官生財多云（今財部傳右衛門、即盛秀子孫也）、

田中掃部列傳第四百十六

田中掃部兵衛、日野黃門國光之苗裔、初國光有罪、謫薩之硫磺島、後詔又遷置之駕籠邑田中門、有妾生子、因為田中氏云、掃部事 梅岳君、為同朋職、號珍阿彌、弘治元年、三月、戰死於平松、子國明（稱藤次兵衛、號等琳）、以畫工事 貫明公（或云、國明亦號珍阿彌、為同朋職、南浦文基云、公世國明、基字治川、傳、藏之妙谷寺、又國明跡、而藏之高野山、據之、則其為畫工明矣）、子

堅助（初稱彌、下）、亦為画工、事 松齡公、為納殿役、天正十五年、從 貫明公朝京師、堅助寄宿古川久四郎（近衛公者所、家臣）、而審告其為日野氏之枝族、則久四郎乃告之山縣右衛門尉（院所）、右衛門尉白之日野亞相輝資公、公曰、孤久聞先公庶族在于薩、召而見焉（是時堅助、持刀及銀、因賜日野氏資字朝服）、及照契、從是氏日野、名資顯（稱監物、後改稱、西膳、號等琳）、從行朝鮮、元和五年、公女孫自江戶邸、歸桑名侯、資顯以旅家老、率從者十二人、從行焉、初資顯食田祿四百石、及行桑名、益賜三百石、後病卒於桑名（資顯子孫、在柁城）、

田中佐渡（初稱太郎、又對馬）、珍阿彌第二子、事 貫明公、從軍屢有功、慶長十一年、命佐渡等轉漕石船至江都、及 公薨、為國分君傳、居國分城、其子後藤兵衛、移居覺府、為 泰清世子傳、寬永十五年、以騎馬行人行島原（今田中吉左衛門、即後藤之子孫也）、

田中國賢（稱太郎、兵衛）、等琳第二子、亦號珍阿彌、而為同朋職（朝鮮某戰、有田中、善國賢也）、慈眼公學劍術於東鄉重位也、每命國賢副焉、其後以善擊刀為士大夫之儀表云（今田中藤次兵衛、即國賢子孫也）、

田中伊豆、父曰善兵衛、其先佐々木氏支葉、慶長間、幕府麾下佐々木中務贈伊豆書、改為田中氏（本多在渡守亦有所贈伊豆書云、今田中善兵衛、即伊豆子孫也）、

田中三右衛門、殉死於 一唯世子、法號俊哲全逸禪定門、

竹內實康列傳第四百十七

竹內實康明備、初事那答院氏、後來仕我、數有戰功、慶長五年、關原軍敗、貫明公聞焉、乃使島津忠長將兵往出水城、是時小西行長未知其死生、其家臣本河主馬來出水、而乞援兵、於是十月、五代友慶・山鹿鎮幸將三百餘人、往守長島、時實康亦在長島、守加世堂、而聞加藤清正部將大藏崎有右衛門・及有馬氏兵乘舟五十餘艘來、將攻長島、而長島人有抱二心者、於是忠長命實康及友慶等、謀而督捕謀叛者三十餘人、送之阿久根、而盡誅之、既而忠長使稅所正右衛門謂實康等曰、長島隔在海中、有急不可遽救、應棄而引還出水、於是衆議不決、實康前曰、吾輩奉公命、遠戍焉、與諸君俱致死而守拒焉耳、鎮幸泣謂衆曰、實康忠肝義膽、可比古人、吾輩亦願曝骨於此、如幸得還魔府、與諸君俱上言其忠誠於官學、十月、我兵與加藤氏兵大戰於佐敷海上、實康與姪竹內納右衛門、俱單舸力戰、忠長危急、實康克救而還、

竹內自休、備前人、為黃門秀長家臣、及秀長敗走關原、自休漂流於浪華、而負鼎俎、以滋味為業、是時島津又四郎在京師、告之 貫明公、公乃命召自休以為庖宰、而居國分、賜十人賦及俸米三十石、其後 慈眼公命徙居魔府、賜宅一區、正保四年、丁亥、六月十一日、卒、法號一山自休居士、墳墓在翁心軒今竹內助也、自休子孫也、

竹內善助、事 梅岳君於加世田城、後歷事 大中公貫明公、移居財部及諸邑、從赴朝鮮、子彌右衛門、從行關原及浪華今竹內十郎右衛門、即善助子孫也、

西藩烈士干城錄卷之三十二

卷之卅三

- 高橋種直 古市實清 皿良貞行
- 田尻統種 國分友積 江田兼年
- 田上筑前 河野通泰 隈岡長守
- 園田實明 弟子丸備前 赤崎丹後
- 中邨義種 襄輪重親
- 中江意温 志賀播磨
- 奈須美作 志岐親昌
- 山鹿鎮幸 榎木隼人
- 福島忠辰 阿蘇惟永

卷之卅四

諸氏合傳

西藩烈士干城錄

卅三之卅四

西藩烈士干城錄卷之三十三

高橋種直列傳第四百十八

高橋種直初名延時、稱長吉、又、直、諱、又、時、師右衛門、、複姓大藏、其先對馬守春胤、父曰右近大夫元種、世々領豐前國數郡、而居小倉城、天正十四年、元種始屬我、岩屋之役、遣兵援我、十五年、豐太閤西下、元種拒守三月、衆寡不敵、遂奉使於浪華城、而降屬太閤、則以豐前數郡改易日州縣邑田祿

五萬三十石、因移縣城、及莊內之役起、東照廟命元種來援我軍、慈眼公固辭焉、乃遣家老吐師經次來援、十八年、冬、元種有罪、幕府籍沒縣城、流之於東興棚倉、長子右京大夫於二本松^州、是時種直年甫七、家老經次次等衛護、而來賴我、公與元種舊相識、且以其去國日託孤故、命居之日州綾邑、賜俸米一千苞、至元和二年、種直上言曰、以父籍沒城邑、當改高橋氏、而冒外戚田原氏、命曰、可、三年、九月、慈眼公歸自京師、路經綾邑、時種直始謁焉、賜之盛光小刀、翌年、春、種直至覺府、拜其辱、又至柁城、謁松齡公、亦賜之氏房小刀、六年、命移居覺府、賜宅一區、及田祿一千石、寬永十五年、正月、將兵赴島原、萬治二年、白官復高橋氏、三年、九月、為大崎地頭職^{今高橋家、即種直之子孫也}、

田尻統種列傳第四百十九

田尻統種^{稱尊、次稱中務}、父曰丹後守鑑種^{初稱中務、大輔}、領筑後柳川田祿六萬石、初貫明公略地至肥後八代、是時松齡公贈鑑種書、諭之曰、方今我將有事於肥筑子為我持重、以鎮守一方、鑑種報曰、謹受命、公乃贈之矢千・鉄砲二・火藥壺一、當此之時、肥前龍造寺隆信勢方強、侵暴筑肥諸國、而聞鑑種與我通好、大怒、率衆、攻柳川城、鑑種告急我、我乃擇精兵三百人、往救柳川城、居凡三年、糧盡而歸薩、鑑種不能孤立、遂質子嘉平次以乞和於隆信、且約會於境場、隆信許之、鑑種乃率三百人赴之、隆信伏兵中途、盡擊殺之、將并殺嘉平次、隆信母夫人憫之、而請為出家、號自龍、後還俗、往寓大友氏家臣本莊半大夫家、因冒本莊氏、稱彥右衛門、後大友氏賜名統種、且祿若干石、彥右衛門以其有志於我故、辭不受、而轉客豐後、復田尻氏、改

稱嘉兵衛、後來薩、至柁城、求臣事松齡公、公曰、孤既遐世不與國政、子姑婦豐後、孤當告之覺府、而召子、其後統種攜孫及妻妹及家臣一百餘人、來薩州串木野、復至柁城、於是公告之覺府、而賜邸宅於市來江口、及田祿百五十石、後慈眼公又賜百五十石、而徙居伊集院、其後復益賜百五十石、而徙居覺府、遂委質、獻寶刀而列上土籍云^{今田尻八郎右衛門、即家種之子孫也}、

田尻種時^{初稱是助、又、志左衛門}、其先不知何許人、世々食邑於田尻^{在伊}、因氏焉、種時事貫明公、後從慈眼公行朝鮮、而與樺山久高等俱窘於南海、又從行開原、子種春^{稱小、或稱小}、殉死、貫明公、時年三十^{法隆寺今宗作居士、廣孝、福昌寺、公廟前第十七地藏石塔是也}、無男、以本田內膳次子大吉為之義子、冒田尻氏、名種長^{稱次右衛門、今長裔、田尻氏兵衛、即種也}、

田上筑前列傳第五百十

田上筑前^{初稱內記}居加世田邑、從松齡公移飯野城、而使筑前居城背岡、元龜之初、伊東氏築砦於三山、以窺我虛實、一日飯野岡背人多往來、筑前父子疑有寇至、乃俱登岡而望見之、獨老母及小女輩留在家、及午有火燒其家、所藏書記及財器多燒盡、公望見火起、急引川上三河等、出城來救、聞其自失而還、翌日召父子、而賜父長刀、子小刀、後從徙栗野、復居城背岡、後又從移居帖佐城、子利兵衛、從父移居飯野、及栗野、從朝鮮、及班師、命掌兵器、十二月廿八日、夜、遇颶風大起、覆船、溺者十八人^{家臣五人、及知事、醫師十二人、及備前美門家臣廿一人、麻薩法師一人、此二十八人則前日請知舟事而乘焉云}、利兵衛及楫師二人、僅得上岸、天明而問人地名、則肥前名護屋也、乃請而告薩摩本營、則川上忠兄假之衣及大小刀、因以至本營、是時

失 公前賜之刀於海中云、其後改稱與八左衛門、莊內之役、擊殺賊伊久野玄蕃我兵前燒志和地城柵、城兵能拒、與八等奮擊燒盡柵、後命率士六百餘人往居於出水邑、其後命數徙居佗邑、以備寇云、

園田實明列傳第五百十一

園田實明按舊記、作實明、蓋初名也、其先某、屬 義天公討肝付氏、有功、應

永十二年、八月八日、賜褒牒及烏帽子地名、在屬地、園田氏祖先某、其十二世孫實秀者、戰沒於日州、未知為

其誰、大永六年、六月十五日、島津實久襲清水城、事急、大中公遁

至實明家、實明匿公于屋後叢祠中實此、遂兵不覺而退去、於是實明

送 公至長谷別府村、在谷山五箇、公遂得全於難、而至於伊作、天文六年、梅

岳君自將平定伊集院邑、進至覺府、陣犬迫村、實久來襲之、是時實

明率兵出其陣後突、擊敗之、實久遂走谿山、後實明女給事 松齡

公、而生 一唯世子、及 慈眼公、及諸公子後嗣人尊女謂、實明為納戶

役、而卒、妻給事掖庭、後死法號稱妙、實明公為歌悼惜焉、一實明有

二男、長又次郎、戰沒於生別府、次實利門後亦請在衛、以 一唯世子近

侍從朝鮮、後為普請奉行、其後為納殿役、子實政後、為船奉行、

及納殿役即實政子孫也、

園田清吉、關原之敗、從而歸國、賜褒牒及田祿五十石、

園田後藤兵衛、南鄉人、天文二年、八月、後藤開島津實久來襲南鄉

城、急至田布施、告之 梅岳君、君引兵救之云、

園田與右衛門、天文廿三年、九月從戰于帖佐脇元先登、

園田佐渡、其先布施內皇子之適流河內守利實者、平康中、領上總州

園田郡方三十町、因氏焉、其子孫始來於薩居焉、佐渡其後裔又次某第三子、筑後實利弟也云寬永五年生云、今園田等兵衛、

中村義種列傳第五百十二

中村紀伊介義種初稱豐由、其先 道義公第二子和泉忠氏之三世孫氏

儀、氏儀第二子又十郎久義、久義之五世孫又十郎忠元、屬豐州家、

居日州飢肥城、而豐州家與伊東氏約和之日、以忠元質伊東氏、置之

於新田義秀稱四郎左衛門、新之所、後和議不成、忠元將被刑、而以義秀無男

故、請忠元以為已贅壻、遂以為嗣、改名義忠稱右衛、義忠生秀義、秀

義生義種、義種在伊東氏、而為我盡忠竭力、遂謀陷飢肥城、此人之力也、後復歸薩、從軍有功、長子光義稱長兵、戰沒於堅志田後肥、次子

與左衛門、嗣之後、名義光、亦稱喜兵衛、今中村早太、其後裔也、

中邨舍人、長濱士、天文廿三年、八月廿九日、戰沒於柅城、

中村作左衛門、父曰常和、居京師、以織繪為業、以資我國家用、及

關原軍敗、我國人多往賴之、常和乃匿之倉廩中、而上言諸近衛公

邸、公則請之 幕府、而後皆得歸國、於是官賞其功、賜俸米若干

石、至作左衛門、始來薩、則命隸之士籍云今中村隸右衛門、

中江意温列傳第五百十三

中江意温開琳法、江州佐々木氏支族、食邑於江州九之里中江、天文

間、佐々木氏滅亡、意温齋兄弟皆死亡、意温齋以年少學書而寓山

寺、獨得免於難、及長至京師、學醫於半井驢庵所、遂以醫名、永祿

寺、獨得免於難、及長至京師、學醫於半井驢庵所、遂以醫名、永祿

寺、獨得免於難、及長至京師、學醫於半井驢庵所、遂以醫名、永祿

寺、獨得免於難、及長至京師、學醫於半井驢庵所、遂以醫名、永祿

中、意溫齋來仕我、是時近衛植家公附書於意溫齋、以託之。大中
公、公乃賜田祿若干石、及近衛前久公左遷於薩之日、亦與。貫明公
書、復託意溫齋、後有上國使者至、則命意溫齋迎送之云、天正十四
年、冬、公征豐後、進軍日州鹽見、當此時、無有醫之侍左右者、
則町田久倍等遺意溫齋連名書、急徵之行營云、意溫齋長子員清初名與助、
後改員清、亦稱意溫齋。、
不繼父後、而為文之和尚門人今中江右衛門、
即員清之子孫也。、以故次子瑞僊亦稱意溫齋。、為父
後、瑞僊幼失父、及長至京師、受醫祐乘法印之門、及業成、慈眼公
召下薩今中江右衛門、
即瑞僊之子孫也。、

奈須美作列傳第一百五十四

奈須美作、父曰左近將監、其先奈須宗高稱與、
中稱與、
小大、從得
佛公始下薩、而居日州臼杵郡、後移居椎葉山、而世世領焉、因名其
地曰奈須云、及左近之世、臣屬大友氏、當是之時、貫明公傳檄於
左近曰、方今孤略日州地、子如為孤先驅、則邊境邑邨令子為宰、左
近許諾焉、其子美作、年甫十三、則執質見。松齡公、屬麾下、而每
從軍、豐公西下之日、召見美作、列為小諸侯、而領奈須如舊、於是
美作以次第主膳者來仕我、公賜之田祿五百石、美作長子先卒、美
作乃乞主膳以為已後、而以其第五郎左衛門代主膳仕我、其後奈須姦
民瞰主膳來薩也、相聚作亂、於是幕府使者來質其亂、主膳乃往
江戶而質焉、居頃之、台廟薨、吏亦多改易、以故事久不斷、於
是幕府命置主膳于安藤對馬守所上野州、
崎城主。未幾、對馬守亦卒、當此之
時、奈須五郎左衛門死無子、於是公乞主膳子五郎者於安藤侯、以
為五郎左衛門嗣、主膳竟卒於高崎、有女、乃以某氏子為贅婿、因冒
奈須氏、而世々臣事安藤侯云、

山鹿鎮幸列傳第一百五十五

山鹿越右衛門鎮幸、其先大友氏始祖能直次子田原中務少輔泰廣、泰
廣生河內守親廣戰於山、
城州。、親廣生親盈、親盈生親幸、親幸無男、以宗子
大友貞順次子為嗣、是曰左近將監親直戰於天寺、
親直生親光、
親光無男、
以大友氏泰次子為嗣、
是曰河內守親氏、
江州、
親氏生兵庫頭親宗、
戰於常、
親宗生常陸守親虎、
後州、
親虎無男、
大友親著第三男為嗣、
是曰河內守朝將、
朝將生河內守親弘、
戰於筑前州、
親弘生河內守親忠、
初常陸守、
又左近、
親信生右馬頭親貫、
戰於筑前、
親貫生
新左衛門親國、親國將兵擊菊池肥後守、有功、賞賜肥後山鹿郡、因
城焉實其功、
後人、、後戰沒於筑後、初親國以長子左近大夫鑑直出為吉弘氏
嗣、故次子四郎左衛門續朝繼父後、天正六年、戰沒於日州高城城在新、
城。、
續朝生兵庫頭鎮忠、自親國至鎮忠、居山鹿城、鎮忠始來事我慶長中、
來事、
我、
賜田三百六十、
未如何是、、關原之敗、與弟親豐稱長左、
稱長左、
稱長左、俱戰沒焉福智寺、
戰、
鎮忠生鎮幸、
鎮幸改田原氏始為山鹿氏、
慶長四年、
從莊內、
十一年、
我漕獻城石於
江都、
命鎮幸等主舟事、
一日水手等爭功、
舟中喧嘩、
鎮幸能辨而後
息、
既而達江都、
謁閣老本多佐渡守、
佐渡守賜之衣服、
既而歸國、
十四年、
以船奉行、
從諸將征琉球、
寬永六年、
九月三日、
卒、
一中有故曰、
法號秋岸月窗居士、
鎮幸生太郎兵衛鎮口、
寬永十五年、
戰沒於肥前
島原、
初鎮口父死之後、
流落無賴、
至筑後、
賴立花疾稱川、
疾、居數年、
及島原賊起、
鎮口與子親貞初稱彌介、
稱彌介、
稱彌介、又俱赴焉、
諸軍進攻城之日、
鎮口大
呼曰、
身是薩兵、
山鹿太郎兵衛、
先登衝堅敵而沒焉、
其後親貞復歸
我今山鹿治右衛門、
我即親貞子孫也。、

福島忠辰列傳第一百五十六

福島忠辰初吉武、稱半助、又稱明、號東橋齋。、父曰新左衛門事、公女區國分、而為辭殿役人。、永祿七年生、及長事

松齡公、居於飯野城、其後命移居隅州蒲生、賜田祿七十石、天正十

八年、忠辰年二十七、騎從一唯世子行小田原、而與聞兵器事、文

祿元年、從軍朝鮮、二年、世子疾病、忠辰侍湯藥、九月八日、枕

忠辰膝遂薨於營中、於是忠辰與眾奉柩歸葬於薩、慶長四年、從軍莊

內、五年、從關原、軍敗相失、公所、浪落二年、而後歸薩、後以納

殿役、從君夫人至江都、祗役凡十五年、其後護衛侍女某氏伊勢貞昭母、而

歸薩、致仕居谿山邑、正保四年、六月四日、卒、年八十四今福島半助、即忠辰之子孫、

古市實清列傳第五百十七

古市實清門長、羽州人也、其先最上氏之支族、最上氏、足利氏支族斯波氏之後裔也、斯、波氏受封於羽州最上郡、因為最上氏、父

曰甲斐、攜實清俱寄寓京師、後下薩坊津、而與種子島藏人相識、因

又往種子島而依居焉、梅岳君聞其善於詞令、遣伊集院忠朗召甲斐

而使京師、近衛公館、是時甲斐年老、不能遠奉使事、乃請使實清、

及君為伊呂波歌、又使實清于京師、而請近衛公之批評、大中

公亦使實清於京師、而拜其任官之辱、其後幕府賜諱字於實明公、

亦使實清而拜謝其辱、既反、褒賜田祿若干石實清之世請與東宗至最上氏、改古市氏為、最上氏、今最上新左衛門、即其子孫也。

古市新八、實清之第四子、事貫明公為百引地頭職、天正十五年、

三月、新八等二十八人從公女龜壽、稱壽、乘船發川內、往質京師、十六年、從

歸國、初貫明公以種子島時堯女為夫人、時堯支族川東時稱太郎左衛門、子孫存種子島、

以其女從焉、及公女往於京師、以時近女從之、其後從歸薩、十八

年、復從至京師、而以其多勤勞故、賜女褒牒及田祿三百石、是時以

新八為之假子、因冒川東氏、名時弘、稱善左衛門、後又或冒北條

氏、稱土佐云、其後伯兄古市舍人卒、仲兄孫四郎事貫明公而被

罪、叔兄孫市有病不能繼父後、以故時弘出川東氏繼父後、復古市

氏、更名義時、文祿元年、三月、義時及妻從公女復往質京師、居凡

九年、慶長五年、關原軍敗、九月廿一日、義時從君夫人而歸國、是

時義時之女亦從在浪華城中、二夫人將潛出城中而歸薩、而不有官憲

之符驗、不得出城門、於是老臣等相謀、使義時女及家臣等三人及婢

二人出邸中、試至城門、邏卒果呼曰、誰何、不應、又呼曰、奚自、

亦不應、邏卒曰、此等人無賴、遂逐歸之、翌日用僧仙秀之計、女從

二夫人而出城門、遂得俱歸國、後又命義時及平田大炊介祗役於浪

華、居三年而還、後復命義時及稅所彌右俱為浪華藏奉行代鎌田加、居一

年、又命本田伊賀代於彌右、而彌右還國、唯義時居凡三年、畢奉行

事而還、又命祗役於江都、其後義時又更古市氏為最上氏、寬永七

年、六月十二日、卒或記云、寬永九年、明官船來琉球、是時命義時及新納忠清祗役於琉球、或云、至義時之四世、孫善左衛門時方世、元禄八年、正月、改北條氏為種子島氏、今種子島善左衛門、即其子孫也、

按此說、似與傳記、不合、俟再考。

國分友積列傳第五百十八

國分友積初稱平次郎、又左京、、其先隱岐守友成、友成生貞友第三子、稱備後、、貞友生友賢

稱備、、友賢生友貞稱次郎、、友貞生友重稱備、、友重生友俊稱後、、

友俊生友孝稱新左、、友孝生朗友稱新左、、朗友生規友第五子、稱、左衛門、、規友生友朝稱備、、

友朝生友隆稱筑、、友隆生定友稱筑、、定友生友積、世々知水引天神祠事、

及豐公入薩、進陣於川內、友積負神主而避難於麿府、其後友積以田

祿五百石兵賦自給、而從赴朝鮮、寬永十二年、七月廿五日、沒法號龍岩、居全、

善在興國、子友和初稱平次郎、又字助、又右衛門、、從赴朝鮮、及班師、從樺山久高等為敵艦

人也、

弟子丸宗光中稱、播磨第二子、事 慈眼公為納殿役、而見遇今稱子丸與宏右衛門、即宗光也、

箕輪重親列傳第六十一

箕輪重親稱野、六世祖季統稱野、伊地知季隨隨第六子、而冒母氏箕輪、季統生季政稱野、季政生重村稱野、重村生重房稱野、重房生重基稱野、重基生重連稱野、重連生重親、永祿九年、重親戰沒於蒲生稱野、重親有重親有者武名、功重親有者武名、、子重長初稱野、、母町四月廿七日、

田久次守阿波、女、重長居帖佐邑、慶長二年、豐公將有事於朝鮮、於是慈眼公辭京師、八月廿五日、至肥前名護屋、是時本邦諸將戰艦盡至焉、獨公船未至、於是 公後諸將、而留名護屋、九月二日、有故遣重長使於朝鮮、廿五日、還報名護屋、十月十四日、從發名護屋、泊對州豐崎皇浦、廿五日、又遣重長使島津彰久・北鄉三久於鰐浦對州、、三年、使重長等番戌晋州砦、九月廿八日、命退新寨、十月朔日、重長攬紺緇甲、斬捕為多、十一月十八日、戰沒於海上重長子孫更稱氏復伊、地知氏、而在高岡邑、

志賀播磨列傳第六十二

志賀播磨守、豐後大友氏支族也、父曰阿波守家老、、世々為菅迫城主、當播磨之世、與志賀道益等俱通志於我、及 松齡公入豐後、以其子質於我、公乃命伊集院三河・犬童休意、入戌菅迫城、及我班軍之日、大友氏遣使於播磨曰、汝若擊殺伊集院犬童二將、而追退薩

兵、便免前罪、且賜重賞、播磨不聞、遂從二將、率妻子至薩、而賴新納忠元於大口、後命居飯野、其後賜高原江平田祿五十石、因移居焉、子喜兵衛男、命去江平移居出水邑至今子孫在、

志賀道益、大友氏支族也、父曰道輝、道益為大友義統國老、而居志賀城、天正十四年、冬、來降於我、前此高知尾使僧來告於我曰、豐後志賀道益、盜君之寵姬、見疏於君、頃日去志賀城、而左遷於邊疆、日夜怨恨、不知所懇、可以間也、至是歲二月十六日、入田宗和亦遣使者於上井覺兼曰、志賀道益者、仕於義統、有故為義統所疏、因遷居菅迫、而日夜怨懟、而與臣俱通心於薩、不但止斯人、國人皆離心、方今大眾來討、則豐州之平、可舉趾而待也、因獻豐州地圖、於是覺兼詒道益書、因始結好、至我班師於豐後、二人俱携妻子而來降於薩道益子孫今在高岡云、

志賀式部、道益弟也、及大友氏籍沒之日、與子肥後俱來降於我式部子孫今在高岡、

志岐親昌列傳第六十三

志岐親昌稱小左、其先九條師輔公之支族則隆大夫持、後三條帝之世、延久二年、庚戌、始下居肥後菊池邑、其子孫經隆繁、率兵拒蒙古軍於筑前博多、有大功、

天子賞賜錦旗於經隆、經隆生經政稱山鹿四、貞和年、經政屬足利尊氏、戰於九州、有功、其後屬菊池重朝肥後、、食邑於志岐六浦、經政生政弘出羽、、政弘生弘宗兵衛、、弘宗生弘家守出羽、、始為志岐氏、弘家生良弘稱兵衛、、良弘生光弘稱兵衛、、光弘生家弘稱兵衛、、家弘生景光稱兵衛、、景光生景弘守出羽、

衛門稱兵權左、景弘生光弘稱兵權、光弘生光景、光景生隆弘、隆弘生經弘、經

弘生知遠守稱山城、知遠生高遠守稱山城、高遠生忠遠守稱出羽、安

遠生遠治衛門、又次郎、又次郎少輔、遠治生重遠稱次郎左衛門、重遠生重弘稱次郎、又權正、重弘

生鎮經初稱次郎、又兵部大輔、天正八年一作十、鎮經始通志於我、及我討六國

之時、彼率兵來援、鎮經生親重稱初名親弘、稱兵部大、世々為肥後天艸郡志岐

城主、天正十六年一作十、加藤清正小西行長率兵攻志岐城、親重力不

敵、獻富岡城在天、而出降、則豐公便命屬之清正部下、文祿元年、從

清正如朝鮮、是時清正與之田祿四百廿石云、初親重妻島津義虎女、

生二子、長曰親益稱正、次即親昌也、親益早卒、親昌繼父後、寬永九

年、幕府改易肥後國、是時親昌以有舊於我故、始來薩、而居入

來院邑、至子某、寬陽公召而賜田祿三百石今今改薩左衛門、即今薩之子孫也、

杵木隼人列傳第六十四

杵木隼人號宗、米良氏支族、而居日州杵木、因氏焉、及日州屬我、隼

人通志於村尾重侯、而數有勤勞、因賞賜杵木一村、且命築城於杵

木、名曰搆城、而居焉、及子平右衛門之世、年頗餓、國用不足、於

是官加五斗米賦於國中、以足軍國之須、平右不能出賦、因獻杵木村

於官、而以餘祿分給家臣等、與同辛苦、慶長五年、九月、關原軍

敗、十月、公至日州細島鹽見、則有兵馬五六十人隔川馳至者、公

不知其誰何、乃遣步卒二人、而問姓名、答曰、臣是杵木平右衛門、

今而奉迎焉、公乃涉川、平右衛門從而至八代假宮、是夜、公使村

尾重侯相良新右衛門等而問焉、曰、子田祿有幾許、平右答曰、前時

獻所采之杵木村、今也則少、公曰、方今子速來迎、是可賞也、乃

賜杵木村田祿二百十六石或以其年少故、是時、公命平右遺其寶子、則遺額者十三人而獻焉、又獻其子豐前、年甫十三、命反之、平右辭曰、臣唯避讓其、請留之、於是六年二月三日、賜粟

三年、田祿六百六十石、後、十一月、伊東氏家臣稻津某聚眾而作亂、陰遣鈴木早

助者、求助於求麻城、路經杵木羅所、為平右衛門游偵所殺、子豐

前、宗子米良主水使豐前更杵木氏為米良氏至豐前平右衛門、更米良氏復杵木、而守稱木閣、而守稱木閣、而守稱木閣、而守稱木閣、

阿蘇惟永列傳第六十五

阿蘇惟永一作惟高、稱新九、姓宇治、肥後阿蘇大宮司惟前從三、之子孫、世々

知阿蘇神祠事、居矢部、而屬大友氏、天正六年、大友氏敗於耳川之

後、肥後熊本以南盡屬我、十三年、惟永麾下甲斐相模三舟城將阿蘇

兵、陷我花山城、公聞之、大怒、於是閏八月、急命諸將、大舉入

肥後隈莊中城守甲斐治部、甲佐堅志田三舟數城不戰而逃去、我兵入三舟、

是時、公使八代莊嚴寺僧諭惟永曰、雖阿蘇氏為我深寇、而我以敬阿

蘇神靈故、赦其罪、而今而後、宜與阿蘇氏相和、惟永大喜、於是十

九日、質甲斐美濃、而與使僧俱詣八代城、越廿七日、復遣阿蘇氏吏

子弟五人於八代、而質焉、九月四日、又遣村上美濃為使者至八代、

獻寶刀及馬、其所遺書不遜、則見其使者而還其書、惟永大驚、於是

八日、改書而復獻焉、美濃則請改稱、乃命賜稱丹後、時甲斐親英

稱美、遣伊集院忠棟盟書、而乞降、十六日、豐後南郡諸將五六輩亦依

惟永而降、十八日、公遣莊嚴寺僧于阿蘇山、而獻神馬、廿一日、

甲斐親英自矢部至三船、而留焉、廿二日、遣日州財部太平寺僧、諭

矢部兵子、初奈須某世々領奈須地、其後與矢部兵爭戰、阿蘇氏遂奪

其地、至是、公賜奈須黨以舊領地、於是矢部兵子等忿亂、故遣使僧

而諭解云、廿五日、遣新納縫殿・稻津新助・柏原周防、諭親英曰、

子君阿蘇氏既屬我麾下、而頃日聞大友義統來居小國境豐後後境、與、潛誑

阿蘇氏、以叛我、而未詳其真偽、又聞方今阿蘇氏幼弱、子撰其家

政、而運籌帷幄、是我所憂也、今子幸在焉、請煩子、徂留八代、親英固辭焉、縫殿等曰、子前盟曰、自今以後、永從薩之指揮、誓言猶在耳、於是縫殿及伊地知民部等率蒲生兵、送親英、及甲斐長運、野尻某於八代城、晦日、親英弟右京進出奔野尻在日豐之境、是古阿蘇氏、遣書而上于之於三冊云、十五年、三月、松齡公享惟永於野上城在豐後、前在豐、又聞中國四國兵船蔽海至府內田官兵衛、淺野彈正、既至龍王城前在豐、又聞中國四國兵船蔽海至府內之、公宜先班師於薩、而決戰於疆內、公善其議、於是謂惟永曰、君既合心於我、宜為備以助我班師、是時豐後肥前肥後諸城聞豐公至、朝野響震、皆叛我應彼、惟永乃使伯父阿蘇宮內少率兵一千餘人、而備賊、翌日惟永引軍歸矢部、乃命部下戍邊境、是時志賀道輝亦叛我、率大兵攻圍大野久高於坂梨城近水鏡、坂梨、近大夫所居、三日三夜、惟永急遣矢部・南鄉・大野・大河兵救之、當是之時、阿蘇人阿蘇去矢部二日程、久我大藏大輔・雨一郎左衛門・上之宮彈正左衛門・應叛賊、志賀左近大夫、惟永乃遣村山丹後、率兵往擊殺數十人、自此阿蘇境內無復叛者、以故我諸將自豐後收師、至肥後小國惟永所領、去、阿蘇一日程、賊兵又塞道、我兵不能退、惟永乃遣使者告小國地頭北里大藏少輔曰、阿蘇叛賊我既遣將擊殺之、雖然方今賊兵攻圍坂梨城、薩兵難急退、子將衆及老幼而為之導、於是四月十六日、大藏導我軍、到宮之地地名、舊阿、則賊又急來攻、阿蘇宮內少乃指揮衆、與我軍俱進擊殺數百人、惟永一族阿蘇阿波戰沒是時上、隈部、赤星、小、我軍遂到八代自小國至八代城、侯、極權、是日宇土賊攻殺我將宮原筑前守於隈莊、時公遣町田出羽守告惟永曰、方今我班師、軍孤危、請與我俱歸薩、惟永報曰、臣猶有精甲五六千人、與之同心而堅守三城諸本雜、何強敵之畏哉、若至勢迫事急之日、則乃來歸薩、於是公徵軍、自八代安勢知、經求麻而還大口、既而豐公

大軍入肥後、淺野長政遣使者奉朱印牒、諭惟永曰、子宜率士卒早降于麾下、則阿蘇神領永為子之有、言如有不信者、朱牒在於斯、惟永曰、昔者薩侯尊崇阿蘇神、且與臣交深、請告君言於薩、而後唯命是從、豐公聽焉、曰、彼小醜、奚足憂、乃督衆直進入薩境、於是惟永日夜固城壁、萃戰士、潛遣使諭高知尾嶮至都於郡、告我曰、城池既堅固、甲兵亦精銳、請君無以肥疆為念、國老報曰、君言有信、寇何畏焉、居頃之、家老等謁惟永曰、京軍鷹揚、侵我之疆界、拒之則不得免焉、請事之以存阿蘇氏、惟永告之曰、諸君所謀固是、雖然我盟薩侯於野上城、誓言難變、願與君等守城效死而後止、皆太息而從之、既而豐公班師至八代、使淺野氏遣使者諭告惟永曰、殿下將徂留于箱崎、君如下城散兵、則庶幾乎見原、朱牒既在君所、又何疑、惟永以為薩既成和、則我亦存家全身焉耳、乃下城、而以義子甫六歲者為質、淺野氏攜之、俱至箱崎、惟永遂無恙、十六年、惟永屬其耆老而告之曰、阿蘇家運衰落、留於此無益於事、我將之薩、請從此別、乃攜妻子、遂詣薩大口、則公賜之以田祿一千石、惟永性好和歌、曾學歌近衛信尹公所稱書、藏子孫家、初文祿甲午之歲、五月、公見放于薩、至慶長丙申之歲、七月十日、見赦、發覺府、惟永從至京師以下闕文、但有惟永自左衛門、即惟、永之子孫也、

皿良貞行列傳第六十六

皿良貞行稱善助、桓武帝、後裔、川越太郎重國重綱第三子、部、重貞、重貞之三世孫、修羅亮重貞、食邑於河州、豐良郡、因稱善助、重貞之六世孫、大輪良貞、事、大中公、公賜實力、善其戰功也、永祿二年、貞秀先貞行、天正八年、從攻矢崎城、十二年、從戰于島原、後從討大友氏陣沒、無男、弟貞資初稱二郎、又二繼立、貞資元龜、事貫明公、有勤勞、賜寶刀一口、慶長十五年、公使飯牟禮紀伊告貞資曰、汝事孤不貳、後賞汝

以秩祿、及公薨、命貞資與飯牟禮紀伊・末田主馬・俱監浴 公尸、其後貞資以 公預賜祿之事上言於 慈眼公、以 先公嘗命賜祿、而以東鄉重位為證、於是召重位而問焉、答曰、信矣、臣嘗侍坐而聽焉、乃賜之歲俸十石、以終身、寬永十五年、命貞資使上將松平信綱伊豆守・戸田氏鐵門左於肥前島原、使畢、則二將命與軍事云、長子貞勝稱、先死、次子貞增稱銀八、又、權左衛門、慶長五年生、以兄早死繼父後、事慈眼公、而能馬術云、

江田兼年列傳第百六十七

江田兼年稱守、藝、其先小野小太郎家綱、事 得佛公、為日置地頭職、家綱生家重、家重無男、以弟家長為已後、家長居日置郡大田村、因為大田氏、稱太郎、家長生家氏稱太郎、大輔、家氏為松浦早湊村及福萬地頭職、而改為江田氏、家氏生家房一作家氏、稱、式部大輔、家房去松浦、移居日州、而為肝付兼重家臣、兼重敗績於高城三戰、將自剄、家房代之戰沒、兼重嘉其忠貞、與孤金太郎以伴姓及諱字、而名兼政、兼年其十一世孫也、從赴豐後、戰沒於佐伯雲留城、子兼清一作兼重、又兼員、稱源次、又源左衛門、又安藝、為步卒將、每從軍云、初居市來邑、後 貫明公命移居宮崎・及福島、賜田祿二百石、而番戍邊疆、及豐公籍沒我日州大半、兼清去福島、來居慶府、因賜田祿八十五石、文祿三年卒法強大、翁龍、知居士、又源助、子兼吉初稱源藏、又源助、從慈眼公、如莊內、及浪華、慶安二年、七月晦日、卒、子兼定初稱源助、又、三郎右衛門、從軍島原今江田源助、兼年子孫也、

隈岡長守列傳第百六十八

隈岡長守稱茂兵、和州人也、來仕 慈眼公、從軍朝鮮新羅功、捷、又從莊內、賊魁白石永僊來挑戰、我兵望見之曰、彼可擊而殺也、不俟主將令、出營爭逐之、賊伏兵猝起、我兵大驚、是時長守策馳衝賊、強戰沒之、

按南浦文集曰、熊岳茂君熊岳、和州、和音通、隈岡、和州人也、以勇聞於諸侯、而仕我 島津氏者年尚矣、島津氏素以好武、君之勇名於是乎赫々然、（頭注）人偃其威風、望其餘光者、不可勝數矣、我聞勇有二也、所謂就死（君字衍繁）君、敢為也、卒然臨三軍而不驚、勇往直前無少畏縮者、敢為也、患難變故之際、理當死、則殺身以赴之者、就死也、二者人所不能、而君所能也、孔子曰、志士仁人有殺身以成仁、孟子曰、生與義我所欲也、二者不可得兼、舍生而取義也、己亥初夏、我 島津氏有事于國之莊內、至臙之初八、莊內使伏兵與吾軍挑戰、君見吾軍將敗、以為只與坐而見敗、不若入賊一揮以全吾軍、馳馬與賊戰者數刻、吁、時耶、命耶、終結子路之纓矣、吾軍全而歸者、君之勇也、於是君之有敢為就死者、人益信之、君平素與小野某為知己、予亦識君非一日、一日小野某招予茅齋、語君之死、未敢不流涕、予不覺濕袷袞矣、因賦小詩、以代挽詞云、
塞垣艸木武威加、豈計今令獨婦鬢野家氏曰、塞、婦人喪服、昔南宮紹之妻喪其姑、孔子誦、爾母從之爾、母居區爾、蓋棟以為第、長而寸、身後功名何所似、寒梅吐玉點無瑕、

赤崎丹後列傳第百六十九

赤崎丹後、事 松齡公、天正十三年、從赴岩屋、先登、又從軍朝鮮、及振旅之日、直從至伏見、尋攻伏見城、先登是時丹後後稱擊于竹、以為塗物、、又從軍大垣、一日石田三成至我營、公指丹後、而謂三成曰、是敵邑長

武事者也、三成曰、聞子名久之、今也幸得見、戰鬪在近、子宜以身殉國、九月十五日、味爽、東西軍漸近、侍從豐久騎馬執弓、令衆曰、寇不近、勿放鳥銃、寇相去十步許、丹後曰、可矣、衆即齊放、即兵刃相接、人馬擊、甲冑摩、丹後失豐久及公所、逃而歸國、後命徙居柁城、卒時不知年月子孫改赤崎氏為龍元、今猶居柁城云。

赤崎左近、慶長十一年、命主舟事、而獻城石於江戶、道而舟師等爭鬪狼、左近解而後息、

西藩烈士干城錄卷之三十三

西藩烈士干城錄卷之三十四

諸氏合傳第七十

伊佐岡因幡初稱大、姓藤原、伊達宮内太郎行員之後裔也、居常州伊佐岡城、因為伊佐岡氏、初因幡以習禮事幕府、慶長十五年、慈眼公始朝于江都、公左右鮮能嫺習於朝章及辭令者、於是土井大炊頭本多佐渡守言之於公、而使因幡委質於我、以掌我朝聘事、及幕府賜櫻田邸第地、表木於其四方以經營之、而地褊小、不足以置我屋宇、因幡乃潛夜出移置表木於北隅四五步許、以廣邸地云今伊佐岡聖君衛門、即因幡之裔、

岩元清左衛門、否笠勝兵衛者子也、而出為岩元筑前守養子、冒岩元氏見伊地知、河內自記、為浪華藏奉行・及普請奉行、當慈眼公之世列小番籍今岩元清左衛門、即其子、孫也云。

岩元壽才、大永六年、十二月七日、從梅岳君攻帖佐城、而擊賊魁島津善左衛門安久、斬其首、

岩下藤七兵衛、其先不知何許人、藤七初居田布施邑、永祿七年、從松齡公移居飯野城、賜秩祿五十石、後命徙居高城內莊・帖佐・柁城三邑、子與右衛門、命居麿府今岩下長左衛門、即其子孫也。

岩下主殿助、永祿十二年、五月廿五日、戰亡祁答院長野城、

蘭牟田勘解由左衛門、大口人、天正中、公選智勇士五十四人、俱議軍事、勘解由亦與焉、

蘭牟田縫殿助、蒲生人、從松齡公如朝鮮、元和五年、八月十六日、縫殿自割於柁城實窗寺川原、以殉松齡公、法號真翁宗天居士、葬蒲生永興寺、至寬永九年、慈眼公為殉死者、建石塔於伊集院妙圓寺、乃以第四塔為縫殿墳、事詳池田貞秀傳、

池上伊豆、梅岳君遣伊豆及松元三七、召山田有親、誅之於伊作、

池上但馬、大永六年、十一月、大翁公以大中公為養子、於是十八日、大中公自田布施至麿府、是時但馬守等六人折田淡治、松崎飛彈、蒲留吉左衛門、吉田龍、前川超、云衛門、從焉、

池上将監、戰沒於加世田間之瀨川諸家大概記、以池上、作池之、上、又作戰死於加世田城、子宮内左衛門、

慶長五年、與其徒三十六人、俱戰死於豐後森江子孫今居柁城云。

池上隼人、天文十七年、九月五日、從戰於姬木葛原、有功、

池上市右衛門、伊作士也、戰死於朝鮮、

入枝佐五右衛門長著^{初稱鬼、五郎}、事 松齡公為門子、後為奧番役、元和五年、八月十六日、自殺於柅城實窗寺川原、以殉 公、年二十八、法號和雲慶順居士、葬柅城大株寺、又改葬同邑吉祥寺、今伊集院妙圓寺 公廟前第八石塔是為長著墳、事見池田貞秀^{傳至寬永九年、十月四日、賜田祿五十石於長著墓云}、

入佐鄉左衛門久爲、伊集院人也、其先伊集院氏五世久氏之長庶子入佐三郎五郎景久、景久生助三郎久胤、久胤生四郎右衛門久利^{初稱木工、久利生木工之助久實初稱八、}、久實生久爲、天正四年、戰死於高原城、子助八郎久利、陣没莊內、無男、以林但馬長子為之嗣、因冒入佐氏、是日、鄉左衛門久員、慶長十九年、從如浪華^{是役也、鄉左領田祿二百、出馬五卒云}、其後航海至德島、而病卒焉^{今入佐助八、即久員之子孫也}、

稻垣對馬、事 松齡公為納殿役人^{今改云廣、數用人也}、

印東彦右衛門胤矩^{初稱孫四郎、後、割髮號正齋}、千葉氏之支族、而撰州能勢村人也、父曰千葉城之介胤正^{號正舟、浪華之後、片桐、盛稱之、入守浪華城}、胤矩為撰州能勢村代官、及關原軍起、胤矩有病而不能赴焉、因遣兵子百餘人而援我、以故 貫明公召胤矩而給事焉、子喜庵胤純^{初稱喜之助、又彦兵衛}、事 松齡公、改印東氏為能勢氏^{今能勢磨、其子孫也}、

井手大藏、永祿四年、四月、從戰廻、十年、十月、命大藏及瀆田榮臨、謀下大隅田上城、

和泉刑部左衛門、島津尚久家臣也、弘治元年、三月、從戰於帖佐星原、有功、

和泉三河、三鳥筑後者之子也、初筑後事 貫明公、及 公女嫁島津彰久、命筑後夫妻而從焉、後三河娶和泉宗兵衛久正女、生少兵衛

某、久正乃以和泉氏系譜^{道義公第二子、和泉下野守忠氏、忠氏子右衛門兵衛尉忠直、忠直弟、子總兵守忠、忠久正為、府兼濱家臣}、附與之於三河、遂以為己嗣、因冒和泉氏、及 寬陽公之世、三河長女擇入掖庭、而為局役、至寬文六年、三河子茂兵衛徙居覺府^{今和泉小右衛門其子孫也}、

和泉勝左衛門保重、島津忠長家臣也、從如朝鮮、慶長三年、十月初一日、忠長率百餘人、出迎明將茅國器、是時保重乘馬指揮奮鬪、及敵兵敗走、慈眼公親出逐北、所乘馬顛倒而纏斷、保重急來續纜、而復使 公上馬、保重遂亦得甲首而還、

壹岐勝三郎、從浪華之役^{兵額稱云、勝三郎領田祿二百、出騎一步卒六人}、

壹岐筑前、天正六年、從耳川之役^{記榮林}、

壹岐伊豫^{托城}、壹岐清右衛門、俱事 松齡公、

壹岐源左衛門幸伯、平田純正^{稱清石、子、出為壹岐加賀守幸則後領八郎為朝男為晴之養子、因冒老岐氏、後上言某氏子以為嗣此人之後也}、而已復平田氏、名純直、稱九郎左衛門、正保三年、命幸伯及新納久親、捕島津久章於川邊寶福寺、事詳久親傳、

伊丹孫兵衛師親、高師直之子孫也、其先某、領撰州伊丹郡有岡城、因為伊丹氏、師親客居泉州境、師享德庵道三、而學醫、改稱慶德庵道甫、初 松齡公以茶事與道三交、至慶長五年、公將兵赴濃州大垣、是時請道三俱行、道三稱疾不行、因伴道甫而行、後道甫仗劍至薩、則留之與田祿百二十石、其後命徙居加治木^{元和七年、田祿稱云、道甫領百六十石}、寬永二年、七月十九日、卒、法號月窗常雲庵主、墓在柅城大株寺、

井上主膳、年十九、從長壽院盛淳戰關原、軍破、被重創、匿民家、後出京師、至南都、事中西與左衛門伊賀、其後從文之和尚而歸薩、臨別與左衛門贖大小刀、俗傳主膳關原日記、

井上勘解由、寬永十七年、兵賦籍云、領田祿八百石、出兵士十七人、

入江權允、岩永可丹齋、俱天正間人、

猪福內記、石川新右衛門川朝鮮軍第九曲交番籍、有石、善新右衛門也、俱慶長間人、

石坂久武稱久武、齡岳公第六子但馬守氏忠之六世孫也、至久武為北鄉氏家臣、永祿元年、三月十九日、與子忠陳子稱五衛門、俱戰沒於肝付宮原、

池井某、知覽邑人、弘治元年、戰沒於蒲生北村、

石神重永稱重永、姓藤原、元和寬永間人、性巧而好鍛、又善作鳥銃重永所作、之子孫石神伊左衛門戊、鑄器以薩州佐藤原重、

岩崎賴清稱太郎、父曰賴貞稱文善、其先出相良氏、初相良氏給祖三郎長賴之第二子二郎五郎賴長、始為岩崎氏、賴元生備後賴長、惠永五年、賴長始來薩、而生備後賴安、賴清事梅岳君、陣沒於帖佐、子賴

孫賴親稱伊右、事貫明公、居國分今岩崎右衛門、

伊鹿倉忠兼稱繼部丞、其先伊集院氏四世忠國長庶子伊鹿會又太郎忠貞、忠貞生左近久矩、久矩、弘治二年、

八月十七日、戰沒於大寄勢箇島、子豐前忠年、為北鄉氏家臣至今子孫在、

伊作久次稱與吉郎、其先道義公弟大隅守久次、久次見守久滿、久次見守久滿、久次見守久滿、久次見守久滿、

陣沒於朝鮮久次子孫是白石、

岩切國信稱彦兵、其先不知何許人或云、清原大神信、事慈眼公、慶長十四

年、琉球之役起、三月四日、諸軍解纜赴焉、廿日、慈眼公命國信齎酒若干樽而至琉球、賜之諸軍、又賜都督樺山久高書、而使進軍云國信子孫即今岩切彦兵衛也云、

岩山直朝稱初名光勝、稱在京、又稱兵衛、父白足利三左衛門光朝、野州鳥山城主成田勝繼之家臣也、泰壽元年卒、其子新五郎重永、寬永十五年、始來事我於江都邸、賜田祿三百

石之稅、且十人賦、列小番籍、以為長留邸職、初直朝有姊、名阿佐

伊、寬陽公召為妾、生女子織及長嫁於、以故直朝遂來宦我云、直朝無

男、以弟直道稱金左、為嗣、直道剃髮號散木、貞享三年、辭留邸職、與姊阿佐伊俱下薩、賜田祿三百石、除前所賜三百石之稅今岩山金左衛門、即散木子孫也、

石原助兵衛、帖佐人、寬永二年、柁城有解魔法師陽春坊者、而犯罪

俗記、某氏母有故怨、寬陽公乃使陽春坊咒咀公、事發覺、於是命釋陽春坊而遷於野村、幽囚於重席柁裏云、

小刀長九寸五分、入其家、直前刺殺之、因從橫以刀割裂其趾趾、是下也、形

如十字、以聞焉、未知其所以云、於是公使國老三原備中賞賜之小刀信國所、及朝服此其上下、既而陽春親族欲為之報仇、以故遣助兵衛徙居

府、後為物奉行、又抵役於江都、其後告老、公殊召而為近侍此云伽樂、

石原佐渡、上國人、負鼎俎來薩、以滋味見慈眼公、公悅、命為

庖丁人、至於今世々為庖丁人今右原次郎右衛門、

花堂重次稱佐、從松齡公如朝鮮、又從關原、及歸國賜褒牒及田祿

五十石重次子孫、

島山宇右衛門、慶長間人慶長十六年、田祿籍云、

春山越中、事大中公公始即位也、行犬追物儀於加世田、此時命越中及後渡源次、以、慶長十六年、田祿籍云、

春山太郎三郎、弘治元年、正月、蒲生賊破我兵於北村、是時太郎三郎奮戰死之、

原藏人、元和五年、八月廿三日、自刃於福昌寺、而殉 法豐有庭 松齡公 遺體存居

原田長治 刀稱帶、天正十五年、從桂忠詮守平佐城、羽柴氏兵來攻之、長治自城上執弓射副將九鬼八郎 部將小出大、則墮馬而死、長治名譽聞於敵軍 長治死時不知年月、墳墓在隈之城、東手、村原田原數、刻寶曆五年建立之七字

吐田十郎二郎、弘治元年、三月、從戰於帖佐岩野原、有功、

春田佐渡者、蕨野伊豫弟也、慶長十六年、二月廿日、殉死於貫明公、法號寶山常珍居士 今福昌寺前第七石塔是佐渡、墳墓也、佐渡子孫今在末吉

春田朱左衛門、國分人、性剛愎、嘗學劍術於東鄉重位、而以步卒士 詳從軍數有功、莊內之役、賊四五百人出城逆戰、朱左衛門望見之、乃拔長刀 三尺三寸、獨突入賊中、我兵以為死賊、少焉揮血刀、提賊首而還、衆壯其為人、初朱左悅少年宮內辨助姿色、數以私情挑之、以辨助與伊地知慶右相友善故不應、朱左大怨焉、一日往闕其戶、辨助與慶右枕闕而同臥、朱左視之大怒、直入刺殺辨助、且創慶右、慶右急起奪其刀、朱左遁去、還家遂自殺、宇都八兵衛者相之云、

端山才八、以 松齡公從卒從關原之役、及軍敗、從而帰國、

波田彦太郎 一作彦太、從如挑戰之役、後戰亡於關原之役、

羽島友明 稱若狹、其先國分友重第二子豊後久成、始為羽島氏、久成生豊前宗次、從大田公討伊東氏、有、功、實賜加江田及日祥地、宗友生次郎五郎友知、友知生伊豆友綱、友綱生若狹友繁、友繁生友明、 從討肝付賊、陣亡於平房八幡、子友重 稱右衛門、孫友秀 稱善吉、陣沒於朝鮮海上、

曾孫友昌 稱藏人、今羽島助之、遺體即友昌子孫也、

林田戸右衛門、新納旅菴家臣也、初旅菴居肥後莊嚴寺、後與小僧三人俱還俗、戸右其一人也、及關原之敗、戸右從旅菴與本田助之丞等潛匿城州鞍馬山寺、是時山口直友等率兵來搜山中、偵騎至寺門、於是旅菴及助之丞、俱登樓將自殺、旅菴命戸右下覓取一器水、下則觀山口直友堅立庭上、而指揮衆、戸右乃急復走上、告曰、捕君人乃駿河守君、旅菴本與直友相善、急下樓拜伏庭上、直友審問我與姦凶之狀、因捕至京師而釋之、語在旅菴事中、

吐師種所 一作種次、稱、 高橋元種 州縣城主、日之家老種所其先岩田大納言增之支葉也、祖曰民部、慶長四年、伊集院忠真叛、元種遣種所將兵數百人、來援我軍、有功、 慈眼公因褒美之、十八年、冬、元種父子有罪、流於奧州、是時第二子延種 吉備長、年甫七、於是種所等攜來、而倚比志島國貞、遂俱仕我、則賜種所田祿二百石、以為士列 今吐師左衛門、即種所子孫也、

花田行榮 稱備、高橋元種之家老、食祿千石、及元種被罪、幕府命稻葉彦六、往掌受城事、彦六以祿千石招行榮、不聽、而遂與吐師種所、俱來仕我、賜田祿二百石、以為府士 今花田元龜、即行榮裔也、腹部弓兵衛 慶長十六年、田縣稱、免七十餘石、

蜂須賀肥前、伊作士、事 大中公、

萩原與右衛門 元和間、田縣稱云、與右免祿七十餘石、

萩原則兼 稱稱樂助、其先三河判官代兼遠、有謀諺於、存子孫、則兼任者、始為萩原氏云、從擊大友氏、又從肥豐之役、長子南右衛門、戰沒於莊内、次子兼利 初稱伊九郎、又慶長衛門、嗣父後、事 慈眼公 今萩原兼

利子孫、也、

西股清房稱出、父曰盛家稱武、天文廿三年、盛家薰蒲生氏、自殺於岩劍、是時清房猶幼、其母抱之奔放於菱刈、及長、公召而為府下士、及平田增宗被誅、命為清色地頭職、子清昌稱左衛門、今西股彦左、即清昌子孫也、

西股七郎左衛門、天正間、以步卒將、從上井覺兼、居宮崎、十三年、屬木脇祐昌、守肥後花山城、七月、城陷、與祐昌俱亡陣、

西牟田隱岐、公子歲久家臣、文祿元年、七月、從歲久、自覺府乘舟至脇元、會道有伏兵、乃回舟至白濱、時有兵數十人躡來、隱岐問曰、來者為誰、曰、我是帖佐土柁原源太兵衛、隱岐即執鳥銃射殺之、遂從死於瀧水、法號淨菴水文中座、墳墓在心岳寺、

西村越前、種子島久時家臣、天正十四年、從赴豐後、久時病瘡瘡於途、公命越前代督其兵、翌年三月、屬公子歲久班師、路遇賊兵、數擊破之、

西忠弘稱左衛門、伊作久義弟西親久遊江守之子孫也、事梅岳君為庖丁役、後命忠弘改西田氏云今子孫在加世田、

西和泉、本為西田氏、其弟乃大乘院六世權僧正賴真、賴真請梅岳君之支族西喜左衛門系譜、授之和泉、因改為西氏云、子主馬、天正十年、十二月、命與宮原越中、俱往謀肥後三舟隈莊邊境覺田日記、書、高田主馬、有子曰八兵衛今西八太郎、即、八兵衛子孫也、

西原長助、天正十二年、三月、從戰於島原、有功、

新原藤左衛門、殉死於貫明公、年六十九法號曰屋常盤居士、今福昌寺廟、前第十四石塔是藤左墳墓也、

新保小鷹、弘治中、從蒲生之役、

二之宮四郎九郎、天文七年、十二月廿九日、陣沒於加世田、法亢大炊左衛門、居柁城、關原役後、松齡公命與白坂大學坊、往探知上國變、而後、慈眼公朝京師云、

細山田主馬、莊內人天正中見于、榮鑑記、

別府甚五左衛門、戰沒於木寄原、

別府助右衛門、事松齡公於帖佐城、其後命移居柁城、至慈眼公之世為納殿役、

別府掃部兵衛、天正十五年、援桂忠詮成平佐城、

別府舍人、事慈眼公為納殿役、

別府忠房初稱久三郎、又稱昭三郎、父曰忠與稱隱岐之十六世孫也、忠房從梅岳君討日置伊集院賊、有功、後陣亡於岩劍城今別府十郎兵衛、

戶次義貞稱半兵衛、號半策、其先父友能直安、稱伊、父曰純貞、稱、世々屬大友氏、戊津牟禮城在豐、豐後人、曾祖曰親續初稱六郎、又稱丹後、祖曰親久稱伊、父曰純貞、稱、世々屬大友氏、戊津牟禮城在豐、天正十四年、純貞降我、至義貞始來事我次半兵衛云、

邊牟木國時稱助四郎、其先父一郎榮慶者、比志勝氏始祖上總法橋榮經第五子也、始為邊牟木氏、榮慶生又五郎義行、別稱國生國時、家、陣沒於川内、子國信亦稱助、、天文七年、從梅岳君陣沒于加

世田之役、子國次初亦稱助四郎、又聞付左衛門、為人膂力絕人、命為普請奉行、天正十五年、戰死於目白坂、子國家初亦稱助四郎、又稱右衛門、從于朝鮮之役、子國明初稱平右衛門、請宗室比志島義員、更邊牟木氏為川田氏、今其子孫在川田邑云、

德永與市左衛門、為柁城肝付氏步卒將、弘治元年、三月八日、戰沒於山田佐佐、

德永助右衛門、從 慈眼公如朝鮮之役、慶長三年、九月、故館砦破、勝目兵右戰沒、其翌日遣助右及衆、往収尸而葬、骸皆無首、不知孰其為兵右、助右本與兵右相友善、而兵右平日好鐵工、助右知大指有鏽錫癩、試而得之、因收埋之云、十月朔、助右被紺緞甲、大戰於新寨下、有功、

德永對馬、事 貫明公、為國分代官今德永對馬左衛門、即對馬後也、

時任內藏、事 松齡公、居帖佐及柁城、而從如朝鮮・及關原之役、

富永式部左衛門、陣沒於木崎原、

友野甲斐、元龜中、從下大隅之役、我伏兵舟中、而擊破賊、是時甲斐多斬首、時伊集院源助亦斬一人、則請甲斐證之云、其後率兵二人、從琉球之役、

友野次郎右衛門、率兵九人、從擊琉球、其後為小根占・及山本・田代・佐多・邊塚・五邑代官、而居小根占云、

唐仁原藤七兵衛、宮崎士、從戰於島原、被創、又從先登於岩屋城、被重創、遂戰沒、

鳥井惟貞稱與人、事 松齡公、為近侍小姓、從如朝鮮、又從陣亡於關原一作陣亡於、朝鮮海面上、

德持舍人、曾於郡人、永祿之間、從討肝付氏、敷根之戰、我兵大藏

者中銃丸、賊兵將斬之、舍人奮戰救大藏而還、天正四年、從攻高原城、城降、以舍人及本田因幡質於敵營、其後 公選謀臣若干人、舍人亦與焉、從如朝鮮、

鳥原宗安稱善、坊津人、朝鮮班師之日、我以明質子茅渭瀆獻之浪華城、慶長四年、五大老命我復歸之於明國、於是官命宗安乘明船二艘而遣歸、八月下浣、發山川港、至福州梅花津、而漸于陸、遂送至北京、是時明人贖宗安紅白糸反絹數十匹、既反、而盡獻之官府云、

調所武金稱佐、能書、慶長十三年、六月、從 慈眼公詣心岳寺、公屬連歌、命武金書之云、

知覽四郎左衛門、天文七年、臘月晦、戰死於加世田城、

岡本重武稱主計、其先入來院氏三世公重第三子次郎三郎祐重、始為曾司氏、後改岡本氏、祐重生河內重親、重親陣亡於蒲生、重親生河內重弘、重弘生河內重通、重通生陸岐重隆、號宗照、重隆生右衛門口通、口通生太郎三郎口重、口重陣於吉田、事 貫明公知久志假宮事云岡本字右衛門即其子孫也、

岡本讚岐、清水人、年七十七、殉死於 貫明公、法號進步要精居士今蒲昌寺前第十二塔是讚岐之墓也、子孫為農、今在清水云、

大村與左衛門初稱牛之助、父亦稱與左衛門、或云、與左、為 慈眼公近侍、從軍朝鮮及從班師

大村市兵衛、命居蒲生、又命移平松及柁城、

大井石見作石見、有部院氏家臣大井美、永祿之間、為帖佐地頭職川邊、

大井五兵衛、從軍莊內、一日我軍出擊破都城村落、是時五兵衛及池

田貞安等為導云、

大井七左衛門、清武人、天正間、選參謀、七左與焉、関原敗、護君夫人出浪華城、從而歸國、

大炊掃部兵衛、慶長間人、

尾上信道初稱主馬、平左衛門、又、其先伊集院氏支族、父曰久信稱佐、居麁府、事大

翁公云、信道天文廿三年、生、天正八年、從攻矢崎城、子信貞稱仁左、衛門、天正八年生、從軍莊內有功、賞田祿若干石、其後如琉球、元和七年、信貞等往賜顯娃主水死於七島、後信貞徙居向島、而失火盡

燒系譜及家財今尾上甚五左衛門、即信貞之子孫也、

奥山藤五郎、京師人、父曰左近將監覺書日記、天正中、左近、得監來仕我、後再考、嘗與貫明公相

識、関原敗、我兵多往匿其家、時幕府傳檄曰、如有匿敗亡者共

同罪、左近乃設計、而盡歸之國、松齡公乃賜左近書曰、子如至薩、孤必厚賞子、報曰、臣老矣、請宦子藤五郎、聽之、藤五郎至薩、性善擊鼓、因賜田祿百石慶長十六年、田祿稱云、食百一石、奥山藤五郎、又增賜俸米十二石、而

居麁府、後更亦稱左近、其後慈眼公賜田祿五十石、元和中、益賜田祿五十石、別賜俸米十七石、續又益賜若干石、合前俸三十石云今奥山即左近之子孫也、

奥治部左衛門、從軍耳川、

奥關助號安、為慈眼公從卒、從朝京師、直從如朝鮮、新寨之戰、關

助執公十文字槍、從公、後及衆開壁擊敵、関助進刺殺十三人、城上有喚者曰、関助々々、汝槍撓矣、即以鞋踐而直之、顧之乃

松齡公也、又刺殺一人、時年二十、其後比萬治二年、関助年八十二、

氣力猶健、史館命上朝鮮戰鬪日記、傳世、

奥彦助、殉死公子歲久、法號大方圓器禪定門、

折田常將稱八郎右、衛門、祖曰安清、父曰備後號清綱、清綱本氏吉田、稱彦三、後即為安清養子、因冒折田氏云、事慈眼公

為典書記、子常治初稱勳解由、八郎右衛門、又、亦事公、繼為典書記、後轉物奉行、祇役於江都、

折田和泉、元和五年、自殺於吉祥寺川原、而殉松齡公八月廿、葬吉

田津友寺法號月密玄照居士、今妙顯寺、公嗣前弟、五右衛門、是和泉墳墓也、子孫今存柁城、

大馬場壹岐、本氏四木、為鎌倉大庭氏之支族、對馬為大馬場氏、贅婿、因冒大馬場氏、遂為之嗣對馬國人、其兄出家伴山者、為薩妙谷寺、對馬軍上國風、來稱伴山而事我云、從戰於高岡、有功、子

景房初稱市兵衛、從軍有功勞、景房長子景明稱古右衛門、、島原賊起之日、命掌兵糧即景明子孫也、次子景經稱源兵、、亦戰島原今大馬場庄太左衛門、即景經子孫也、

岡村治右衛門、從討島原賊、有功、

尾辻佐左衛門、島津尚久卒之時、梅岳君哀悼不已、而屬倭歌、其亂曰、志傳能耶麻治遠・比禿利由俱羅武、左右皆墮淚、佐左衛門則

請君賜酒盃、飲畢、乃投於石角傷腹而殉死焉、法號心烈道春上座、墳墓在尚久側、

小野江某、弘治元年、正月、陣沒於蒲生北村、

上野正右衛門、為野州老人宋詳誰與力、

大窪源太兵衛、弘治中、從軍蒲生天正初、我雖謀臣時、有高山人、大窪源太左衛門者、蓋是人也、

大窪備前忠清、慶長中、松齡公以為納殿役、十九年、九月、先是

官遣曾木五兵衛抵役於江都、至是有病、故遣忠清往代焉、

大窪仲左衛門、命從 慈眼公妹君嫁伊集院忠真、及忠真叛之日、妹君在志和地城中、公屢命大婦、不聽、欲自殺、是時仲左獨幹其事、得遂俱全難、

渡邊綱初稱作右衛門、又安房人也、事 慈眼公、從如朝鮮是時與大島忠素、同舟而赴云、寬永十五年、三月

十日、殉死 公、年七十餘、總髮盡白、以長手巾結腹、伸其皺而自

屠今福智寺公廟前左第八石塔、是也、法號參政安居士、子作左衛門渡邊作內衛門、號一用、今、

若松市兵衛、從如關原、賜褒牒及田祿三十石子孫今在、

脇元清元稱豐前、其先備生種清弟伊勢守守平、倉色於脇元、始氏焉、而戰死於東、戰沒於八代清元子孫今

焉、後出為本田忠親義子、冒本田氏、名親貞、語在本田氏事中、

脇元城之介、島津歲久家臣、天正十四年、從歲久子忠鄰入豐後、七

月、戰死鷹取城、語在忠鄰事中、

神田藤兵衛、本田親商家臣、從如朝鮮及關原、慶長十年、四月、親

商卒、初藤兵衛約殉死、至是將自殺、松齡公聞焉、召而堅止、不

聽、乃賜酒及所服衣、而訣焉、遂自殺、法號無陰道閑、墓在本誓寺

城親商墓側、

上田舍人、笑隈人、弘治元年、三月、戰死於帖佐、

上田內藏、山田有信家臣、從行關原之役、有功、

上田常隆初稱才之丞、又、稅所氏小宗也、居隅州、屬島津以久如莊內、有

功、後從以久移居佐土原、與田祿二百五十石至常隆之曾孫左衛門常尚、猶居佐土原、而後有故與祖父龍常常房、俱去居會同、其後移居會同、其子孫也云、

川畑甲斐、天正十年、往救筑後田尻氏、後入豐後、十五年、我徹軍至肥後、賊據谷山城而塞路、甲斐力戰死之、

川畑篤謩稱稱彌左、父曰篤倍稱主、母上井氏、長兄曰篤泰稱兵部左衛門、子孫在會同、次兄

曰篤能稱七、篤謩與篤能、俱屬公子家口、居佐土原城、及家口卒、

篤能去居出水、篤謩則自到以殉焉、

上村茂兵衛、江戶人一作三、初稱神谷山三郎、父曰榊原五郎右衛門、

嘗領三州半田、當 東照廟討三州之時、五郎右衛門失半田、浪客

於佗邦、其後為水野日向守家臣、居三州福山、而生二男、長曰榊原

吉右衛門一作榊原、為麾下近藤登之助部下與力、次曰山三郎、流落

於江都、冒母氏神谷、後以伊勢貞昌紹介來仕我、寬永十四年、十一

月、始謁 寬陽公、則命為近侍小姓、而為上村平右衛門父曰主馬、其先之

義子、冒上村氏、稱茂兵衛、十五年、公發江都邸、而赴島原、命

茂兵衛留邸、茂兵衛不受命、潛出邸、而追及駕於浪華、公壯其

志、置不問、後累進馬廻吟味役、兼恒吉地頭職初上村兵有田祿二百五十石、至茂兵衛增

也、

海江田綱富稱主、父曰清綱紀內稱主第三子清原大神、信稱之廿八世子孫也、天正中、綱富為步卒將、與

松浦筑前俱從山田有信、而居高城、後戰沒於耳川、子綱弘稱十兵、率

兵士五人、從諸將征琉球即今海江田半六、

柏木源藤後更本木氏為、川上忠兄僕也、及關原軍敗、井伊直政騎驪馬、被

白緞甲、胄前以銀杏為立物、右手挾盾尖刀、左手執纜繩、將輕騎一

隊

百餘人逐窘我、大呼曰、衆何遲緩也、急擊 兵口、勿失、時源藤伏
叢中、執鳥銃十錢鎗、伺直政過、而引放、丸中其胸一作中其股、松齡公自記、作川
政直、墮馬、源藤乃大呼曰、川上四郎兵衛射之、從兵大噪、護直政而
退去、源藤歸國之後、居柁城坊、而貧窶甚、遂為坊人、無子家絕川上
四郎兵衛家臣稱源藤之子孫者、是非其子孫也云、明和六年、或建源、
藤墓於松原山、法號武山丈心居士、是則福昌寺塚山和尚所語也云。

川崎七兵衛、事 慈眼公於柁城、寬永十五年、公病重、七兵衛奔
走四國神祠、而禱焉、未反、二月、公薨、於是七兵衛直登高野
山、結廬于 公招魂墓側、且夕拜跪悲號、越三月廿一日、贈長子左
衛門書曰、今我為僧、以永吊 公菩提、遂不歸、於是子孫以三月廿
一日為七兵衛忌日、建墳墓於大株寺、法號松岩榮樹居士今子孫在、
柁城、

川崎玄蕃、弘治之初年、與濱田榮臨等入諜蒲生城、斬戍兵二人、

川崎丹後、居覺府、以騎馬從如朝鮮、其後去覺府居伊集院云丹後子孫今
川崎仲右衛門
云也、

川崎大膳亮、高山人、戰亡於岩屋城、

加世田家長稱新兵衛、父曰昌家、稱安房助、號元家、別府、
五郎忠明之子加世田太郎忠實之十七孫也云、、從如朝鮮、及班師、衝敵艦而

陣沒、年二十六、法號梅巖清香居士、

柿木原後藤左衛門、弘治三年、四月、戰沒於蒲生吉峯、年二十六、

墳墓在本城重富村或云、後藤墳墓在本城、按記、蓋後藤列氏墳墓、
而人不知之、以為柿木原氏墳墓、俟再考、

柁原新兵衛、天文二十三年、以 貫明公旗役謀末、從如岩劍、

柁原藤七兵衛、永祿二年、梅岳君命屬島津忠將、往救飢肥城、十

二月廿三日、遂陣沒、

柁原景孝初稱孫次郎、又主次、初次孫子主計幸純第六子勘解由景信、景信生左衛門景茂、景茂生右衛門景、
氏、景氏食邑於吉野、景氏生景家、景家生左衛門景安、景孝其子也云、今柁原仁左衛門其子孫也、

川添圖書、戰死於木崎原、

川保藤七兵衛、諜田上城在千大、
磯、有功、

川保二兵衛、大口人、先登於伏見城、有功、

川村七郎左衛門、事 梅岳君、為泊地頭職、

加治木治部左衛門、上井覺兼部下、從戰肥後日比良、被創、又從與

中村內藏、俱戰堅志田、又從攻岩屋城、有功、

加治木雅樂介、上井覺兼部下、從攻破甲佐砦、斬敵二人、又從攻岩

屋城、有功、

川元與人、為 松齡公從卒、關原之敗、從而歸國、

川口彌七左衛門、從 公女質京師、居七年、病卒於伏見、子新右衛

門、祗役大坂、關原敗後、從 君夫人出城、事急、君夫人遺却系

譜及古今書籍於城中、命新右衛門往而取之稱川口新右衛門云、
以下關文、今子孫賢、

門松新彌左衛門、伊作人、天文二年、三月、新彌聞栗波田孫六南郷城
主、

出獵、城中空虛、則白之於 梅岳君、急發兵攻陷之、

金丸主馬允、宮崎士、從上井覺兼、戰堅志田甲佐、有功、

神戶佐平次、從 慈眼公赴朝鮮、船至對馬、則遣佐平次往使池田紀

伊介、而求旅舍、須臾之間還報、從 公登岸、遂至朝鮮、

狩野良信初稱利兵衛、
又伊豆大藏、近江人、父曰村瀬俊賴稱二右、
善、良信善畫、貫明公徵

之上國、而居薨府、命畫 禁城宮殿・及薨城圖、其後至京師、慈眼公命更村瀨氏為狩野氏、稱榮甫、至榮甫孫榮祥、猶在京師、元祿八年、命下薩今村權幸右衛門、即榮甫子孫也。

加藤大學、福島人、武名聞於藩、戰沒於岩屋城、

鹿屋兼長初稱三左衛門、又壹岐。、從攻筑紫城、斬城將廣門、後又從 松齡公行朝鮮、

鹿屋彦右衛門、從如朝鮮、文祿三年、六月、朝鮮人襲毛利壹岐守營、是時 公遣兵救之、至喜奴波伊川、則水大溢、不果行、乃遣彦右衛門、獨涉往報之毛利氏云、

神崎大藏、長濱士、弘治元年、三月、戰沒於帖佐山田、

河上年家稱次郎左衛門、號春住。、其先市來氏支族、父某、母川上信濃女、年家戰亡於祁答院長野、賞其功、賜孤孫次郎田祿若干石云、孫次郎長育於川上信濃家、名包家稱次郎左衛門。、慶長五年、命徙居高岡在高山。

吉井佐渡稱源七兵衛、又作源、號墓下。、事 貫明公、有武名、公嘗稱我有佐渡及濱田榮臨、譬猶有車兩輪、弘治中、潛入蒲生新城、放火、永祿十一年、正月、松齡公與賊戰於堂崎、不利、是時佐渡負 公竊渡川、而退、遂俱免危急、慶長十五年、殉死於 貫明公、年七十九、法號天庵道雲上座、今福昌寺 公廟前第七石塔是也、佐渡終身斬敵凡三百五十餘人、其二百餘人則親斬首、而獻之 公云、

吉富忠清稱與四郎、號與四郎。、其先顯娃忠長之第六子忠直稱薩摩六郎、為薩摩郡女司、忠直生薩摩太郎忠清乃忠直八世孫、不知所、以其為吉富氏之由云。、天文七年、忠清戰死於加世田、子忠基初稱平次郎、又稱前。、永祿七年、從 松齡公移居飯野城今飯野有地名吉富、是忠基所居云。、子忠心初稱次郎、又次郎、右衛門、號玄輝。、轉居帖

佐及柅城、子正信初稱二郎、號右衛門。、從如朝鮮及關原、子忠榮初稱助之丞、又為左衛門其也、子孫。

四本八兵衛者、四本半九郎之義子也、敗沒於關原、賞賜其孤田祿四十石、而合前所食凡二百石云今四本六左衛門、即八兵衛子孫也。

四本主稅介、天正十年關、

四本忠綱稱藏、、伊集院士、從地頭三原重庸如島原、當攻城之日、忠綱導重庸而先登云、延寶三年、四月廿九日、卒、法號悟室了省居士、墳墓在綾邑綾光寺忠綱去伊集院居、綾藏、依再考。

武石見、其先禰寢氏之支族、石見自根占邑移居薨府武邨、因氏焉、及伊地知賊徒來侵前濱時、石見拒之、遂戰沒、子五郎右衛門、元龜二年、有伊地知賊徒田上二之介者、好彎強弓、將兵來圍五郎邸宅、射五郎而矢穿其右袂、着其所倚柱、既而視其鏃、莖鏃田上二之介五字今藏之五郎子孫與八兵衛家云、其輪氏記曰、田上介在衛門第二之介、好、字、某年將兵來侵薨府、遂圍武與七兵衛家、所射矢其鏃大如鑿云。、子重宗稱宮內、、元和五年、

松齡公女孫婦菜名疾、命重宗而從焉、其後為八重山島在琉球。警衛、寬永十五年、與諸將俱往討島原賊、

武延為稱彦左、、向島人、殉死 貫明公、年四十八、法號月浦春花居士今福昌寺、公廟前、第八石塔是也。

竹下賴房稱備、、事 松齡公於飯野城今竹下市右衛門、即賴房子孫也。

竹下又左衛門右、一作、、從木崎原、及戰有敵一人、冑前設日輪立物立物說在、、揮三尺餘大刀、直衝我陣、大呼曰、身是長峯彌四郎、誰共決別記說在、、雌雄、傍若無人、公謂左右曰、彼凶暴可惡、擊之勿失、言未訖、

又左及瀬戸口重勝急馳力戰、遂斬殺之、横川之役、公率又左等俱登女牆、時有敵擡黑縞甲者、急來拔刀擊 公胄、又左乃以腕蔽之、以故 公得無恙、

竹下外記、枪城人蓋野村氏、天文二十三年、九月十三日、戰亡於西別府、

竹下助八郎、殉島津歲久、法號隆春玄與禪定門、

竹之下源太左衛門、阿多土、父曰出雲、梅岳君征加世田、命源太為間瀬川先導、有功、賜褒牒及田祿若干石、

竹之下舍人、公子歲久家臣、及歲久危急於瀧水、舍人單走至祇答院、告之歲久家族野史氏曰、養生之不足取也、

竹崎忠清稱又次、即經稱、父曰忠經經稱、大島氏支族也、忠經大島氏二世、忠經之次子、天文廿三年、十月、忠清戰沒於岩劍、年十八、法號春嶽常椿居士、

竹崎越中、文祿三年、三州起丈量、是時官命為吏、有功、豐公賞賜朱印牒云至自享二年、命取所賜朱印牒、讀之吏局云、今竹崎孝衛門、即越中子孫也云、按竹崎越中、天正間人、子孫今為羅山氏家臣、或云、是同姓右而異人、俟再考、

田畑木工兵衛、朝鮮新寨之戰、有功勞云、

田代清實稱新兵、衛、事 大中公軍蒲生、後移居蒲生、至清實之四世孫清信稱治部左衛、門、號安祿、為島津筑後家臣、良醫、寬陽公舉以為府下士、

高山備後、匠人也、殉死 慈眼公、法號無二宗有上座備後填蓋福昌寺前第五石塔是也、又松原山有備後墓、

谷山紀伊介者、谷山郡司兵衛忠光時人稱得佛公、之後也、豐公入薩之日、紀伊介其子與刑部後稱次郎、右衛門、援桂忠助入守平佐城、及豐公先鋒小西行長等七

千餘人進攻城、城兵出柵戰、久木崎民部者被創、敵兵佐々木小助急擊之、紀伊介大呼以槍春殺小助、刑部亦被創、既而有 公命與忠助等皆出降云覺兼日記云、天正十三年、我軍擊隈坂、時有宮崎士谷山刑部者、不知何人而同姓者、既、又按福昌寺、谷山次郎右衛門、戰死於關原、亦未知為刑部否也、今谷山次郎右衛門、即紀伊介子孫也、

谷山伊右衛門、以 松齡公道具衆、從行朝鮮及關原、

谷山仲左衛門、宮崎士、岩屋之役、執弓多射敵、身亦被數創、

谷山宮內左衛門、從赴朝鮮新寨下之據、貫紺縞、尚猿皮羽織云、、屬樺山久高、苦戰於南海、其後殉死 慈眼公、法號傑翁宗英居士宮內清盛今福昌寺、廟前第四石塔是也、

谷山孫右衛門、為 慈眼公納殿役子孫今猶稱、孫右衛門、

谷山忠純稱佐、護、子忠相稱平左、衛門、、孫忠森稱九兵、衛、、相繼為代官職今谷山角太夫、衛、

谷山筑前、帖佐士、從 貫明公、始朝京師、

谷山藤左衛門、天文七年、十二月廿九日、戰死於加世田城、

田代清秀稱助六、又刑部少輔、其先曰實盛、不知為何氏、實盛曾孫伊豫功時盛、時盛次子二郎實盛、始為田代氏、兼盛之六世門清千、事 大翁公、戰死於帖佐、清千生新左衛門文清、文清、清宣事、大中公、清宣生助六清辰、清辰生清秀、、天正十二年、從 松齡公軍佐敷及三舟、而與平田豐前俱奉使於慶府、十四年、從軍八代、後從 貫明公朝京師、

田島重行初稱早助、仲兵衛、、又、五世祖田島新兵衛、即伊地知久頭之第二子也云、重行年十八、從 一唯世子行朝鮮、其後重行居踊邑、至孫重信

健軍為右衛門、其先曰健宮武藏號玉、、為右衛門寄客於肥後、松齡公召居柵城、數奉使於佗邦、後從行關原、賜褒牒及田祿若干石、其後

衛新兵、寬陽公命移居覺府今田島木工右衛門、即重信子孫也、

卒、墳墓在柁城吉祥寺為子孫改號軍氏、為武吉氏云。

染川源允、殉死於 貫明公、時年四十法號淨岳曇堯上座、即福智寺、靈廟第九地蔵石塔是也。

染川延行稱帶刀左衛門、其先 道忍公之世、以鍛頭領自上國始下薩、延行性

善鍛、天正間、多作刀槍、島原之役、川上忠堅刺敵將隆信、其槍延行所作也云今染川右衛門、即延行裔也。

染川安次稱木工左衛門、慶長、寬永間人、居於鹿子城。、染川正安稱才之丞、其輩以波平安、

次四字、正安以、藤原正安四字。

恒吉金藤兵衛者、伊作家道忍公第二子大隅守久長、始、封伊作邑、世謂之伊作家。之支族恒吉氏正宗也、

永祿七年、從 松齡公徙居飯野城、天正間、見擢謀臣、子清兵衛、事

松齡公於柁城元和間、清兵衛食祿八十、除石云、子孫今在柁城。

恒吉次兵衛、從島津侍從戰沒於關原、招魂墓在日州佐土原天昌寺法號定門。

宗實禪、

辻大藏左衛門、永祿十年、冬、從先登馬越城、十一年、正月、陣沒於堂崎、

黑葛原忠次稱人、、伊集院忠昭次子、出嗣黑葛原讚岐後、冒黑葛原氏、

年二十一、陣沒於關原、

月野大膳、關原之敗、從而歸國、賜褒牒及田祿若干石、

土橋城之介、其先伊集院口國第十四子忠光稱大、、始為土橋氏、忠光生

久純稱帶左衛門、、久純生忠稠次、、忠稠生忠信、忠信生城之介、天正十一

年、十月十三日、命城之介出肥後八代城、使筑後田尻氏、十五年、

正月二日、戰亡於豐後臼杵郡、

津留多一作鶴田、非也。、津留多主稅、屬金吾公子據瀧水、與有馬右衛門相搏而被殺法號珠泉等、靈廟在加世田常濟院。

圖師與八左衛門或云、淡谷上總公嗣子也、又云、公時、及淡谷兵衛、淡谷、圖師式部、圖師讚岐、圖師佐渡、六人皆兄弟也。、陣沒於求麻、子公倫

稱舍、更圖師氏為洪江氏、事 貫明 松齡二公、子公長稱善兵、、復為圖師氏、亦事 貫明公、居國分、朝鮮及莊內之役、從軍有功今淡江孫四郎、即公長之子孫、

圖師太郎兵衛定清、島津忠長家臣、從入朝鮮、

津曲兼口稱伯、、肝付氏四世兼真第四子助兼始為津氏、之子孫、天正中、事

貫明公為膳宰兼口之玄孫長真、更津曲氏為肝付氏、其子志摩丞兼治、復津、今肝付清右衛門、即其子孫、未知何世復為肝付氏云。、

中條政義稱次郎右、、永祿十一年、十二月十九日、殉死 梅岳君先是命國禁殉、而君恩、上言堅請不止、君感其志、遂許之、法號金泉道樂、墳墓在加世田常濟院、君廟側、蓋同日葬之云。

中原藤左衛門、事 松齡公於柁城、為騎馬役即中原伊兵衛、、

長倉兵部、從死金吾公子、法號桂庵守久居士、臨終吟古歌曰、都比

爾由俱・密知禿波加念天・幾々志加土、幾能不計不禿波・於毛波坐

利志遠、亂曰、如或有心者、則視諸今日或云、本門四郎左衛門、臨終吟此歌、亦不害。

成合城之介、亦從死金吾公子、及公子辭覺府而歸宮之城、舟至脇

元、而聞帖佐蒲生吉田諸所有伏兵、於是遣城之介登片岡嶽而候之、

則馳還而告曰、自覺府至吉田、人馬接續、公子聽焉曰、公罪吾而

誅之路、吾固今日自殺、以明其無罪、汝等速去避難、從士皆斷髮而

盟曰、豈棄君而偷生哉、於是二十八人廻舟至瀧水、遂戰死城之介法號一峯、心靜

寺前藤樹下、有城之介格、
骨云、子孫今在日蓮邑、

中西秀長、父曰彌兵衛稱樂、 祖曰宗林稱樂、 世々事近衛公、秀長年甫

十二、以其幼善散樂故、関白秀次召而為給事、封之江州小幡村、因

氏焉、及秀次亡、遂之京師、自販繪自給、而店戶設帳、書虎屋二

字、因世人謂之虎屋店、及金春八郎大夫發達、傳授謡曲舞蹈於浪華少

進法師之時本願寺、使秀長以散樂書與之法師云、慶長初、伊勢貞昌抵

役京師、見秀長如舊相識、七年、慈眼公朝京師、而聞秀長為能大

夫善散樂者、俗、則必多相知上國人、若徵之、則宜為國家用、故特召而下

薩、賜之田祿三百石、及邸宅一區於府下新橋側、因名其街曰虎屋此云虎屋、

於 禁庭、元和六年、官命益賜六百石、而改小幡氏為中西氏、慈

眼公任中納言之日、遣秀長使近衛公、及 幕府枉駕江都櫻田邸、

命秀長奏散樂、其後 慈眼公受秀長散樂云、慶安三年、八月十一

日、卒法號文達院日蓮大居士、今中西十郎左衛門、即秀長子孫也、故秀長、

中神石見賴屋初稱、 其先相良氏支族、父曰石見賴周、賴周屬賊魁忠

真、慶長四年、戰沒於志和地城、賴屋亦屬賊叛我、及忠真降、賴屋

遂來事我、而從 松齡公居柁城、其後命移居覺府、無男、以中原藤

左衛門子正三郎為義子、名賴增允稱內藏、 冒中神氏、為島津久元與力、

後轉物奉行・長野金山奉行、而奉使諸邦今中神左衛門、

長崎佐渡、父某、屬莊內賊、為恒古城宰、莊內滅亡之後、佐渡悼父

與不義、遂來事我云、

長崎通常或作常通、稱、 父曰兵部少輔永祿中、與田房克兵衛守串木野城、時松齡賊徒、 通常始居市來

移治富之隈、命移從朝鮮之役、新寨之捷、貫綠緞甲搏戰、有敵六七人、急逼

居焉云、

推倒通常於崖下、通常拔小刀、騰刺殺一人、餘皆逃去、及衝敵艦、

通常與樺山久高等五百人、俱扞南海島、將涉興善島、而無舟、時有

對州船一艘、進向興善島、知舟事楫師數十人乘焉、久高等望見之、

且善且議曰、天幸有焉、借之而交互相涉、將至興善島、乃呼而乞

焉、舟人許諾、於是命通常・及深野重張稱稱部兵衛、新寨之捷、被赤緞甲衝敵云、重張長

・平田平藏頭注、奉行、作督使者、三人為奉行、便再率眾至興善島、舟人時謂通常等曰、

我輩不可三至南海島、急順風揚帆、向釜山浦而進焉、通常等頻乞

之、不聽、於是三人不得已、俱至釜山浦、而上言之於 公、乃急遣

戰艦往救久高等、遂得俱全於難而帰釜山浦、久高等至、則言於 公

曰、彼等半途棄我輩、而三人俱至焉、其宜加罪於彼等、於是 公令

通常等曰、初舟人約涉眾、如背約汝等當斬殺彼輩、而宜救棲島人、

此見不能、而徒棄婦、罪難原頭注、罪難原一作何以得生、死、作自盡、、因賜通常重張死、而以鮫島筑右衛門

監之、平藏年猶幼、以故宥罪云、一子通泰稱仙右、及父自殺、改長崎氏

為舊井氏、至元和六年、上言於官曰、前時臣父有罪、而没入田祿六

十石、今也子孫無生彦、苦飢寒甚矣、伏願官復賜臣舊田祿、以長上

守其祭祀也、於是官乃賜本城地田祿六十石、其後居國分為噉役今長崎仙

孫也、

長崎隼人、從戰関原、及軍敗、隼人等分屬長壽院部下、敵軍突逼、

衆伏匿洩池、不敢出頭、長壽院叱曰、薩摩此去遠矣、奔北無路、諸

君面相識、今日何怯懦、時隼人執槍立長壽院側曰、無少怯心、遂俱

沒敵、

南鄉忠鏡稱孝、 其先伊集院氏七世久氏第六子忠氏稱遠江、 始食邑於南鄉、

因為氏焉、忠氏生久義稱常、 久義生久賴稱遠、 久賴生久俊稱民部、 久俊生

久辰稱若、 久辰生久救稱治部、 久救生久珍亦稱治部少、戰沒、 久珍生忠包稱若、 忠

包

包生忠鏡、忠鏡事 松齡公、為加久藤城宰忠鏡卒時不知年、法號清雲、忠鏡三男、長忠信稱左近、將監、戰沒於肥後本江、次忠永稱治部少、按吉松邑稱忠行八幡、顯其稱曰、天正二年、有松地頭南、稱治部少、轉忠行、或疑與忠永同、俟再考、陣沒於筑前岩屋城、次忠重稱右衛門、又淡治、續父後、從戰朝鮮及關原、及歸國、賜褒牒及田祿五十石、其後為 松齡公之納殿衆忠重卒時不知年月、法號湖岸度瀨、無男、養新納教久號昨右衛門、之次子九郎次郎以為子、遂為嗣、冒南鄉氏、名忠利稱內匠、又孫右衛門、今南鄉、覺右衛門、即忠利之子孫也、

中島早左衛門宗豐作右、從 松齡公如朝鮮及關原、從而歸國、

中島北國左衛門、事 松齡公於柁城、從如朝鮮、後 公賞其功曰、自櫻島及裏海眼界所及、孤賜之汝、因賜褒牒、其後北國謂人曰、奉其虛牒、而貪財福、猶所謂石田之無所耕、遂出褒牒焚之云、

永山半六作永、一、後改肥後氏所以不知其、稱十兵衛、從赴關原、及歸國、賜褒牒及田祿五十石、

長山兵部少、屬上井覺兼部下或云、以步卒、將、屬部下也、從有馬堅志田岩屋、數先登、或中石被創、

中戸秀成稱早左、衛門、事 松齡公為膳宰、從朝鮮及伏見、

長田太郎左衛門、天文廿三年、十月二日、陣没平松、

名越某、知覽人也、弘治元年、正月、陣没於蒲生北村、

長田三平、以 松齡公之道具衆、關原之敗、從而帰薩、

長田讚岐、和正正能第三子也戰沒日州、有兄二人、俱、事 貫明公、食邑伊敷長田、

因氏焉、子壹岐初稱本土之丞、又帶刀左衛門、復和田氏云今和守右衛門、即壹岐之子孫也、

中野助八、我班師於豊後之日、松齡公命助八・及森岡久助、執二佩刀而從焉、是時助八大醉、棄刀而見罪云、

長沼或云、上別府長、長沼氏云、秀昌、上別府早右衛門第三子、出為長沼宮内少義子、

冒長沼氏、初宮内事伊東氏、食邑於日州清嶽、而居上別府、後戰死於木崎原、秀昌亦事伊東氏、其後伊東氏以秀昌質於我、自此秀昌事

我無二心、而居國分、其後移居麿府今長沼與五郎、即、秀昌子孫也云、

長井利貢稱十郎左、衛門、慶長五年、抵役於浪華、

永井善左衛門、大永七年、從 大中公出清水城、而至伊作城、

長谷讚岐、為伊集院行司、大中公赴伊作之日、讚岐為之導、因

公得無恙云、

永利傳助、從山田有信成高城、天正十五年、與山田有棟、俱從有信之子有榮、往質羽柴秀長營、

長濱右衛門兵衛、島津忠長家臣、陣亡島原、

南雲親貞稱登、岐、其先大友親經左京大夫、經、第二子親明稱孫三、親明生親兼稱彌、親兼

生親常初稱三郎、又伊勢、親常生親武稱掃部、助、親武生親宗稱三、親宗生親貞、永祿

間、親貞事我、而有武名、子親續稱新四郎、生死不知年月親貞子孫也、即、

鳴海舍人助、上井覺兼部下也、從軍有馬及千々輪、而多斬捕、又與

關右京、俱至日州縣、而運我入豊後之策云、

村岡重光稱豐、殉死於 貫明公、年四十六法號舟守心居士、今福昌寺公、

村岡重年稱伊豆、父曰近江重敏、其先淡谷重國之後裔三郎重直、重直第二子近江守重利、始、天正十五年、

與子重榮稱備書、介、稱備書、子孫也。俱戰沒於目白坂、孫重利稱守右衛門、從討莊內賊、有功今村開悟

邨松主殿助、從死公子歲久法號長良壽上座、墳墓在五位寺。

村松彌太郎、公子歲久家臣也、戰沒於目白坂、

邨山越中、村山源太、與鎌田政虎俱戰死於肥後花山城、

木工田九兵衛、加世田人也、貫明公命移居國分新城、食田祿七十餘石、

向井友茂初稱四郎、又宗七、又新右衛門、其先不知何許人、父曰友重稱備防、兄曰某、友重

分所領向田地地、未知何、與友茂、為小宗、友茂事 梅岳君、討島津實

久、而陣沒於谿山、子友朗稱和泉、一翁、亦事 梅岳君、有戰功、孫友房

初稱治部少、又、安藝號龜、曾孫友信稱備右衛門、今向井源太、左衛門、即其子孫也。

浦川貞秀初稱藤九郎、又、木工左衛門、父曰貞繼初稱藤九郎、又佐渡、天正六年、十月、貞秀戰於耳

川、斬敵數十、子內藏丞初稱金左、從軍島原此時以稱野將步卒云、今、浦川金左衛門其子孫也。

宇都和泉、天正十五年、援桂忠詮、戍平佐城、

內田主馬首、從公子歲久戰亡於瀧水法號重山王、水、珍禪定門。

內田新三郎、從討伊東氏、陣沒於三山、弟源左衛門號忠、繼兄後、事

貫明公 松齡公、從軍數有功初源左衛門居帖佐城、後移居鹿府、今、內田次郎兵衛其子孫也。

植木彌左衛門、慶長元和之歲、命赴浪華、賞賜田祿若干石今植木右衛門子孫也、

野崎對馬初稱彌太郎、號長阿、初居伊集院莊嚴寺、數從和尚登福山城在伊集、而祭

佛、因善知城中地利、及我兵進攻城、對馬潛入城中放火、城遂陷、

自是伊集院地盡屬我、因賞賜陣羽織、及白銀若干、又賜清藤邨地

在傳集、而移居焉、子吉左衛門、為比志島國貞騎馬與力、後轉遷浮得

奉行、及納殿役、食田祿四百石、其後乞伊勢貞昌、更野崎氏為有川

氏今有川五左衛門、即、吉左衛門子孫也。

野崎善兵衛一作野、從軍伏見、有功、

野崎十兵衛一作十、以厩人從軍、數有功、因賞賜田祿若干石、又從軍

朝鮮今野崎與五兵衛、即十兵衛子孫也。

野間忠政、島津運久之子、母野間氏、初野間氏之先畿內人、而有虞

芮之爭、因去國下薩、而世々居川內、以此地有野間嶽故、子孫為野

間氏云、後出水賊徒來屠野間氏一族、有一少女猶存、乃略賣之於民

間、其後自至伊作、而上言島津運久曰、妾本野間氏女、一族夷滅之

日、見略賣民間、今年甫十三、願給事於內庭、運久因賜名奄室、後

生一男、稱犬太郎、及長名忠政、稱為阿彌、冒野間氏、而命為同朋

職、後又改稱喜菴、子政定稱勝阿彌、孫政商宗員、及豐公西下、貫明

公命政商至京師、學禮于細川氏、又學茶式於千宗易云、子政貞

稱孫兵、善書、事 貫明公今野間孫右衛門、即政貞之子孫也。

野間武藏按記、有關係重長家臣野、間武藏者、蓋同人也、戰沒於朝鮮福昌寺地、

野田國昌稱廣、其先日野田又太郎昌考、父曰國廣稱內、國昌事 松齡

公、居橫川、天正十四年、陣沒於筑紫城即今野田源太左衛門、

野田宗可、性好連歌、寬永中、慈眼公命居柁城、

野口右京亮、清水人、弘治元年、三月廿七日、戰沒於帖佐、

野畑字煥拔太兵衛、陣沒於木崎原、

野本和泉初稱彌六、父曰越中、出為肥後種、而家居粟野邑云、慶長五年、関原之敗、從而帰國、賜褒

牒及田祿三十石、七年、從 慈眼公朝京師、十一月、公賜和泉腰

刀於浪華邸、後帰國、而谿山邑山、今其子孫斷絶云、

野元為綱一作為明、稱、父曰昌綱稱五郎左衛門、本藤井氏、而出為野元伊豆信綱、冒野元、為綱以騎

馬與力從三原重庸陣没島原、年六十、墳墓在出水龍光寺野元源右衛門、即其子孫、

子孫、

栗波田道隆稱左、從戰岩劍、後與子九郎右衛門、俱事 松齡公於柅城、

久木山一作棟二兵衛、飯野士也、從朝鮮、新寨之捷、我軍追至晋州

川、此時二兵衛獨進渡川獲甲首、而還云、

久木崎民部左衛門、豐公入薩之日、援桂忠助、戊平佐城、

黑江萬助、宮崎士也、戰沒於筑前岩屋城、

藥丸壹岐、祖曰兼將稱出雲、為肝付省釣家老、兼福島城宰、而叛我、

父曰兼持稱正、墳墓在大崎松林、今名其地曰彈正松原、至壹岐始來事我、而以其無貳心故、賜田祿

二十餘石、朝鮮之役、從 慈眼公新寨之捷、又從莊内、有功、增賜田

祿若干石、関原之敗、從而帰國、以功賜田祿五十石、慶長八年、八

月十三日、卒、墳墓在不斷光院法號法雲、子兼利初稱新藏、又大炊兵衛、又半左衛門、某年有

南蠻舶至長崎港、是時兼利以鐵砲頭、率兵子四十人赴焉放舊訊、正保一年、有南蠻船來長崎、蓋是時

也、今藥丸長左衛門、即兼利子孫也、

藥丸伊豆、未詳其言行、

築瀬兵右衛門、島原之役、以步卒將屬川上忠堅、進斬敵將隆信、又

從軍朝鮮、

山元備前、從討伊東氏、有功據兼日記、有宮崎士山本備前實、為備前人、天正十三年、六月十一日、從擊破肥後陸軍、先是被創、蓋此人也、

子亦稱備前、事 松齡公、無男、命以某氏子為養子、冒山元氏、是

日壹岐、年甫十六、從行朝鮮、及長為庖丁人、而率妻子數抵役江都今山元五郎左衛門、即壹岐子孫也、

山元親匡初稱木工左衛門、父曰親將稱十郎右衛門、朝鮮之役、親匡從一唯世子、文

祿二年、世子薨於巨濟、親匡奉柩而帰國、四年、九月、至大祥之

日、親匡夢 世子、越八日、自殺於皇德寺、以殉焉、年三十一、墳

墓在谿山皇德寺龍門橋側法號節聖正、其禪定門、其子孫也、

山路種清稱後、從 松齡公如朝鮮、種清感 公恩、頼川上忠兄而請

他日必為殉、公聽之、及 公薨之時、越八月十六日、木脇祐秀等

十數人殉死實窗寺在柅、是時種清自帖佐赴焉、路至岩嶽下、而聞人々

已殉了、則自割於道傍而死、即葬焉、至今稱後藤塚、在大松樹下、

後命建石塔於妙圓寺今靈廟前第六地蔵石塔是、法號清海隆善居士、

安田木工丞、柅城步卒將也、弘治元年、三月八日、戰沒於山田城在柅、

山崎藤八郎稱但、菊池氏之支族也、從酒谷及三山岩劍、有功、子藤

七郎、母肥後氏、後改山崎氏為肥後氏至四世孫藤兵衛、復山崎兵、

矢野兼雲初稱久次、事 松齡公、善騎馬初兼雲年廿四、公命受撰州、從軍朝鮮、新

寨及南海之戰、有功、又從関原、從而帰國、居柅城、道場原、門人

益多元和七年、柁城田縣、兼雲台百五十五石、其後人有告兼雲奉天主教者、天主教天下大禁也、

於是執而繫狴犴、兼雲乃作馬術書、與其子德千代、後遂燒殺兼雲於

脇元佐在帖、有子二人、長曰志摩介豐代、次曰權之介、以父之故見謫於

日州穆佐山寺、後兄弟潛出寺、來匿脇元親戚家、而數于田射殺野

豬、事上聞、命擊殺兄弟、

矢野彌十郎、寬永十三年、命行鐮流馬儀、

山崎助右衛門、帖佐人、從 松齡公赴朝鮮、及伏見、先登、

柳田左近、日當山士、天文廿三年、戰沒於柁城網掛川、

柳田外記、從軍廻、又謀田上城、

山下武綱稱三右、稱十左、曾祖曰義長稱志、祖曰義貞稱豐、父曰武盛稱長門、為大始良西散地頭、

頭散地、兄武主稱十左、從戰沒於朝鮮、以故武綱繼父後、從關原一作備、

山内宗左衛門、天正六年、戰沒於新納院高城々麓、

山内傳右衛門、命居蒲生城慶長六、又移居平松及柁城、

柳元壹岐、慶長間人、

松崎大藏、伊作人、天文七年、十二月、梅岳君使大藏等謀加世

田、而知賊兵乘夜出城多歸家、急還報、於是發兵乃陷之、

松浦筑前、從山田有信居高城、而為步卒將、後 松齡公召筑前於飯

野城、而參謀軍事、其後有無上之心、而見逐退云、

松田重利稱慶岐、其先新羅義光之長子遠見義清第二子太郎義重、始為松田氏、其子孫甲斐守某、始、初居吉田、

事 梅岳君、移居加世田、而為町奉行、子重昌稱和、天正十六年、從

貫明公朝京師、後去加世田移覺府、其後客死於京師、子重安稱左近、

其子重信、重信從 慈眼公至駿府、而病死即今松田七左衛門、

松田市右衛門、關原之敗、從而歸國、賜田祿三十石、

丸田飛彈一作肥後、初稱三左衛門、其先某、與山田某俱稱鎌倉大明神主、轉居於飯野及國分、數

從軍有功、子實延又稱三右衛門、命移居覺府實延子孫今稱丸、

丸田氏房稱備後、號道興、性好鍛、天正中、至濃州關、師若狹守口房匠

刀、既而反乎薩、慶長十五年、病死、墳墓在不斷光院法號清敬、

丸田乘祐號元心、、大口士、年十六、從新納忠元始行軍、獲甲首、其

後從軍數有功、終身手自獲甲首、凡三十六云乘祐子孫今、

丸田左近將監、宮崎士、從攻岩屋城、有功、

丸田山之允、上井覺兼部下、戰沒於岩屋城、

曲田八郎左衛門右一作、前田萬右衛門二人俱為、松齡公道、俱從關原、軍敗、從

而歸薩、

前田主稅、戰沒於木崎原、

前田範時稱又六郎、此志島榮壽第四男、事 梅岳君、戰沒於加世田、孫範春稱六、

從 松齡公、移居飯野城、範春孫範之稱志、戰沒於肥前島原、子和

泉、從軍莊內、其後家居末吉云至今子孫、

間世田刑部左衛門父亦曰刑部左衛門、天、屬川上左近將監居志布志、天正六

年、十月、入戌新納院高城、二十日、戰沒於耳川、

松元久泰稱次郎、平山氏支族也、祖左近將監久賢、父文左、事梅岳君 大中公、從攻市

來城、斬賊將式部少之弟津實久、得其首、直從陷平之城、其後從陷伊集院

城、尋攻竹山城、與賊將肥後助西相刺而死按說、天文五年、隨伊集院城、六年、隨竹山城、

松元武昭、武昭蓋久泰之子孫也、說亦同傳文、而無他據、俟再考、其、

松元源兵衛、松元源右衛門、俱從關原、軍敗、而歸國、

松元新三郎、天文七年、從攻加世田城、

松元三七、天文二年、梅岳君命三七及池上伊豆、使日置、招山田有親至伊作、而誅之云、

松元賴規稱和、天正間、命知舟事、至元和間、食田祿凡二百石云稱規子孫、

松元六郎左衛門、紀州人、其支族松元刑部助光俊號源者、系譜曰、其先松元源太郎滿、

四年、遣刑部而謂 貫明公曰、方今豐公奉辭伐罪、大難略已平矣、君若速屬麾下、我表君為薩隅日三州牧、雖其事不成、而 公與之始

相識、及豐公入薩、和議休成、後每有上國事、我必賴刑部、以故刑部紹介伊集院幸侃、而使六郎左衛門仕于我或云、六郎左衛門子孫今稱松元甚右衛門云、

其後至 寬陽公之世、光俊孫彦太郎者號昌憲玄憲、光俊後門部、亦由阿多對馬守、始來仕我、因命為醫、而賜田祿三百石松元彌八郎云、

松元佐渡、天正中、命為唐船噯、

松元長國元一作本、稱善三郎、又、隈城士、松元左近弟也祖父某、不知何國人、關原敗

後、長國從 君夫人自浪華歸國從一作關原敗後、賜田祿五十石、其後知浪

華邸事、至六世之孫、猶為職云、

松元又八左衛門、宮崎士、天正十一年、戰於堅志田後肥、有功、

牧山吉右衛門、從軍關原、軍敗、從歸薩、

牧野惟稱對馬介、稱姓藤原、其先不知何許、事 慈眼公為膳宰今牧野甚平次、即、

前原孫左衛門、濱市士、關原役、從侍從豐久、前原源六、福山士、

從山田有榮如關原、既而我分銃手數十人、往援龜井武藏守、孫左源六與焉、而武藏守猝叛應東軍、孫左源六等皆戰沒、

松崎貞澄稱助六、又采女、其先兵庫頭源仲政源滿仲之、第三子三郎光重、光重之孫太郎重貞、重貞之數世孫貞隆稱本工右、始為松崎氏、文明十七年、戰

沒於飲肥、貞隆生貞康稱助大、貞康生貞充稱助大、貞充生貞澄、貞澄事 貫明公、轉居阿多及富隈覺府、慶長十六年、為代官、從 公女往質

江都貞澄子孫今稱松崎、丸田忠純稱彌七左衛門、其先伊集院賴久長子助三郎德久、德久生下野守

久國、久國事 定山公、賜田布施邑丸田之地方五十町、因為丸田氏、久國之八世孫忠友稱式部左、忠友生忠純、忠純從 松齡公如朝鮮、

而與弟忠包稱九郎左、俱戰沒於海上忠純子孫今在田布施邑云、福屋日向、永祿間、有忠勤之事、天正十一年、出成八代城、子兼昭

頭職、其後我行大迫物事於王子原、兼昭為書記、

二渡重利稱次兵、伊地知重秀第三子、出為二渡傳右衛門養子傳右其先、重福氏重第七、

因冒二渡氏、文祿元年、將有事於朝鮮、公下教

曰、若有以田祿五百石自賦祗役者、則班師後必增賜五百石、於是重利以步卒將自給而從焉、臨行便先賜二百五十石、及歸國、奏請增賜二百五十石、是時使鎌田出雲守告之曰、二渡氏者、渋谷黨、而曾叛於我、我今雖負德、子亦孤恩、竟不與、其後 慈眼公誅賊臣幸侃之時、使重利護衛茶室外云今一渡與右衛門、即重利子孫也、

福崎助兵衛、横川土也、天正十四年、我花山城後肥陷、敵兵四五百人乘勝進侵三舟邊境下豐、是時助兵衛從伊集院久治橫川地、擊破之、功冠於衆、松齡公褒賞之、及班師於切加部、敵兵逐窘、助兵衛殿而引去、

福崎主水、柁城人、慶長四年、五大老賞新寨功、增封出水邑五萬石、是時遣主水及鬼塚主税、詣出水、讀軍令而盟衆、因居焉、慈眼公之世、命移居覺府、

福崎新六、天正十一年、從諸將往救肥前有馬氏、敵兵三千猝出戰安德、伊集院久春單騎衝敵、敵披靡、新六從而為之後證云、

福崎伊豫、事 貫明公、為兵道役者、及築公子歲久墳寺於瀧水、命伊豫量度之、

福崎次郎三郎、弘治元年、陣沒於蒲生北村正月廿二日、

福崎助八郎、永祿四年、七月、陣沒於廻城、

福崎堅助、從伊集院久治鎮鷺臺城、有戰功、

藤崎公範初稱小四郎、後美濃守、從五位下、建延之亂、公範之子也、今藤崎公範、即公範之子也、而年記似不合、、其先橘諸兄公之後橘公紀初稱小四郎、後美濃守、從五位下、建延之亂、公紀之子也、今藤崎公紀、即公紀之子也、而年記似不合、、曾祖曰公辰稱美濃、公辰有兄、曰修理亮公顯云云、、祖曰公明初稱小四郎、又備前、父曰

公兼初稱平六兵衛、又肥前、公範事 大中公、天文十四年、九月、晦戰於岩劍城、公範子但馬公行、孫雅樂公連、曾孫助右衛門公昌、今藤崎公範、即其子孫也、

藤崎庄兵衛、居向島藤野村、關原敗後、松齡公自謫居向島、在庄兵衛所、是時所手自栽梅樹今猶存云、

藤崎六郎右衛門初屬賊而備我、後、覺其非而備我、

福山安右衛門、事 慈眼公、為納殿役格、而賜月俸八人賦說在別記、或云福山雨連者、華髮為納殿役人、與安右衛門、又按元和中田藤精、有福山雨連云、

古川伊賀覺兼日記云、天正二年、松齡、公使伊賀及川上左於某陣、

古川與二郎、殉死公子歲久法號靜庵、清上庵、

深柄左衛門父曰七左、初事大友氏、後流落於諸邦、慈眼公殊召而賜田祿若干石云今深柄嘉右衛門、即其子孫也、

藤井久介、居於志布志、元和五年、八月廿三日、殉死於 松齡公於福昌寺法號悟安、初稱上座、妙圓寺第十二石塔是也、至久介子休右衛門、寬政公命自志布志移居覺府、今藤井善兵衛即其子孫也、

藤崎公綱、文之和尚門人也、慶長十九年、五月、遣使者某於駿府及江都、是時命公綱為副使云、

淵上久右衛門右二、佐左、關原之敗、從而帰國、

藤見長助、清嶽士也、戰沒於岩屋城、

二木但馬、天文二年、十二月、人有上言山田有親謀叛者、梅岳君乃遣使召有親於伊作城、而伏但馬等於佛坂、誅之、但馬斬其首而帰

但男子孫今在、高岡邑云、

二木利助、初姓是枝氏、加世田士也、善鑄錢、因命移居柘城、而錢焉田布布人、有枝仁助者、命鑄、幾於柘城、黃利助同人也。是時又改二木氏為棄名氏元文九年、五月、利助、子孫今在柘城為坊人云。

淵邊元繼初稱平左衛門、又、事松齡公戰沒於豐後、元秋陣沒於木崎原、元繼生元秋初稱平左衛門、又、事松齡公戰沒於豐後、元秋生元真右衛門、領一作良、慶長二年、年十五、從松齡公如朝鮮、有功、從而歸國、居柘城、後命移居覺府平街今瀧邊良右衛門即其子、孫也、世々家室也。

二見石見、貫明公始設關於日州去川、因命石見鎮焉、而賜田祿一百石、松齡公自關原班軍、石見先遣人馬步候、公於高鍋名貫川、而自往、迎於佐土原六野原云、子源右衛門、從戰沒朝鮮、子倭右衛門、寬永十五年、島原賊起、是時倭右衛門年猶幼、叔父二見內藏丞、季父二見休右衛門、二人代俵右衛門、俱率兵至米津、而聞城已陷、因班師云今高岡土二見清左衛門、庶右、孫也、世々成去川間。

甌武清初稱三部五郎、又兵部左衛門、者五郎、食邑於隅州帖佐邑甌今在山田邑、改曰北山、因為甌氏、元秀之八世孫武英稱下野、武英生武清、永祿間、命武清移福島、而屬豐州家、數擊伊東氏、有功、元和四年、卒、子武政初稱正右衛門、號祐心、從慈眼公如朝鮮、泗川之捷、武政擢紫綬甲、又從關原、後命成大始良城、其後更甌氏為平山氏慶長十九年也、至正德二年、四月十八日、武政子孫上言復、言為平山氏、今平山八右衛門即其裔也、又云、右衛、為物奉行、

木場貞親稱權兵衛、其先蒲生清真弟清貞、食邑於蒲生米丸、始為木場氏、清貞之十世孫貞元稱七郎左、居田布施、後移居覺府、食武村之地田祿若干石、貞元生貞種稱淡、貞種生貞盛稱新右、貞盛娶小倉氏、生貞親、貞親從行朝鮮、及班師、陣亡於海島、弟貞行稱吉良、嗣之後、貞行之孫鐵之介貞行生貞良、稱平左衛門、貞良生鐵之介、性巧而好鍛、善作刀及槍、嘗抵役於江都、寬陽公賜諱字、名忠往一作忠行、其後卒、墳墓在松原山天和三年、三月十一日、卒、法號云、

兒玉利貞初稱新四郎、祖四郎兵衛、事梅岳君、父備前、亦事君近衛家、利貞從如朝鮮、後從貫明公徙於國分城、其後移居覺府、子利昌初稱新四郎、以自賦從朝鮮、有功、初利昌學擊刀於東鄉重位、術大進、四年、從莊內、十四年、從諸將征琉球、既反、累遷船奉行、及步卒將納殿役、而賜始良地頭職、寬永十六年、五月廿日、卒、法號壽山源量居士、墳墓在興國寺今兒玉四郎兵衛、即利貞子孫也。

江浪彦三郎、關原之敗、從歸國、賞賜田祿三十石子孫今在、江口作兵衛、松齡公圍人也、關原之敗、公馬疲不逝、作兵衛與小川與三、俱解鞍、持而歸國、賜田祿十石子孫今在、

寺原重幸稱早、大口士也、從松齡公如朝鮮、寬永十五年、三月十日、殉死、慈眼公、年八十二法號顯宗、稱早、今稱早、寺公廟前第六城、鐵石塚、是為重幸墳、重幸將殉、官命監止之、至是遂殉公云、

始良久次稱新次、其先定山公第二子久安稱三部左、更島津氏始為始良氏、久安之五世祐久稱兵部少、更始良氏為碓山氏、祐久之五世孫久近稱次郎左、久近生久次、天正十三年、久次從攻堅志田城、先登沒於正

門、年十八、初久次與平田左馬允俱深結交、是戰也、左馬聞久次死、直進入城中、斬殺寇數十人、遂負久次屍而帰營、身亦被創久次法名然燈公、
居士、稱葬於松原山、墳至今猶存焉、今破山八郎右衛門、即久次子孫也。

愛甲次兵衛、肥後人、其先食邑於久多良木、至次兵衛、始來居薩州知覽邑、而遂事我、寬永十九年、卒、長子九郎右衛門、早死、次子廉宗稱次右衛門、慶長十六年、生、寬永十三年、祇役於江都、是歲賜暇帰國、慈眼公賞賜寶刀・及田祿六十石、十五年、殉死公、年二十八、
法號虛白、無居士、福昌寺靈廟前第七地蔵石塔、是為廉宗墳、今愛甲次右衛門、即其子孫也。

愛甲源五左衛門、戰沒於木崎原、

赤松義季初稱季次郎、又雅、樂介、又肥前守、其先妙善律師則祐一作則、村、則祐生義則初稱兵衛、又右京又上總、又兵部大輔、又大膳大夫、滿祐有故將自殺、命子教康初稱次郎、又雅樂頭、潛逃免禍於佗邦、於是教康始自播州下日州、居中島在志布志、松山、教康生則重稱季次郎、又總中守、又肥前守、則重生則秀初稱次郎、又肥前守、則秀妻島津忠廉女、而生義季、義季事 貫明公、討伊東氏、有功、因賞賜田祿若干石、其子則基稱季次郎、又肥前守、戰沒於日州目白坂、無男、以川上久政日向守子繼之後、名義張稱季次郎、又肥前守、
赤松氏、後有故復川上氏云、

安藤茂昌稱左近、近左、其先日安藤八郎左衛門應永二十年、創建、之常稱詞於素所與云、祖亦稱八郎左衛門、事 大中公、討渋谷賊、戰死於入來、父茂秀、亦稱八郎左衛門、茂昌從討肝付氏、天正十五年、茂昌昇 公輿、而往謁豐公於泰平寺、既還、賞賜田祿五石、其後如朝鮮、及関原今安藤平右衛門、即茂昌子孫也、

安藤權右衛門、從軍朝鮮、慶長二年、八月、從攻南原城、與上床國隆俱先登、從而帰國、六年、命居蒲生城中、後又移平松、又移柅城、

荒田武尚又初稱助三郎、又助右衛門、関原之敗、從帰國、賜褒牒及田祿五十石、而居國分新城、食田祿六十石、某年正月十八日、卒於江戶法號久信居士、按別記、有荒田助左衛門者、從朝鮮之役、蓋武尚同人也、武尚子、孫岑在出水邑云、

精松三右衛門、関原之敗、從而還薩、賞賜世秩五十石、及褒牒一紙子孫今在大、口邑云、

有村貞鄉稱鄉、稱鄉人、食邑向島有村、因氏焉、後居蒲生城子孫今在、蒲生云、

朝倉常陸、耳川之役、戰沒於高城天正六年十月、二月十七日、

荒木嘉右衛門、荒木助左衛門、俱從山田昌巖、軍関原、

有屋田久逸稱左衛門兵衛、作右衛門兵衛、伊集院氏四世□國第四子麥生田義□助稱兵衛、義□

第二子忠房稱兵衛、稱部、始為有屋田氏、忠房之七世孫久耕稱加、稱加、久耕生久逸、慶長五年、命居高岡城久逸子孫今居高岡邑、久逸有弟大炊左、義誠忠貞、戰沒於野美谷城、

荒武某、事 松齡公、天正十年、十一月、命與僧左京坊使筑後田尻氏、

荒武伴助後稱季六左衛門、又意岐、祖成宗、事伊東氏、為佐土原地頭職、而居荒武、

因氏焉、而陣沒於木崎原、父曰玄蕃、伴助為伊東氏之質子、而事

松齡公於飯野城即伴助子孫也、

綾部助兵衛、秋月長門守家臣也、為日州美々津郡代、慶長十九年、

十二月、浪華之役、慈眼公率兵至豊後、則薩兵船未至、由是借船

於助兵衛、乃出船六十艘・楫師三百人、及還至美々津、召助兵衛、

賜酒・及長刀・鳥銃、而謂之曰、子來仕我否、助兵衛辭曰、臣老矣、無意仕宦、然有子四人、如苦飢寒、則願託之於君、其後助兵衛

來居小林、至子助兵衛之世、上言於宦、而委質於我云子孫今在、小林、

坂元吉左衛門、十三世祖後藤右衛門大夫者、從 得佛公始下薩、命食坂元村、因氏焉、又命至江州坂元、衛護山王藥師毘沙門諷方四神主以下薩、而創建諷方祠於福迫、又命之世主歲暮元旦及十五日之嘉儀云、父吉次郎、事 興岳公、戰沒於蒲生、天正十二年、使吉左衛門擊殺強盜於福昌寺事詳卷兼、日記、子次郎太郎、戰沒於肥後矢崎城坂元千左衛門即吉左衛門之子孫、

坂元番左衛門、從 松齡公軍朝鮮、其後居牛根邑、元和五年、八月十六日、殉死 公於柁城實窗寺川原靈廟前第十石塔、亦是為番左衛門墳坐、墳墓在牛根、又妙圓寺、

坂元通宣稱平右衛門、食、田祿七百餘石云、、父通次亦稱平右衛門、食、田祿七百餘石云、、永祿三年、生、及長事 松齡公、剃髮賜號喜庵、從 公及 一唯世子赴朝鮮、子通詮稱左衛門、今坂元立右、即通詮子孫也、

坂元織部、嘗祇役於江都、是時有別府主計者、有罪而逃邸去、迹而獲之、賞之以田祿六十石或云、今坂元平右衛門、即織部子孫、據之則高藏部者通詮之子也、

坂元孫左衛門、慶長間人、

坂本助五郎、田布施士也、慶長四年、年十六、以自賦從庄內、而勞軍凡百日、國老比志島國貞、平田增宗、鎌田政近、島津忠長、連署賜田祿若干石、後徙居高原、其後復徙田布施、其子孫為松井新左衛門家族云、

坂本越後蓋稱川上、後、命移居長島、、為伊集院久春從士、而與白坂佐渡俱戰日州石城、有功、其後岩屋之役、越後執槍多刺斃敵、

佐々宇津祐朗稱野介、姓藤原、、學兵法於川田義朗初、義天公第五子伯耆守豐久、始學兵法於其師、傳之於院大和守忠朝、忠朝傳之義朝、義朝傳之祐朗、祐朗傳之石坂半之助久朝、久朝傳、親本傳之萩原八左衛門兼次云、、天正八年、十月、以軍師

從陷矢崎城、

左近允直純稱直、、初氏大迫、及 慈眼公城麿府、使直純董其事、及功成、直純請復初氏、不許、而賜稱壹岐、人不知其所以云今左近允助左衛門、即直純子孫也、、

迫田忠清稱人依、其先指宿五郎忠光第五子忠光、始為迫、田氏、忠光生忠清、、戰沒於加世田今指九右衛門、即忠清子孫也、

木上惟商初稱部、、大友義鑑支族也、祖父長秀稱義、、學射於小笠原光清稱民部大輔、自大永元年、正月十一日、而後卒云、、傳之子新五郎亦傳新五郎云、、新五郎傳之子惟商有大迫物及笠掛藤、、惟商初屬大友氏、及沒入豐後之日、惟商流落來大口、賴

新納忠元而居焉、其後 公將學禮禮俗此云有、於小笠原氏、小笠原氏曰、有木上掃部者、嘗學禮於我、今聞彼在君邊境、宜召而學之、於是召惟商於大口、而居之蒲生、因數召柁城而學焉、慶長中、命居麿府、賜

田祿若干石、而掌射事、及老剃髮於 公前、號又泉、賜頭巾及衣服、某年十月廿四日、卒、年九十三法、號淨庵原團居士、墳墓在蒲生永興、寺、今木上清左衛門、即惟商子孫也、

北村國家稱三五、、從 松齡公行朝鮮、又從攻伏見城、有功、

木村主殿助、騎從 一唯世子、赴小田原是時主殿及池田六、左、以厥別當從焉、

貴島圖書祖曰士佐、事、梅、、戰沒於橫川、子雅樂、戰沒於高城日、、子賴重稱平左、、從 松齡公如朝鮮、及關原、子金兵衛、命屬公子忠朗於柁城、後復移居麿府今貴島八郎兵衛、即金兵衛子孫也、

貴島柳右衛門、從軍關原、

貴島肥前、為納殿役、後命屬公子忠朗於柁城、

貴島典介、陣亡於新納院高城天正六年、十月廿六日、、

貴島源四郎、島津忠鄰家臣也、陣没於目白坂、

桐野掃部介、隈城士、後移居出水、關原之敗、從而歸國子孫今在、出水、

桐野治部左衛門利儀、元和五年、松齡公薨、於是八月廿三日、利

儀自割於福昌寺以殉法號機岳了活上座、今妙圓寺第十二石塔、是為利儀、今桐野佐平太、即利儀子孫也、按引當留云、寬永元年、十月四日、賜大目土桐野治部左衛門利儀七十石、蓋利儀子也、

桐野九郎左衛門、為入來邑行司、能識山中地利、及命押川公近誅平

田增宗、以九郎左衛門為導、而執島銃射殺增宗于入來土瀨戶、賞其

功、賜白銀若干枚、且移居城中、賜歲俸十石子孫源之秀二世、更桐野氏冒外家中村氏、稱與兵衛、今中村與右衛門即其裔也、

切通小七、殉死公子歲久法號一翁祖、芳禪定門、

木原七郎左衛門、關原之敗、從而歸國、賜田祿若干石一作木原七郎、寬永

中、為納殿役、而命屬公子忠朗、

城井三郎兵衛、濱市士、從侍從豐久赴關原、命適援龜井氏軍、戰亡

不歸、

城井彌二郎、未詳其功業、

弓削等薩、元龜中、航海至西土、而學畫、自稱波月等薩或云、等薩學兩於吉備國、未詳是否、後歸薩、而居國分、及貫明公居富隈城、命移居柅城子孫在柅、城云、

湯田重賴稱左衛、其先洩谷重國第四子鶴田重茂稱四郎、重茂生二男、長重

行稱太郎左、次經重稱六郎左、經重之孫重倍稱長、食邑於祁答院湯田村、因氏

焉、重賴即重倍之九世孫也、世々屬祁答院氏、重賴始來事我、陣没

於肥後、子重成稱與、陣没於莊內、子重昌稱與右、事松齡公為荷物

役、元和六年、重昌請東鄉重綱即實、更湯田氏為東鄉氏今東鄉八右衛門、即重昌子孫也、

湯地定清稱左、初事伊東氏、後來歸我今湯地善左衛門、即定清裔也、

湯木禪門、陣没於木崎原、

柚木崎丹後、父曰祐永一作正家、亦稱丹後、事伊東氏、木崎原之役、祐永引弓將

射公、公叱曰、我是島津□□、祐永不敢發、下馬而合掌曰、今

日吾固死節矣、願君恤孤、我死不朽矣、公遂刺殺之、後憐傷不

已、索其孤丹後、而賜祿廿四石九斗、未幾被籍没焉、不知其所以、

至元祿十六年、又召其子孫平右衛門者、世給祿米六石今稱佐土柚木崎平右衛門者、

日、柚木丹後正家、事伊東義輝、為日州內山去川役人、世食日州飯田村柚木崎、因氏焉、木崎原之役、為公所刺殺、其子孫、稱右衛門、居稱佐、而歸我、從後莊內、慶長五年、正月十六日、戰没於赤地、年二十六、法號春山常智居士、子丹後正信、亦居稱佐、公命自關原也、途至郡於郡六野原、追實正家忠死、命伊勢自成索其質、時有高岡土柚木崎次郎右衛門者、自稱正家後、詣柅城、則召約賜祿百石、先賜三十石、既而正信亦詣府留焉、以斷正家之正統、凡七年、官辨辨其真偽、次郎右者、實正家之支

宮內勝兵衛、天正十五年、援山田有信成高城、

宮內次郎左衛門、號宗繁、初為宇都宮氏、後出繼宮內氏宮內氏其先從得、

而居加世田、及猿渡信光為羽月地頭職、使宗繁為之步卒將、因徙居

焉、其後肥後合志加賀者、來降我、居羽月、有故戮之、是時命宗繁

及白坂式部、引兵往而誅之加賀實繁在羽月、大聖寺、水股之役、宗繁擊敵步卒將小川

伊豆、斬其首、其後松齡公命移居栗野、及帖佐、蒲生、從軍關

原、執槍刺殺敵二人、而失公所、後歸國、死於蒲生一作關原之敗、陣亡於豐島、其子孫也、

宮內茂右衛門、以松齡公道具衆、從如關原、始終以全而歸國、

宮內某、從赴莊內、及諸將進攻山之口砦、某與伊地知某俱奮戰最衆、慈眼公乃分辨慶二字、以宮內稱辨助、伊地知某稱慶右衛門、後辨助為春田朱左衛門所殺、語在朱左事中或云、按宮內氏家譜、以伊地知某右衛門作井原助、朱左傳前後似不合、俟再考、今、宮內喜兵衛即辨助子孫也。

宮路紀伊、戰沒於木崎原、子三之允、從如豐後、及公命諸將築平佐城、以三之允及鬼塚主稅、掌糧食之事三之允子孫、在松城云。

右松祐盛稱松右、初事伊東氏、後來事松齡公、從軍數有功、關原之敗、一夫人潛出浪華邸、乘舟而遁、是時祐盛等留守邸、既而誑門吏、而亦出城、追及夫人於舟中、從而歸國、十月二日、賜褒牒及田祿一百石、元和七年、十一月十四日、卒法號理謙宗心居士、墳墓在松城云。、無男、以伊東祐昌稱肥、次子源八為養子、冒右松氏、名祐位號五右衛門、為使役、兼財部地頭職、後更復伊東氏子孫之世復為右松氏、今右、松安右衛門、即其子孫也。

宮里正親稱彌次郎、又尊岐、其先曰左衛門國通云、祖兵、父式部正宗、正宗、信經第五子云。善工、事慈眼公、公會白於四辻大納言季繼卿、使正親摹作宸宮御琴此云、殆逼真、後又使為琴、獻之

帝云正親家在福昌寺門前云、今宮、里孫之采、即正親子孫也。

滿留忠實稱彌八左、實稱門、事梅岳君、天文七年、命忠實每夜諜加世田城、十二月廿九日、夜、賊兵盡出城而歸家、忠實還報、乃發兵攻陷之、永祿十二年、君卒、十九日、忠實自殺以殉焉法號光禪道心 upper、墳墓在君墓左側、

宮牟禮十郎、從如關原、軍敗、從而歸國、賜褒牒及田祿三十石

宮之原六兵衛、慈眼公以下開文、今宮之原長、兵衛、即六兵衛子孫也。

志和地忠繩治部大輔、其先、義天、公第五子伯耆守豐久、豐久子播磨守忠常、忠常子播磨守忠常、及大龜公出居、忠常出於莊內、而為北鄉氏家臣、忠常子右衛門忠光、食邑莊內志和地、始為志和地氏。北鄉氏家臣也、天正十五年、戰沒於豐後、年三十四、

白尾國廣稱彌右衛門、作利、松齡公之在柁城也、以國廣為惣大工、從朝鮮及關原、關原軍敗而退、道至伊賀、君臣飢甚、國廣從民家乞食、一

婢盛器而進之、國廣移之紙、而至、又移於蠶器謂之馬杓、後、而獻諸公、公少食之、餘皆賜之左右野史氏曰、羅大經曰、楊氏云、人皆以飢寒為患、不知所患者正在不飢不寒之際、既反、越十月、賜褒牒及世

秩三十石朝鮮及關原、其後國廣少稱及男國廣、事慈眼公、與俱居慶府、寬永六年、己巳、九月十一日、國廣卒、年七十三、葬松原山、法號淨應居士、今白尾左衛門、即、國廣子孫也、或云、國廣與國廣同、然不可考矣。

白尾幸高佐自有白尾孫、蓋此人也。、祖曰圖書、父曰幸廣稱淡、幸高以代官役、從一

唯世子如朝鮮、子幸孝稱孫九、陣亡于朝鮮即幸高子孫也。、

色紙仲兵衛調、仲、為松齡公炊飯役、從如朝鮮、及公薨、自到於柁城實窗寺川、以殉焉元和五年、八月十六日也、法號月皎道欽禪定門、今妙圓寺、公朝前第三地、是為仲兵衛、仲兵子孫為柁城家臣、而生產衰弱、因移居馬關田云。

島原勘助、島津忠鄰家臣也、陣亡於目白坂、

椎原國林稱季、元和五年、八月廿五日、自割於慶府、以殉松齡公

薨法號久山常榮居士、墳墓在穴德寺、又以妙圓寺前第、九石塔、為國林墳、今椎原寺三、即國林子孫也。

島田親宗稱右近、從公子歲久、戰死於瀧水法號江宗道、禪定門、

篠原善內、學劍於東鄉重位、術既通、與伊集院休左衛門伊集院忠、棟部下、較量術、而勝焉、後橫死於府下吉野橋側、舉國謂之休左黨所為、

篠崎九郎左衛門、初不知何許人、以其與伊佐岡因幡有姻之故因幡以女、妻之、始來事我、則召賜之六人扶持云今篠崎藏太左衛門、即此人之裔也。

色紙長光稱善三郎、又金右衛門、又志麻、又對馬、又對馬、又存三郎、又對馬、兼山田島宰、 祖曰重長初稱前田又二、 父曰吉長稱大孫公、又對馬、

長光從 貫明公討大友氏、有功、子長通初稱孫次郎、又、 從軍肥豐、無

男、以同宗長智稱主本左衛門、 子孫左衛門者為養子、名長秀稱六左衛門、 事 慈眼公

今色紙左衛門、即長秀子孫也、

篠原篤次稱大藏助、高祖兵衛三郎傳通、從品山直顯、來居日州清、 事 貫明公子篤明初稱又次郎、好

鬪爭、世人呼為喧嘩新左衛門、一年篤明獻鮮魚於 貫明公於吉田、

因子孫以每年正月二日、獻鮮魚於官云、子篤典稱稱左衛門、 從如朝鮮、某

年篤典有故獻所食世秩於官、至子篤能初稱稱兵衛、又大藤介、 流落為商客數年矣、

寬文十六年、寬陽公命為給事焉今稱原喜左衛門、即篤能子孫也、

神宮司筑前、元和間人、

樋口飛彈、肥後八代人也、其先木曾義仲臣樋口次郎兼任之子孫下居

八代、天正中、平田光宗為八代城宰、是時飛彈來獻計策、由是八代

邊疆盡屬我麾下、其後來事我、慶長三年、十一月、陣亡於朝鮮海上、

廣場重綱稱休、 豐公麾下廣場參河守第二子、而好畜鷹、天正十六年、

松齡公朝京師、而與羽柴美濃守始相識、至翌年春、依美濃守請重綱

於豐公、以為鷹匠、於是重綱始來仕於我、從軍朝鮮及關原、其後居

於柁城、更廣場氏為鈴木氏今子孫在柁城、

平原隼人、天正六年、十一月、戰沒於高城夕麓、

東太郎左衛門、以 松齡公松頭從朝鮮、南海之戰、執鳥銃射殺數十

人、而從歸國、関原之敗、公徧歷艱危、至住吉、與田邊屋道與相

謀、遂往境借船於鹽屋孫右衛門、是時會太郎左衛門自浪華艤舟來迎

公、公乃與左右乘而還國、

門司謙柔齋號安意光元、父曰輝造亦六、豐前人、 初事大内氏、後來仕 松齡公、賜三

百石、而為 慈眼公侍讀、子元正稱安右、 慈眼公親加冠今門司伊兵衛、即、

森乘助、戰沒於肥後、

森與右衛門、慶長五年、陣亡於豐後森江、

森助左衛門、天正六年、戰死於新納院高城々下、

本村筑前、

本村淡治、天正十年、冬、徂救筑後田尻氏、

森岡彌兵衛稱其先不知、 以奧家老、從 公女嫁松山侯稱平陸、岐守、 公女賜之以湯

沐之地祿一百石、遂卒於松山今森岡孫之進、即、

餅原惟稱大、 高祖惟之稱周防、 曾祖惟延、祖惟清稱肥、 父惟興稱兵、 永祿

七年、維稱大、 從 松齡公移居飯野城、從討大友氏、而陣亡、子綱稱厚四、 戰亡於莊内今餅原十郎左衛門、

森重明稱久八郎、廿一世祖大和守家重者、從得、 事 梅岳君有戰功、其孫重昼稱外、 事

慈眼公、及豐臣秀賴據浪華城、命重昼使駿府云今森八右衛門、即、

關主殿介、從上井覺兼居日州宮崎城、後從如朝鮮被細川之棟、 子渡左衛

門、為步卒將、寬永六年、命為小琉球代官今關次郎兵衛、

關治部少、宮崎士也、戰沒於筑前岩屋城、

關備後、事 慈眼公、為柁城納殿役、

関右京亮、上井覺兼部下也、天正十四年、諸將將入豊後、是時使右京亮以下闕、

関屋清右衛門、山田有信部下士也、從成高城、及豊公西下、有信使清右衛門從其子有榮、而往質於羽柴秀長營、

妹尾二介、中書家口部下也、天正六年、耳川之役、家口使二介等遣酒於敵營、至則營將命令飲酒於二介等、酒酣、二介執扇立舞、傍若無人、家口望見於城中、而歎賞之、

末田伴右衛門、從軍関原、軍敗、從而帰國、

須田綱口又初稱善五郎、又内膳、其先佐々木氏支族、父曰佐渡守號家、事伊達政宗、食五邑、後有故浪客於京師、天正中、頼淺野長政、而攜妻子、

俱來事 松齡公、綱口從如関原、及帰國、賜田祿三百石云、其後綱口為白坂義善子、墳墓在關原院、子綱清稱仲左衛門、為 泰清世子傳、

鱸讚右衛門、從死公子歳久肝禮繼嗣云、

鈴木重延稱字云、遠州濱松人、父曰萬右衛門、居見附、兄曰入田刑部

左衛門市藏、遠轉客於他邦、後復事、烈祖、為小納殿、賜祿百石、而後放新段、伴野村甚左衛門者、因去濱松居見附、更稱三河守秀康、賜之祿千八百石、其後賜千二百石、仕於松齡忠貞、其子孫有罪、家滅亡、文祿初、重延始來仕 慈眼公、從軍朝鮮、有功、賞賜田祿三百石、復從莊内、及浪華之役起、命重延等為普請奉行琉球之役、鈴木左衛門率兵、五人赴瑞、蓋重延也、重延有子、曰喜左衛門重張、今鈴木、字左衛門、即其子孫也、

上村九兵衛子孫更上村氏、為藤村氏云、立石五助、永井九兵衛、船木次兵衛、杵山右京、俱來自他邦仕 慈眼公見於諸家、大觀記

壹岐助兵衛、飯田内膳、伊藤大舍人、吐師藤太左衛門、新穂善左衛

門、唐仁原肥前、奥郷右衛門、小島十郎左衛門、金田三河、田實伊豫、高橋右馬允、竹下左近將監、中野右近將監、宗像隱岐守、馬渡勘解由、野添右近將監、野久尾越後、楠元甲斐、松田助次郎、松元勘助、淵脇助九郎、秋永與八兵衛、相德九郎、宮路筑前、神宮司加賀、肥田木丹波守、

右二十六人、永祿七年、從 松齡公、徙居飯野城、

大村治部左衛門人、滿生、柘原右衛門兵衛人、結生、中村内藏介官一士也、天正十一年、九月、藏介及從士、家臣、十餘人至志、翌日内藏介等伏兵、斬敵五人、村岡城之介人、吉田、久留木康辰稱掃部介、天正六年、與赤塚、久木田、田新左衛門人、滿生、久木崎主水人、滿生、築瀬兵部少輔人、兼野、曲田伯耆人、飯肥、前田

豐前人、日州、萬膳仲兵衛原野去、從川上忠堅于島、或云、豐府去、蓋初居高山、後居鷹府、天正六年、大友氏大軍來圍、木野田參河人、不果而戰、湯田掃部兵衛人、重田六郎左衛門人、日州、四位某人、日州、淺江權之助人、飯肥、坂之上南右衛門人、大、赤崎平馬允

右十九人、天正中、松齡公選擇俱每議軍事、

岩松玄蕃從、松、壹岐少左衛門、壹岐主計從、松、石原加藤左衛門從、松、池上善助從、松、市成彌兵衛武親人、井口權兵衛從、松、井之口五郎右衛門從、松、井之上市助從、松、池本木工兵衛從、松、犬童頼香稱式部、從、春

田彌右衛門從、松、春口主水部曲云、新原勘兵衛、西甚十郎從、松、新穂主馬從、松、法亢盛宣稱大郎左衛門、以、法亢右近從、慈眼公、新善之、細山田仲右衛門從、松、邊牟木佐吉從、松、東郷源五郎、床浪善助一作左助、拔木吉右衛門、折田作右衛門、折田七右衛門川内山田人、後、大迫清右衛門從、松、樗木

左近、神崎早右衛門、上村頼續稱式、加治木和泉從、松、龜澤甚右衛門從、松、鹿島久吉從、松、横山長右衛門從、松、横山主水左衛門從、松、竹下九

郎（頭注）、堅一作立、竹松勘右衛門、堅山安右衛門、辻兵右衛門新築大達之日、、辻助

兵衛善戰死、應長三年、十月、長崎六、、築地秀安從松公、、塚田次郎左衛門從松公、、津

留九兵衛從松公、、中村金右衛門、中島盛盛稱孫、從松公、、中島善左衛門、長

田筑後一作筑後、、中野山右衛門、中野甚左衛門從松公、、鳴海與兵衛從松公、、向井五右

衛門以松公道具具職、、野添帶刀為孫、野添氏、、野添太郎左衛門為與木脇祐長、、野添善

兵衛事、松公為既別當、而、、內倉九郎左衛門、宇多彌三右衛門、宇都宮甚兵

衛、宇都宮實宗稱對馬、從松、、薄間野五郎右衛門吉松、是日、間野氏、、楠元右京、久木山龍兵衛、

畑助七以松公、、栗畑五郎兵衛新築大達之日、、楠元右京、久木山龍兵衛、

草道盛長稱勝、、草道藤左衛門、栗原長門稱勝、、釘元重信稱正左衛門、

久保田利助、柘木甚右衛門、藥丸氏兼稱仲、、亦從松、、蓋與氏兼、、按有藥丸

也、築瀬木工左衛門稱松、、築瀬二左衛門、山本六左衛門從松、、山本

帶刀、山路市兵衛、山路種由稱十右衛門、、山之内與右衛門、山上重延

稱小右、山崎勘右衛門、山崎治部左衛門貴明、山崎治部、而從松、、蓋是同人也、

田賴宗稱正右衛門、以後松公之近侍、、前田孫兵衛從松、、前田彌次作與榊山久、

原兵左衛門年、冬、從擊殺江、、牧野則信稱次郎兵衛、、牧田助之丞從松、、牧清

信稱利兵衛、、丸目五右衛門從松、、萬膳賴貞稱源左衛門、、松山才右

衛門從松、、松山久右衛門一作大右衛門、、松山九郎左衛門國人、、益山八右

衛門從松、、福島清右衛門、福島甚作上忠兄、、古河木工兵衛從松、、古田

實秀稱木工兵衛、、藤山藤右衛門、二木清之允、郡山重隆稱六左衛門、、郷田吉

右衛門、是枝伴左衛門、兒玉彌兵衛以孫、、河野與左衛門、海老原

九右衛門、河野重谷稱三左衛門、、寺師宗武稱中左衛門、、木村平太夫、木佐貫四郎左衛門、三浦三左衛門見於山、

才兵衛右典殿、、下島甚左衛門兵賦、、下津佐重尚稱秋實、、宮之原

田善左衛門、瀬之口小左衛門、関主左衛門一作善左衛門、、関主水介一本有

介、寬永中、為殿別當、

末田重秋稱兵衛、、精松源太左衛門、精松與三

三藏、青木左近、坂元彦右衛門被赤船、、神五右衛門、佐藤清左衛

門、赤崎兼信稱兵衛、、赤崎銀右衛門、伊東少五郎部曲交番、、八右衛門

右百三十八人、文祿慶長間、從于朝鮮之役、戰鬪有功、

井口傳藏傳、、奧民部左衛門、竹內實經宮內左衛門、、長倉加

賀左衛門、久富木佐吉、松下忠次稱宗左、、秋永近連稱公、、右七人、戰沒於朝鮮海上、

橋口彦兵衛率兵、、橋本助右衛門率兵、、西股兵部左衛門率兵、、法元仁右

衛門率兵、、宇田弁七率兵、、熊本善兵衛率兵、、色紙九兵衛率兵、、妹尾盛昌

右人々、慶長十四年、從諸將征琉球、

執印河内守、天正間、命為新田祠司、

小野某、肥後隈部人、蓋來歸我、見于南浦文集、

沖長門氏一、號道柄、京極若狹守家臣也、後京極氏請我、使氏一來

帰薩、是時氏一獻鞍於公、至今藏之於官庫云、

藤元丹波、飯野上江死苦也死苦、、木崎原之戰、丹波有忠節、因

賞賜槍及甲冑、田祿若干石、

康嚴、京師七條人、性好彫刻、松齡公召用之、而居道場原松齡、後命刻公木像、而安置于妙圓寺及本誓寺、寬永十年、命與諸士俱屬公子忠朗云、

弓削屋九郎左衛門、泉州境坊人也、關原之敗、公遁至于境、上下皆苦飢、是時九郎潛獻米數斛、公以德之也、其後召下之于柁城、而賜居宅及腰刀、又將賜俸米、九郎辭曰、臣是坊人、不欲俸米、請禁國人鑄錢、使臣獨三州之錢、如是則臣足矣、如其言錢者云柁城、而費多、少私利、於是乎止焉、而請賣鬻琉球、亦許之、則至琉球、而病死按舊記曰、寬永十九年、十二月廿八日、諸人、賀嚴壽之禮于柁城、是時九郎亦奏白刺云、

西藩烈士干城錄卷之三十四

卷之三十五

沙門

歸化

七國諸侯

上原氏

附錄

西藩烈士干城錄

三十五

尾

西藩烈士干城錄卷之三十五

沙門列傳第七十一

萩野三位坊、從 慈眼公戰朝鮮、堀之內久規、稱民部左衛門、姓藤原、文祿二年、癸巳、九月八日、一唯世子薨、久規與平山久續、俱薙髮為解魔法師、名曰眼坊、翌年甲午、二月、出所居羽月邑、廻歷日本六十餘州、而藏三部法華經於每國神佛祠閣、為 世子禱冥福、翌年七月、畢業而還國、供養於小苗代原、至今猶有供養塚、又俗有久規回國日記、

時任義高初稱源三郎、又、源在衛門、父曰義狀初稱源三郎、事 梅岳君有戰功義狀其先源義安第五子河內守義時、

明覺坊、子義信初稱源、亦為解魔法師後改稱明覺坊、子義照、稱越前坊、稱

更良賢院、寬陽公命學兵法於野村善綱今時任慶右衛門、即善綱之子孫也、

長松院盛俊、從死 公子歲久於瀧水、法號權律師盛俊、

中原坊慶隆、父治部卿慶乘、母貴島氏、祖父兵部卿重慶、祖母山田氏、曾祖父下之坊慶玉、曾祖母町田氏、高祖父長慶、長慶之十世祖上總介三浦尚季一作三浦、大夫、從 得佛公始下薩、而海路逢颶風、公命尚季遙禱護摩法於大峯亦是解魔法、師一法、卒而風波平、公至薩、而賞賜日置郡中原邑、因氏焉、貫明公之世、命慶隆去日置徙居覺府、關原敗後、命慶隆副本田助之丞、而使山口直友及井伊直政、至則 東照廟召

而見之、既而直友使與力某氏下薩、慶隆導且報復云、子中將坊慶秀、戰沒於莊內高城、次子良慶坊慶信、以兄戰沒故繼父後、事慈眼公為近侍。至良慶坊慶信安盛、猶為般若院持、後遷後、更稱仲左衛門、今中原仲左衛門、即其子孫也。

中原圓乘院、関原敗後數命使他邦云、

野田越中坊、戰沒於木崎原、

野添慶育坊、事松齡公為納殿役、從伐朝鮮。今野添善之助、即慶育子孫也。

救仁鄉天神坊、飯隈山別當傳朝弟也、慈眼公命居覺府、數從朝江戶、而賜俸米十三石、子里右衛門、為内侍童子、及長為常從。詳末云、今救仁鄉天神坊、即其子孫也。

飯隈山僊光坊、三字姓救仁鄉氏、世々以解魔法師為飯隈山。在百州大、別當職、祈禱之餘、即每從軍、寬永十三年、命仙光坊及川上將監、始董宗門事於志布志邑衙門云、

築瀨勝軍坊、有勤勞於國家、新納忠元肝付兼盛與之褒牒云、

矢野自德院日說、天正中、居京師本能寺、十年、六月二日、明智光秀襲弑織田信長於本能寺、光秀令衆曰、不可殺僧、日說匿鎮守堂、而免難、而流落於京師、以其善鼓琴故、慈眼公召而數鼓之云。今矢野大君衙門、即大君說子孫、也云、

解魔法師淵脇一蹶院、隅州人也、年十八、往羈寓甲州、而冒母氏宇山、稱武邊之介。甲陽軍鑑、武邊之介有說、穴山梅雪部下有微賤而武勇者六人、武邊之介其一人也、居數年而帰國、今隅州踊邑萬膳邸有石塔、里人曰之伊知無都加云。伊知無都加、猶、一蹶院塚、

深山贊真坊、從伐朝鮮、

是枝周防坊快心、其先高望王之六世孫穎娃忠長。稱三、忠長生薩摩六郎第、六郎生忠秀。稱薩摩太郎、第四子、忠秀始采食於薩摩郡是枝、因氏焉、忠秀之

十世孫忠口。即稱太、為解魔法師、改名快秀、稱周防坊、生快心、亦為

解魔法師、兼阿多邑惣職、子大膳坊。秀亦名快、續父為惣職、梅岳君命去

阿多移居加世田、後又移日置、從大中公攻岩劍城、後戰沒於蒲生

松坂、于大膳坊快順、永祿七年、伊東氏來屠大河平城、後三日又來

侵梅木崎、快順與伊集院久春自間道出其不意、敵兵疑其大勢而引

去、天正十四年、九月廿七日、遣快順及長壽院盛淳使京師、是歲

春、遣鎌田刑部使京師、至是刑部有病、故使快順代之云、其後數奉

使於佗邦、多功勞、貫明公以為覺府惣職、於是快順去日置移居覺

府、住持寶泉坊、後又移為富隈坊地頭職、又轉徙會於郡地頭職、子

忠存坊快永、為泊地頭職、寬永二年、命為小琉球代官、子周防坊快

温、寬陽公命還俗、稱喜左衛門、而數從至江都及浪華、島原之

役、先登斬賊二人、寬永十六年、為山川地頭職、明曆二年、公詣

山川正龍寺、快温往謁、公屬倭歌賜之云。即快温子孫也、

是枝存力坊者、大膳坊快秀第二子、天正十三年、騎從貫明公、與

諸將俱入豊後、後為某邑地頭職、而勤事於國分、慶長十八年、移居

柅城、為物奉行、子長左衛門、寬永十一年、命屬公子忠朗、食祿百

三十餘石、今其子孫在柅城云、

須山寶音坊長盛、為松齡公看經坊、從入朝鮮、

鷲頭不動院、事貫明公、公會命適江州、保護多賀大明神而帰

薩、安置之府城前濱崎城。天正七年、己卯、二月六日、神祠落成、伊集院忠輝贈姓名於其碑云、號濱崎山玉臺寺、而

令鷲頭氏知祭事、名不動院、徙居焉今鷲頭主水永樂、其子孫也。而以每年四月中旬日祭祀之、是日 公使同姓子弟代 公拜謁云、

佐竹光明坊義昭、關東佐竹氏支族、初稱次郎、一夜夢軍神摩利支天、告曰、自今而後一切給事我、醒猶在焉、因遂為武者修行補歷諸國、謂之武者修。而至薩、觀 松齡公出軍於豐後、其貌即嘗所夢摩利支天也、次郎大驚曰、此真我主也、因委質焉、次郎素知兵術、公又命川田義朗、以其所傳兵道盡授之次郎、後剃髮為解魔法師、改稱光明坊、

名義昭、其後從伐朝鮮、新寨之戰、公潛命義昭入敵營之暇曰、義昭服所獲明不之、投火藥壺、黑烟掩天、敵兵多燒死、義昭亦死、此時 公望見之於堠樓上、合掌遙拜曰、稻荷大明神出現而入敵營、我必勝矣、此事秘不著于世、今采所聞、以俟後之識者今佐竹源左衛門、即義昭子孫也。

佐竹蓮光院、蓋義昭子、慈眼公嘗遵疾、有鬼魅神之事、因創建摩所稻荷祠、使蓮光院主祭事或曰、招崇義昭靈、以為稻荷祠、未知是否否、○野史曰、神皇會志於城、其後建義昭神祠於城中、以世祭其靈、則可亦謂之神矣、神即人、人乃神、君臣之際、前後異哉。

俊長坊、為人智辨、天正八年、六月上旬、佐多久政率兵至肥後、與越前守謀、使俊長坊使諸所而說利害、自此肥人多屬我者此僧之力也云、

慶頓坊、文祿二年、從 慈眼公伐朝鮮、市來常圓坊、在元和六年田祿籍、

解魔法師南照坊、弘治二年、自京師負岩神像而下薩、於是大中公安置之于東福寺北山上、至今每年命祠之、

先口法印相模坊姓名、住吉松內小野寺、永祿十一年、八月十九日、伊東加賀守率兵至飯野田原邸、結陣營、是時命相模坊與軍事、以功為三山瀨太尾宮座主、

花堂大圓坊、天正六年、二月廿日、松齡公命大圓坊、往擊殺霧峰座主秀澄僧都、

密乘坊、姓相良氏、在元和六年府下田祿籍、

朝元法印、姓救仁鄉氏、其先足利氏之支族洪川滿賴、應永三年、以九州澹臺職而西下、其子滿氏、娶救仁鄉氏、生伊豫守忠綱、忠綱受外祖父之讓、冒救仁鄉氏、忠綱生近江守賴宗、賴宗生朝元子第、、天文中、為飯限山新熊野三所大權現別當職、子孫世々以解魔法師為照信（頭注）（任持）、院本山派、住持、及薩隅日州解魔法師袈裟頭、

賴乘坊、天正八年、從擊肥後久保田千町、有功、後從伐朝鮮、在京坊、為 松齡公御內衆、天正十年、十一月、遣左京坊及荒竹某、引兵乘舟往援田尻氏城主、、至則田尻氏贈左京坊大腰刀一口、荒竹小刀一口、廿八日、二人俱歸八代城、而獻田尻城圖、且曰、城中畜十月之糧、鳥銃火藥亦有畜、雖龍造寺氏之兵來攻不足懼、故辭彼而還來、公聞而然之、

文之和尚名玄昌、日州飯沼郡外浦人、因號南浦、又靈輿、其學出於桂庵和尚、桂庵嘗以副達摩使航海至明、因留居蘇七年、得士藝輔釋、及曹端詳說、而反于薩、始講朱子四書集註、居薩府是也、桂庵性好詩及文、後人編集其詩文、名曰島陰集、及島陰雜著、桂庵門人月清和尙、號宿庵、居日州安國寺、後至京師、為建仁約師寺主、凡二十年、天文二十年二月九日、寂滅於南關西光寺、月清門人一翁大和尚、亦為安國寺住持、後從信宗師、真如堂、又從住東山建仁寺、文祿元年、當祖師由、文之有所作詩文集、名南浦、行於世、野史氏曰、文之詩文集十卷、并書、至今珍貴、大觀寺、手親視之、字畫楷正、頗多好評、是日而寂滅、年八十六、文之即翁之門也、或云、文之嘗受論學於南泉、一洲和尚、而始點四書、二洲蓋一翁之別號、而未詳來由、文之有作詩文集、名南浦、行於世、野史氏曰、文之詩文集十卷、并書、至今珍貴、大觀寺、手親視之、字畫楷正、頗多好評、淺露、蓋捨凡囿而遺珠玉、可惜也、、為國分正興寺住持凡十五年、慶長七年、創建大龍寺於覺府、以文之為開山和尚、初四年、文之在伏水邸、三

月、隨 公駕上高雄、而屬倭歌、閏三月、復從上焉、又屬倭歌、五月、歸國分、五年、關原之敗、黃門秀家遁至薩、幕府使本多佐渡守遣使於我、傳送秀家於上國、於是八年、八月、命文之等、護衛黃門而至伏水、元和六年、九月晦日、寂滅、年六十六、墳墓在柅城

安國寺或云、慶長二十年、閏六月、文之書其神稿、後曰、時年六十六、是茲改元和一舉之玄頓西堂和尙、日州郡城人、姓中島氏、天正七年、生、及長出家、為文之神人、元和六年、嗣文之為大龍寺住持、正保四年、六月廿九日、寂滅、年六十九、墳墓在國分、正興寺

日秀上人、真言僧也、天文中、國分正八幡祠為賊所燒、永祿三年、大中公新建焉、乃命日秀為住持、後 貫明公使日秀禱國家興隆、日秀以為尋常禱之、必無益於事、乃請建三光院于朝日村在日當、而築石室于其後、於是天正三年、乙亥、十二月八日、日秀修秘密法、而入

定焉、遺言建靈塔于其上、刻定室二字云按三光院、緣起、公得出師于慶後、而日秀修此法之業、有三州之地、德政以治民、曾不知鄉在公先政刑矣、而謂為之乎、況乎因入定云、○野史氏曰、公受祖先之所謂、使無罪者而從就死地也、當時曲學好事者之記、大率多類此、蓋以不止之心、度仁賢也、

俊盛法印、為莊嚴寺在伊集七世住持、大中公數召之慶府、而命以祈禱之事、天文中、命俊盛創建大乘院今院地、弘治二年、復命移建之於清水城麓即今七乘、院是也、永祿九年、三月十一日、死、墳墓在大乘院談議廳門前云、

代賢和尚、名守仲、為福昌寺十八世住持永祿四年、十、勅曰佛光普照禪師、天正六年、耳川之捷、遣代賢往行施餓鬼今藏之喜入玉聖寺云、至、十二月十五日、寂滅於福昌寺、年七十時人呼為壽、生釋迦云、

藤堂和尚、繼代賢為福昌寺主僧（頭注）主僧也、天正十二年、島原之捷、遣藤堂往行施餓鬼、

有印上人、水引人、俗姓永田氏、為泰平寺主僧在水引、日醫王山、自中興、至有印、為三世、主僧、為人

穎敏剛毅、好儒學、及豐公至川內、結營貓嶽、燒盡村落、屠戮人民、勢如破竹、將結營於泰平寺、乃遣使告於有印曰、汝須早退寺、不則當必逮汝身、有印對曰、寡君辱命貧道為任職、則當與寺同存亡、縱喪元不肯退一步、豐公聽焉、而壯之、乃厚禮昇辭、改告曰、孤大軍深入、而無結陣之地、聞境內廣大、可以容孤衆、請師姑退寺、有印對曰、諾、雖然、貧道恐人々嘲議、吾懼兵戈而遁逃寺、願殿下命貧道以退去之地、乃命遷之宅滿寺在寺、於是日秀每朝到泰平寺、拜禮諸佛、往來無所懼、豐公稱之為良僧、及 公謁豐公於泰平寺、豐公召有印、且告之曰、恣師之所求、而報借地之恩、有印曰、國破主辱、貧道何求之有、固辭不受、

豪契法印、肥後阿蘇人、俗姓侘摩氏、父曰豐前割髮處、豪契出家住集慶寺在肥、及我出師於豐後、豪契與父俱屬伊集院久信等相親忠元、數有戰功、及豐公西下、聞豪契父子與俱運籌策、使薩兵遂歸國、則捕豪契、責其罪、下之獄七日、而後得被赦、其後豪契來薩、松齡公命曰、師宜還俗、則賜以田祿一千石、豪契固辭、乃賜六十石、而住山內寺在野田、號曰龜山、天台宗也、至、今世人以龜山為山內寺與龜山云、而以其近敵境故、以鳥銃及槍弓鞍藏之寺庫、而為臨事之資按伊集院久信日記、山內寺住持豪契戰肥豐、捷、既來原山內寺、俟再考、

其阿上人、新納久友第三男也久友稱開防守、新納三世宗室忠臣第、子四郎三部忠實、忠實之子、出家為肝付道場住持、後徙居淨光明寺、自開山至、天正二年、我出討肝付伊地知二氏、進陷牛根城、既而遣其阿說肝付氏、而降我、其功不少、運譽道白上人、肥前人、初為法然寺在肥前、高木、僧、天正十二年、至肥後、因新納旅菴、寓居莊嚴寺在八、十三年、始謁 松齡公於甲斐宗運家、乃命為住吉光明寺在忠志、住持、十五年、至飯野、十六年、至柅城、為

本誓寺開山、十八年、至栗野、創建願成寺後建、統、文祿二年、詣京師、拜受 綸旨、而歸柁城、慶長十三年、去居善道寺後任、統、凡三年、而歸柁城、寬永三年、正月、寂滅於本誓寺有上人自記、行於世、

鳳山明彩和尚山川人臨濟僧也、初云釣人明藏主、居鶴田大願寺、從 松齡公伐朝鮮、有勤勞、賞賜秩三十石、後為柁城椿窗寺開山、

清譽上人、京師人、兄曰進藤筑後守、清譽好國雅、而居不斷光院近衛公、梅岳寺、近衛公數遣清譽使 梅岳君及 大中公、至永祿五年、公請近衛公、遂召清譽於薩、而創建寺、亦名曰不斷光院、附與田祿若干石、後有故没収焉、其後 松齡公復附與田祿若干石云、

東堂正岳一作松和尚、為柁城吉祥寺開山、而為 松齡公所寵、至公赴朝鮮、請 貫明公、將以正岳從軍、然是時 公既命龍雲和尚大慈鳳山和尚大禪、以從軍、因不果、乃以正岳留吉祥寺、誦法華經一萬部、以禱國家隆興、及 公班師、正岳又誦三千部、以禱子孫振々云、

專秀坊專作、仙、真言僧也、游學京師、寓居大佛寺、關原之敗也、專秀往在大坂邸、而誑城吏、出夫人及侍婢於城中、其功偉、事詳于他記、因略之於此、

僧慶吞、從朝鮮、

松本寺僧□□、亦從如朝鮮、

雪溪和尚阿久根人、俗姓有馬氏、俗、為長壽寺在阿久根、日蓋前山、住僧自開山至雪溪、在僧十六世雪溪、為人溫雅勇義、島津義虎師事之、前此義虎與渋谷黨戰鬪日不息、弘治三年、要雪溪行求和、雪溪曰、爭戰馴致以至於今日、和難猝成、不如不行之勝也、

義虎不可、雪溪曰、和如不成、我則必死四字左、行說焉、和遂不果(頭注)遂不果立說成、渋谷黨伏兵要擊之於路、雪溪勵從者、遂戰沒於深泊阿久根、在、臨死屬倭歌曰、宇都比禿毛・宇多留々比禿毛・毛呂禿毛爾、如露亦如電・應作如是觀、フウサヨセクム

龍雲和尚父日新納忠澄、忠澄父日安警守忠行、天文十年、九月三、日、忠行戰沒於山東、忠行即新納氏宗室久友次子也、自幼出家、師南化和尚、而居京師、後從南化至甲州、及南化還京師、託龍雲於惠林寺快川和尚、龍雲居惠林寺凡廿年、及織田信長燒惠林寺之時、快川與龍雲符驗、以故出圍而歸薩、為大慈寺在日州志、布志住持、從赴肥豐及朝鮮、又命至琉球、責其不貢、既而復從諸將征琉球龍雲年七人、龍雲年七人、後 慈眼公枉駕於大慈寺、而作倭歌、龍雲賦詩和之轉結曰、獨立亭々松樹、一咏和皆難、其後去寺至京師、遂寂滅妙心寺、

天室和尚、為人勇武、初事伊東氏、數有名譽、後來歸我、而竭力國家、以故 貫明公從其所請、而居諸深年地名、在日州、在、慶長五年稻津掃部誘民作亂、數侵八代、是時天室謂邑宰相良日向曰、八代城不險、不可以拒賊、不如去之佐土原、據東長寺古城、日向曰、不可、彼地乃高橋氏所領、天室笑曰、夫人有封土、欲必制民之產、而省其耕斂、以補其不足也、今往據彼、非侵奪民財、且高橋氏素與我相識、他日如遣一介、陳謝我不告而據彼、固見迫賊而出不得止之策、則何不可之有、日向曰、然、乃徒兵行據東長寺、及賊來攻、天室執鐮而伏八代堂側谷中、猝出斬賊二人、傷一人、是時援兵競來擊破賊屯、賊兵遁去、是歲置高岡邑為一外城、而創建龍福寺、以天室為開山、

光嚴上人、為白鳥山在飯野、在飯野住僧自開山至光嚴、在僧十六世云、木崎原之戰、伊東氏兵遁登白鳥山、光嚴率門前者屬寺院地小民、此云門前者、及諸浪客三百餘人、皆持竹槍及鉤

鎌、建紙旗、大呼下山、敵兵不能登、復引反於木崎原、遂大敗走、寬永六年、五月廿九日、寂滅、

快斜法印、初居菱刈、天正六年、七月、貫明公命為霧島山座主、

賴長、初居和州長池小池坊、關原之敗、公道經和州而帰、是時賴

長來謁而為鄉導、其後來帰薩、因命為般若寺城住僧、至慶長十九年、徙住花林寺峯、

久道、為不動寺任加久住持住持七世云云、元龜三年、伊東氏兵來侵加久藤、

而屯小田瀬、是時久道藏短鳥銃於袖中、近敵將米良筑後、而射殺之、敵兵周章遂引去一説曰、久道在不動寺中、執火銃鎗子鳥銃、

光明寺和尚某政云、按別記、朝鮮之後、有光明院者從焉、蓋光明寺、和商人也、又云、光明乃連譽人別號、未知何是、、天正二年、八月、將之肝付、來告宦曰以下闕、

天叟和尚、居琉球大僧錄司圓學精廬、慶長十四年、春、我有事於琉

球、翌年夏、和尚始來帰我、既而往在大坂、為豐氏所遇、及將行、厚餽之贖、既而來覺府、遂去反乎琉球、

沙彌與進俗稱平田、慶長間、好和歌及書、

瞽僧俗云地神座頭、又俗云地神座頭、、了公、崇天台教、而尊信妙音菩薩之法、手彈琵琶之妙曲、口誦地神經、專禱天下泰平、國土安隱、天文二年、桑波田孫

六叛、梅岳君命了公、往間南鄉城縣所、以瞽僧之故、賊不知其為間也是時賊使了公誦經、而唱悲、、三月廿九日、孫六出獵、了公潛報之、君則急進

軍攻陷之、因賞其功、賜宅地於伊作高橋、命為田布施加世田諸邑瞽僧長、

按記、

桓武帝之時、有五蛇之妖怪、於是 勅召瞽僧八人於筑前、曰今樣、

曰袈裟、曰大栗、曰大行司、曰満市、曰満玉、曰満虚、曰山口、因命禱妖怪、則不日而消滅、瞽僧禱國家安康、盖自此八人始也、

又按満市此云満以其法傳之瞽僧某、至十八世瞽僧實山檢校、從得佛公始下薩、檢校以是傳之瞽僧凡十二世、而至常慶院、常慶院以

是傳之淵脇壽長院、壽長院事梅岳君有功、壽長院以是傳之家村大

光院或云、按瞽僧之祖師某、比叡山之末流、而尊崇天台之教、詣山中志願尾觀音寺、而任官、後有故失巨、其後瞽僧檢校從

得佛公下薩、而禱國家安康、武備之命也、既而命檢校居伊作小野村中島、自此世々瞽僧相續至淵脇壽長院、事梅岳君、聞而郷城、有勳勞、據之、則入常樂院也、又按家村氏遺記云、了公初稱家村大光院重實、居伊作、其六世孫曰家村彦左衛門云、又曰、了公死葬伊作尻村、創建一寺、名曰了公、今改興國、了公石塔猶存云、又曰、家村大光院與淵脇壽長院俱事大中公、而禱國家興隆、且謙敬、公賞其功、命為三州地神座頭、公以書以證之云、其後及、貫明公有事於薩、其先居伊作、又按家村右衛門家譜、梅岳君命大光院為三州地神座頭、又家村彦左衛門家譜云、家村大光院重實、姓平、其先居伊州小坂郡家村邑、因氏焉、其子孫來薩、重實以瞽僧伊作田尻村、事大中公、為瞽僧頭領、子壹岐重隆、又命創建建禰宮、而以二年、從 慈眼公伐、朝鮮、後為納殿役、其後重治次女孀嫁掖庭、而生中公女二人、因命重治從居覺府云、

大光院傳

之長倉常德院元和五年八月、慈眼公召常德院伊作、移居覺府、賜宅地及孔番明王畫像、又命創建建禰宮、而以、常樂院傳常德院為僧中興開山、或云、初常德院居覺城南、地藏堂、公村某居間、其後火難、移居城南荒田、

之長友明秀院、其後瞽僧世々相傳至今常樂院云、

按上世瞽僧淨破者、自佗邦來居薩州穎娃邑、其末流亦今猶存云、

瞽僧信清、與寶山檢校俱來居薩州高尾野邑、末流今猶存云、

邦有平家法師一作平家、嘗聞

後鳥羽帝之時、信濃前司行長老通世、居叡山門主慈鎮和尚所、始撰平家物語、而使瞽者生佛暗誦之、是其始也云、而與俗所謂地神座頭異也、

瞽僧三德院真成幼名菊、地神三寶院任加久第二世物督也、松齡公改三寶

院為三德院、而為真幸五邑瞽僧督、其後又命為日州十三邑惣督、永祿天正間、真成數間敵境、有奇功云、

歸化列傳第七十二

汾陽理心、姓郭、西土汾陽人也、其先唐郭子儀周文季子儀、封于冀、成曰郭、四以爲氏、郭子儀其裔也、郭、封汾陽王、子孫因世居焉、理心初名國安、字光禹、年二十三、將赴科場、道聞其既畢、適會海商將開船至日本、國安以爲既後科場期、不如留蹤於異域、於是乃請乘船而至坊津禮讓、時永祿二年、己未三十一、之歲也、既而 貫明公聞其爲儒生、則使召焉、國安遂委質、更曰汾陽理心、文祿元年、我將有事於朝鮮、命理心及大慈寺龍雲和尚爲書記、慶長三年、戊戌、松齡公在朝鮮、使理心詐遣明將書、約曰、吾焚糧以應天兵、天兵大舉當拔新寨、明將信之、渡江而駐江南、十月初一日、明兵遂敗績於新寨、理心之力也、

按武備志、倭臨江固守、勢如長蛇、茅國器曰、觀其形勢、以望津爲首、首碎則立破矣、然晉江不可飛渡、當以計得之野史氏曰、慶長年、十二、萬曆三年、六月二十日、明師二十萬望津、寺山久兼善二百餘人、臨機、邏騎得一麗婦自倭營來、懷二古、用之中出一紙署、曰、此婦將度異域、吾憐而贖之、天兵弗害也、未曰、

知吾姓者、令公之後、埋兒之父、問吾名者、有或之口、無才之按、國器贊畫諸葛繡解曰、此郭國安也、以語參謀史世用、世用躍然曰、郭國安華人也、往與共在日本、誓自効於本朝、今在茲、可以問矣野史氏曰、國安既實於我、今用隱語而語我、後日、可以開矣、察自輕重也、、乃謀詞之、

知□□尚在泗川、主望津營者國安也、乃遺書約之、於九月二十日、伏火屯聚、俟我師渡、焚糧以應之、至期如所約、遂大勝、奪其營野史氏曰、先是、公道使謂久兼曰、汝以寡能禦衆、而勢危、宜亟引退、是時、公方獲新寨、久兼報曰、願公無憂、臣以是思、其所以爲國安、公則宜早圖策、臣如還師、敵即渡、且夕至新寨、至九月、公道遣使曰、兼已歸、汝引還、是、

先入失道陷沒、我兵及為所乘、及曉我兵四集、倭奔敗、遂斬獲數百、倭棄城奔新寨、乃燒其東陽倉師營、及明兵至望津、賊報曰、乘軍不敵、宜早退、於是、公道使使急退、於是十八日、稍息等乘船而過新寨、二十九日、議取新寨、即□□所

居也、國器曰、倭雖敗、而士尚衆、併歸大營、其守必力、攻之不

下、而援兵四集、往事可鑒也、不若先攻固城、倭方挫、未敢出救、固城拔、則新寨援絕、此長策也、一元狃于屢勝、掀髯曰、疾雷不掩耳、寨將不戰而下矣、遂進師、城幾壞、而木槓破、藥煙障目、倭遂乘之、我兵大敗奔潰野史氏曰、是戰也、我勝倭、而攻之目下、及戰、則公道謂、營諸將、巨砲聲、砲火、砲飛激里、明兵藥器盡、遂潰、余聞父老之言曰、是戰也、敵深、

掩耳、寨將不戰而下矣、遂進師、城幾壞、而木槓破、藥煙障目、倭遂乘之、我兵大敗奔潰野史氏曰、是戰也、我勝倭、而攻之目下、及戰、則公道謂、營諸將、巨砲聲、砲火、砲飛激里、明兵藥器盡、遂潰、余聞父老之言曰、是戰也、敵深、

守望津、而諸將已不能軍野史氏曰、是戰也、我勝倭、而攻之目下、及戰、則公道謂、營諸將、巨砲聲、砲火、砲飛激里、明兵藥器盡、遂潰、余聞父老之言曰、是戰也、敵深、

臨政、以恤士民、是役也、知勇兼備者八九十人、民將上同意、雖有危難、而不畏懼也、而彼主將乃執袴乳臭、非將略之器、沉乎南

北混兵無紀律、彼惡能制我死命哉一作余負是、、彼進擊我故館、守將賴豐等違我節度、而敗死、法曰、違律者必殺、則不足惜也、若又推之、則是為我死間、以致彼於我大營也、彼乃曰、天兵不旬日戰屢

克、乃共議進取、曰、先攻新寨、寨將不戰自潰矣、多見其不知量也、乃以烏合羸老不欲戰之衆、而凌虐我飽逸久據險之師、遂潰奔、忍餒扶傷、晝伏夜行、盤桓萬山中數百里之間、哭聲震野、直奔回星州、嗚呼、堂々大邦、任驍勇奮禍之將、而三軍暴骨於異域、雖非吾臭味、亦可哀也哉、

既而 公謂理心曰、吾用子間、戰勝克敵、因賞賜田祿五百石、其後明人至日本、猶說郭國安嘗通志於明、於是 大府命我糾察其真偽、辭而辨之、事始瞭焉、理心明嘉靖十六年日本天文、丁酉之歲、生、寬永十六年明崇禎、己卯、四月九日、卒、年七十一、法號仁濟義安庵主、墓在興國寺、越十三日、家臣橫山豐前殉死法號通孝良口大、理心二子、長曰永左衛門某、早卒、次曰正右衛門光昌、慈眼公親加冠、寬永十四年、從諸將戰島原、有功今汾陽理心孫也、

野史氏曰、世必有非常之人、然後有非常之功、有人於此云、知吾姓者、令公之後、埋兒之父、問吾名者、有哉之口、無才之按、此人也、發憤於科場、留蹤於異域、尽忠於殊遇、揚名於後世、蓋亦偉人也哉、客問曰用間之說、可得聞乎、余對曰、法曰、用間人君之寶也、鄉間者、因其鄉人而用之、反間者、因其敵間而用之、夫我以理心為鄉間、則彼乃曰、可以間矣、我則又以為反間也、反間復為生間、生間者反報也、反報也者、通我事於彼、而反報彼情於我也、我善用之、而彼不覺、遂為我所敗也、宜矣哉、伊誰之力耶、曰理心、理心不得專其功、則歸之公、故曰、用間人君之寶也、

江夏友賢、姓黃、西土江夏人、世々治易經、友賢避亂來日本、而居京師、以說易入見

天子、賜之以著、後來仕我、天正十年、從于八代之役、十二月廿二日、命友賢卜安富左兵衛還有馬之事記實言、十一年、十二月廿二日、命友賢卜國家大事記實言、後從朝鮮之役、既而反于薩、及慈眼公將誅伊集院忠棟於伏水邸、竊遣帖佐宗光歸薩、而命友賢易卜、以定吉凶、其後又命友賢經始覺城及柁城、慶長十五年、七月廿三日、卒於柁城、葬實窗寺、法號黃翁環溪先生、子曰二閑、孫曰自德、今江夏仲右衛門即其子孫也云、

按古老物語、松齡公在帖佐時、軍務之餘日、命左右講大學於願成寺、而使士大夫之子弟受其業、公亦每親臨焉、一日有販鹽褐夫、置鹽畚於堂前、伏聽於階下、講了、則仰曰、講說不是、左右叱曰、鄙夫不畏公威邪、何言之狂妄、不速去、鞭撻汝、公見而奇之、令問焉、曰、汝為誰、何許人、對曰、臣名友賢、本華人、祖先嘗為江夏太守、因居焉、向避亂來本邦、居京師、京師亦

亂、於是來寓於此、固無居室、以販鹽為業、又問焉、曰、汝能讀大學邪、則須講說之、乃請紙筆而記獻之、左右皆大駭、

芳仲、朝鮮人、善陶、松齡公班師之日、以歸、而居之柁城、以為陶師、

星山仲次金海、朝鮮星山人、公班師之日、以其善陶故、以而歸國、賜之大小刀、居帖佐、後適中國、學瀨戶燒山崎夾水白瀬戶、所謂燒也、而備瀨戶燒州之峽民姓々善陶、俗此云燒、茗壺盒此云茶入諸器於峽民、既反而弟子益衆、因賞賜田祿三十石、其後從遷柁城、至慈眼公之世、徙居覺府、賜俸米十五石云門今星山仲右衛門、即仲二子孫也、

小川某、朝鮮人、及我班師之日、從而至薩、命居柁城、稱市右衛門、善養蠶云、

高樋三官、明人、姓許氏、避亂來事我、屢命獻藥於東照廟云三官蓋藥師、今絶矣、按元和六年田中、稱有高樋許三官者、蓋同人也、

田原萬助、朝鮮人、善陶、公班師之日、以萬助帰、居之於市來邑、後命移居覺府、以為陶師今田原次郎左衛門、即萬助之子孫也、

安岡為足、明人也、來歸我、而業醫、

前川為僊、朝鮮人也、以醫帰我、而居柁城、兼任讀云、

江川三官、明人也、自幼業醫、避亂航海而至薩、因居焉、寬陽公在江戶也、足疾發、於是召三官于薩、而療疾、凡五年、既而得瘵、因賞之以月俸五人賦說在別、記、又別賜歲俸二十五石云今江川右衛門、即三官子孫也、

平城一官、明人也、航海來仕我、而終身被明服云、寬永十七年、從

寬陽公至江都今平城休左衛門、即一官子孫也、

七國諸侯列傳第七十三

日向一

大膳大夫義祐初名祐、清、姓藤原、氏伊東、別號三位入道一本法號、可水、五世祖大和守氏祐、建武四年、始下九州、居日州邊陲、氏祐生大和守祐武、祐武生大和守祐堯、祐堯攻亡佐土原・三宅・富岡・平田等十二頭領、并食其地、兵威自此日隆月盛、祐堯生大和守祐國、文明十七年、六月下浣一之日、寇圓室公、敗沒於飢肥、祐國生大和守尹祐、尹祐以父讐故、數寇我日州邊境、尹祐二男、長六郎祐光祐光妻北條忠時故也、早卒、次即義祐也、義祐嗣父後、居佐土原城、而并吞川南・川北去川以南、此川南、以北、此川北・及三股・高城・山之口・勝岡・梶山・下之城・松尾・小山之數城相所領、有精甲一萬六千人、而以其半八千人與北鄉忠相構兵、大永三年、十一月、義祐襲野々美谷城忠相所領、而有之、享祿元年、五月、敗新納忠勝於中鄉冷水、逐至梅北城、斬首七百三十有餘人、天文元年、十一月、島津忠朝・及北鄉忠相・及北原兼守合兵襲高城、義祐之將八代長門幸高城・及稻津某・落合某幸高城・海江田某幸高城・米良某幸野美谷幸・長倉某・海老原某幸高城・福永某幸下之城・宮崎某・宮永某幸高城・邨山某・川崎某幸高城・等以下三百八十餘人敗死、二年、三月、義祐與島津忠朝戰於三股、敗走、三年、閏正月、義祐所置高城宰落合刑部、兼任、以城降北鄉忠相、梶山・勝岡・山之口三城皆不戰而去、盡為忠相所復、六年、四月二日、義祐叙從五位下、十年、六月、義祐軍鳥越、圍高城、敗走、是年、家長倉上總反應島津忠廣、忠廣進入穆佐、義祐大敗之、自此忠廣義祐數構兵、十一年、八

月、合北原兼守、與北鄉忠相戰於小山河原、敗走、是時忠相復野々美谷、是年入飢肥、圍鶴戶山砦、翌年三月、遂陷之、八月廿四日、義祐任大膳大夫、十四年、正月、復入飢肥、二月、陷岡城、鄉之原城不戰而遁、十五年、三月三日、義祐叙從三位、剃髮號三位入道、十八年、四月、與島津忠廣戰於業每辻、敗績、喪四百餘人、廿年、數與島津忠廣戰飢肥境、義祐常有吞我三州之志、至廿一年、創建金栢寺、而刻所懸鐘曰、日本國日向田島莊昭珪山金栢寺、天文廿有一年、壬子、八月廿日、成就之、日隅薩三州太守藤原義祐朝臣、前總持永平直翁昭眼大和尚、凡五十六字、我軍聞而大笑之、弘治元年、九月、義祐發戰艦、侵我日州目井浦、永祿元年、六月、復侵飢肥、十一月、陷新山城、三年、合肝付省鈞、侵福島島津忠廣所領、五年、二月、大舉復入飢肥、五月、陷飢肥城、城主島津忠親退保福島、九月、忠親復飢肥・及酒谷新山二城、是年北原兼守死、無嗣、義祐遂并其地三山、高原、高崎等數邑、八年、五月、義祐復陷新山城、九年、十月、我覺府兵圍義祐所領三山城、十一年、合肝付省鈞、夾攻飢肥福島、六月、陷飢肥、忠親復保福島、進又圍之、七月、陷之、忠親遂奔都城、於是義祐去佐土原城、移居飢肥城、十二年、遣兵飯野陣田原、而伺我飯野城、七月、長子義益卒、因命退田原、元龜三年、五月、遣兵襲我加久藤城、我軍擊大敗之於木崎原、斬義祐弟加賀守祐安以下數百人、天正四年、八月、我兵圍高原城、假城宰伊東勘解由覺兼日記云、城主伊東新次郎勘解由乞降、於是高崎・三山・內木場・岩牟禮・須木・須師原・奈崎・七城皆降、五年、十二月七日、野尻城宰福永丹波反義祐降我、內山城宰野村備中亦降、翌日戶崎城陷、我兵進入紙屋、燒竹田坊、又燒佐土原城下坊、陷富田城、義祐境內日蹙、遂出佐土原、奔財部十一月、城宰野村肥前拒不入、遂奔穗北、賴城宰長倉勘解由左衛門、是時妻子從

兵僅八人耳、又踰高知尾山、犇豐後、賴大友宗麟、宗麟界之梅川後重

之地方三十町、而居焉、既而家臣伊東大炊介木脇越前・別府狩野介・長倉勘解由左衛門等議欲使義祐復歸日州、而越前狩野為我兵所殺、大炊勘解由俱議聚散兵二百餘人、據石城、乞援兵於豐後、六年、九月、我兵圍石城、勘解由等乞降、犇豐後、十月、大友宗麟父子為義祐起衆六萬餘人、入日州、我軍大敗之於耳川、自此大友氏兵威日衰、義祐又去至土佐、賴一條氏、其後至泉州境、謁豐公、豐公賜之俸祿一百石、既而又賜三百石、命從軍討四國、及豐公西下之日、義祐從焉、而賜之宮崎一郡、為飢肥城主、義祐二男、長左京大夫義益、次豐後守祐兵初稱民部、少輔、永祿十二年、義益有事往祈宮崎稻荷祠、齋居凡七日、七月十一日、暴死於祠中、年四十、義益娶土佐一條權中納言兼定卿女、生二子、長小吉慶辰永祿六年、生、次二郎某義祐十一、俱為叔父祐兵所殺、初兄弟從祖父義祐去日州、後復從歸飢肥、是時伊東大炊介等之故老以其適孫故、議將立慶辰、祐兵不樂、及赴朝鮮之役、遂殺兄弟於壹岐島、又殺大炊介等於飢肥云、於是祐兵遂續父後、初豐公西下之日、封祐兵飢肥會井清武、慶長五年、十月、家臣稻津掃部祐信讀武地、是時高橋氏領之作亂、侵我穆佐、陷宮崎城、我兵擊敗之、十一月十一日、祐兵卒、年六十、子修理大夫祐慶初稱左、京亮、嗣立、七年、祐慶殺稻津祐信父子三人、謝罪於我、祐慶與北鄉氏爭論日州牛峠之地數年、至寬永十一年、十二月、北鄉氏以薨府命、遂與牛峠地於祐慶、其後慶長、十祐慶復乞槻河內・板屋河內之地於我、以欲為己有、不許、

土持親成、日州三城主也、來歸我、自有傳、

肥後二

修理大夫相良義陽、初名賴房、世々領肥後求摩葦北二郡義陽其先大藏冠藤足公信實、時信第子惟經、惟經之孫石室大夫顯賴、始領遠和相良、因氏稱、顯賴、之四世孫相賴、相賴會幕府、居相良而封肥後求摩、建久九年、始下居焉、十世兵庫允實長、黨伊東氏等、數寇我之館世、公、其子近江守前續、亦來寇我之館世、公、至為續之世為未續知為誰、文明中、與大口城主島津出羽守忠明明應八年、始為大口城主、平泉城主島津伯耆守豐久、戰鬪數矣、後遂和、借其兵勢掠鹵八代郡、後又黨菱刈氏、寇我大口邊境云、永祿中、菱刈隆秋叛、大中公、賴房援隆秋、俱守大口城、數與我軍戰、十二年、九月、二人力屈乞和、遂退去求麻、元龜中、賴房應伊東氏、伺我真幸院、天正四年、八月、貫明公自將陷高原城、而入飯野城、九月二日、賴房遣使僧獻甲冑覽兼日、六年、大友氏入我日州、賴房與阿蘇氏謀、將襲我大口城、城宰新納忠元善守、遂不能勝、是年賴房改名義陽一作義照、又義日、八年、五月、新納忠元襲取寶河內城河內將義田信隆、高橋繁、河內所守、岩牟禮砦・釘野營亦陷、九年、八月、我兵大舉入葦北郡、進圍水股城河內宮之原、藤助所守、日夜防戰、城殆陷、義陽欲援之、而力不能、九月廿日、獻水股・津奈木・湯浦・佐敷・一瀬・久田見・日名子・田七城、且質二子、乞降、許之、於是義陽至佐敷、謁公謝罪、請公親手加冠於長子、且賜諱字、公因加冠於長子、賜忠字名忠房、稱四郎太郎、而與弟長壽、俱遣置櫻島、十二月、義陽自將二百餘人屯響原、侵阿蘇氏所領甲佐堅志田、御船城主甲斐宗運之子親泰襲敗之、義陽遂戰沒、義陽二男、長四郎太郎忠房、次左兵衛佐長每初稱長義、四郎太郎、及義陽死、求麻擾亂、初忠房叔父相良大膳亮者、與義陽不和、來居飯野、而乘此弊、進入上求麻、忠房乞援兵於我、於是遣新納忠元、將兵至八代、後松齡公遣使說召大膳、而居飯野、其後忠房與諸老臣議、獻八代・榎脇・關・谷山・高塚・五城於我、天正十一年、我兵至肥前、忠房使簞田

平馬助、將兵從焉、平馬戰沒、十二年、復發兵、從我軍於島原、十四年、征筑紫、忠房復將軍從焉、其後卒、長每嗣立、十五年、京軍西下、長每援我、將兵馳至紙屋、則聞前十七日、我軍敗於目白坂、於是廿一日、引還求麻、六月、豐公封長每求麻葦北二郡如舊、

越前守城親政政前一作中、親、或作親賢、祖父曰入道一一作一、親政以熊本城主屬大友氏、天正六年、叛大友氏、掠鹵飽田・詫摩・川尻、宗麟令肥後兵討之、十二月、親政乞援於我、貫明公乃遣兵援之、天正十四年、二月、遣使者於覺府、賀歲首之儀、親政二男、長右京亮久基、次親基、

伯耆守伯耆顯孝一作孝高、又作、宇土左衛門尉、宇土城主也、及我兵至熊本、顯孝來乞降、天正八年、十二月、我封顯孝神浦・綱田・方三百町、

天草太郎左衛門尉、以天草城主屬相良氏、天正二年、九月廿八日、遣來迎寺至覺府、獻腰刀・及厚板二端・馬代三百疋於 貫明公、告曰文開、四年、八月卅日、貫明公在飯野城、是時太郎左衛門遣使傳問安否、

豐前守志岐鎮經、剃髮號麟泉、志岐城主也、而與島津義虎有緣、義虎說鎮經屬我、自此義虎又說天艸・大矢野・上津浦・栖本屬我、於是島衆五人天草・志岐、大矢野・上津浦、樞本、依此云島衆五人、遂來出水、由義虎降我、鎮經自有傳年天正十二、月、

大矢野弥太郎、大矢野城主也按九州地圖、、天正十年、十二月廿二日、來八代、謁 松齡公、

上津浦某、上津浦城主也按九州地圖、志岐、、屬我、

栖本某、栖本城主也按地圖、志岐、、屬我、

甲斐民部、剃髮號宗運、以美船一作美三船、、城主屬阿蘇氏、天正十年文開、宗運三男、長三河守、次相模守親乘、次林越前守、而三河越前為父分出奔於肥前、親乘續父後、天正十三年、八月、親乘發阿蘇八千町兵、攻陷我花山城、越閏八月、我大兵入肥後、陷甲佐堅志田二城、十四日、夜、親乘捨美船城、而遁去、我軍擊親乘兵於隈莊城下、斬獲二百餘人、此日越前來在我軍中、因命見其首、則有限莊役人甲斐治部甲斐帶刀者首云覺、

中邨一太夫、以矢崎城主屬阿蘇氏、城親政屬我之日、與中邨二太夫、俱發兵斷我兵通路、天正八年、十月十五日、我軍圍矢崎城、一太夫自割、城陷、

中邨二太夫、以綱田一作青田城主屬阿蘇氏、我軍攻陷矢崎城、進圍綱田城、二太夫乞和、捨城遁去阿蘇、

合志藏人親重、父曰宣頓、合志城主也、天正八年、十一月廿一日、我兵入合志、進燒久保田千町、親重將大津山越前一作大津瀨、將四千餘人迎戰、越前以下一百三十餘人皆被殺、十二年、九月、松齡公軍吉松、親重乞降、九月廿七日、來謁 公、十三年、九月、我聞親重潛謀叛、命下城、越五日、親重下城、我置之小山村一作小野、、其後又移置菱刈羽月山中云按猿渡掃部兵衛系譜云、掃部羽月地頭之日、天正十五年、口月廿五日、肥後亡人合志某、及後川加賀、餘皆誤、三義、

但馬守隈部親泰、隈部城主也、天正十二年、九月廿一日、賴城入道一一作一要乞降於我、以弟某及家老木場某為質、十月朔、自來謁 松齡公

於吉松、而獻甲冑、

宇動左衛門尉、山鹿城主也、天正十二年、八月、降我、

備中守^{一作安房守}赤星宗家^{一作統}、以割府^{一作菊地}城主屬龍造寺隆信、天正九年、隆

信殺其婿蒲地右衛門、由是宗家恨隆信、隆信知之、殺宗家所置質子

新太郎^{宗家孫、年十四}、及女^{年七}、於是宗家降我、而乞報讐、實十二年、八月也、

下總守小代某、□□城主也、天正十二年、八月、屬我、

山鹿越右衛門尉、山鹿城主也^{前云、宇動左衛門山鹿城主也、後再考}、屬我、自有傳、

河內守^{頭注、大津山河內守、肥後是山城主、二和仁丹波守、肥後和仁人}大津山某、大野某、和仁某、邊春某、田島某、鹿子木某、東

鄉某、美毛某、三池某、安心寺某、麻生某、灰塚某、片加瀬某、宗

像某、以上人々未詳何城主、天正十二年、八月廿四日、俱來謁 松

齡公於吉松、而降屬、

阿蘇新九郎惟永、以矢部城主為阿蘇大宮司、而屬大友氏、天正十三

年、閏八月十六日、降我、以甲斐美作入道為質、自有傳、

上總介甲斐某、隈莊城主也、天正十三年、閏八月十九日、出質子降

屬、

津守光長、木山左近將監、菊地某、森山某、皆降屬我、

甲斐大和守親英、阿蘇大臣也、降我、

甲斐右京亮、蓋親英弟、高知尾^{在田代城}田代城主也、天正十三年、降屬

我、十五年、二月十八日、陣沒於小牧城、自有傳、

佐鹽兵部少輔、高知尾石櫃城主也、天正十三年、九月、我軍攻陷之、

甲斐長門守、高知尾小崎城主也、名櫃同時城陷、

內空閑下野守鎮房、未知何城主、天正十三年、八月、來謁 松齡公

於八代城、

田代宗傳^{一作傳}、未知何城主、天正十四年、遣使者覓府、賀年首之儀、

豐後三

左衛門督大友義鎮、剃髮號宗麟、九州探題從三位左馬頭義鑑之子

也、義鑑之十一世祖左近將監能直者、鎌倉右將軍之庶子也、能直冒

母氏大友^{經能母大友四郎大夫、稱刀禰局}、而為齋院次官親能^{白蓮宗之十二世孫御堂開}之義子、建久七

年、始封豐前後二州、下居豐後、而子孫世々領九州探題職、一義鎮

并吞豐肥筑前後六州、居府內城、驕奢酷政、而信奉天主教、祖先之

墳寺・及神祠佛閣盡廢毀之、老臣等諫、不聽、人々大失望、一 天正

五年、冬、伊東義祐沒落日州、奔豐後、賴義鎮、於是義鎮欲使義祐

復歸日州、與子義統^{初稱新太郎、後左衛門督}、俱將六州兵八萬餘人、入日州、我軍擊

敗之於耳川、將士死者不可算、義鎮父子遁歸豐後、實六年、十一月

也、十二月、肥後熊本城叛義鎮降我、我兵進入肥後、宇土・志岐・

天草・亦皆叛降我^{某年毛阿輝元遣僧五戒坊來告質明公曰、僕今欲使將軍義鎮降、當時時、大友氏若出軍於備防長門之}

公、於是、公發兵略肥後、時近衛公亦遣使告公曰、聞今子與大友氏構兵、自此而後復和、是則織田信長之所惡語也、公不得已、與

大友和解、既而輝元復遣使、義昭亦使柳澤新右衛門、請、公許大友氏、當此之時、公與諸將議將討大友氏、而二使適至、於是乃發

信反、并吞肥前一州、掠鹵筑後肥後之地、與義統及我三州為鼎足之勢、至是肥前盡屬我、是歲肥後・合志・隈部・宇動・赤星・三代、筑後草野・星野・蒲地、筑前・秋月、豊前・原田・長野城等、皆叛義統降我、十三年、閏八月、肥後・三舟・隈莊・阿蘇亦叛義統降我、十四年、六月、我軍入筑後、軍高良山、日當山城・鷹取城・勝山城亦皆屬我、七月、筑前岩屋實滿二城亦降、十月、義鎮一族志賀道益・入田宗和・亦叛降我、於是我兵四萬餘、自肥後日向二道、進入豊後、陷諸城、尋圍利滿城在時、近龜、當此時、京軍方至豊後、與義統俱援利滿城、敗績、義統單騎遁府內、我軍徹夜發喊舉烽、充滿府內、義鎮父子大怒、犇高崎、又犇豊前龍王、而急馳使者、乞援兵於豊公、是時肥筑前後皆屬我、豊之前後亦大半屬焉、岡・及津賀牟禮・湯莊・臼杵四城俱在豊、後、未屬耳、十五年、三月、豊公西下、我兵捨豊後歸國、及和議成、豊公復封義鎮父子豊後、其後義鎮卒、義統立、居丹生島後任豊、文祿元年、朝鮮役起、義統將兵赴焉、二年、明將李如松將攻平壤城、守將小西行長遣使者于義統曰、明兵二十萬近日將來攻平壤、願子來援、義統性素怯、聞而大怒曰、明兵如此衆矣、行長必敗、因顛沛遁犇王城、豊公聞之大怒、將縛義統斬其首、以其世家之故、赦一死、而没入其國、

志賀播磨守、菅迫城主也、父曰安房守某、為大友氏國老、我軍入豊後之日、播磨與子左馬介・及志賀道益・入田宗和・屬我、我班軍之日、攜妻子從至薩、自有傳、

摂津守戸次純貞、剃髮號玄珊、父曰伊豫守親久、祖曰丹後守親續初稱六、、親續祖次郎左衛門重秀、即大友親秀能置長次子也、始姓戸次氏、玄珊以津牟禮城主、天正十四年、降 松齡公、既而戰没城中、未知

其所以、子半兵衛義貞、來事我、自有傳、

入田宗和、大友氏支族、天正十四年、以入田城主叛而降我、自有傳、入田左馬介、宗和叔父也、入田右衛門、宗和弟也、俱屬我、自有傳、志賀道益、志賀城主也、我兵入豊後之日、與宗和俱為鄉導、自有傳、志賀式部入道道雪、道益弟也、志賀道雲、朽網宗歷、戸次鎮連、一萬田紹傳、柴田紹庵皆降我、

肥前四

左衛門大夫初曰修理有馬久賢實一作真、初名續真、又稱純、又、久信、二本久賢、剃髮號仙岩、、以肥前高木郡有馬城主屬龍造寺隆信、而以一族島原大學・土黒備中為質、且以女妻隆信長子政家、其後與隆信不和、天正十年、冬、與田尻鑑種、俱賴中書家口降屬 貫明公、隆信怒、大掠鹵鎮貴所領地、鎮貴一族深江伯耆・其子下野・以深江城降隆信、安德・島原等亦降焉、鎮貴乞援於我、松齡公遣山田新助・鎌田刑部左衛門至有馬、十一月十三日、二人歸八代、十九日、我諸軍將至有馬、鎮貴遣島原肥前・峯左近二人、率兵船迎焉、至八代、廿日、我將川上上野守・及肝付彈正・山田新助・鎌田寬栖・穎娃左馬介・猿渡越中守・養田某等發德洲、至有馬、廿三日、我出兵深江城、斬敵三人、十二月四日、擊破千々輪城外柵、斬三百餘人、既而諸將還八代、鎮貴與弟俱至八代、十二日、謁松齡公、十一年、四月、安德入道宗泉亦降隆信、深江佐嘉之間路斷、六月、我軍至焉、進攻深江城、敗績、我將新納忠堯陣没、我軍引還、於是隆信大舉復攻有馬甚急、十二年、鎮貴又乞援於我、公

使中書家口將兵往援、家口至有馬、兵士僅三千餘人、與隆信六萬餘人大戰於島原、斬隆信、復其所奪守山・三重・大野・比良・神代・伊福六城、十三年、二月廿四日、賴吉田美作請諱字及官位、於是賜久字名久賢、任左衛門大夫記覽書曰、九月十五日、久賢至御船、公使二使責其後期之罪、不見焉、至翌日、則公聽左右諫、而赦其罪、召賜響應、是時獻太刀及酒肴、

山城守龍造寺隆信、其先鎌足公之十世孫左衛門季家、事右大將家、居鎮西龍造寺、因氏焉、季家之十四世豐前守胤榮、胤榮無男、以小宗六郎二郎周家胤榮祖父家之弟山城守家兼、家兼之子筑前守家純、家純字即周家也之子為養子、名隆信、隆信初屬大友義鎮、義鎮賞其有才氣、封肥前之內方三百町地、既而隆信掠領肥前一州、比及天正六年、遂不用義鎮命、出兵侵掠筑後肥後之境場、十二年、三月、陣沒於島原、年五十六、子肥前守政家、居肥前口口城、天正十二年、十二月四日、由秋月種直之勸、而降我、十四年、我將伊集院忠棟自八代遣使者政家出質子、於是政家以添島長門守為質、獻肥後筑後之地及盟書或云、十二年、八月、賴秋月氏乞降、至十月十五日、而許之、於是政家、遣使者獻太刀及馬、是時政家弟家清、及錦島飛彈守皆獻盟書而降我、

安德上野守、降屬我、而有節義、天正十三年、九月、賜褒牒、大邨某、降屬我、

宇久大和守、五島領主也、天正十四年、二月、遣使者於甕府、

筑後五

田尻中務大輔鑑種、以柳川一作田尻城主領六萬石、而屬龍造寺氏、天正十年、冬、遣使而降我、隆信怒、將攻田尻、鑑種據高尾城、使田尻

石見守據水流域、田尻大藏大輔於濱田城、田尻常陸入道了哲據鴻浦城、而別遣兵番成堀切城、而抗隆信、隆信攻擊甚疾、鑑種乞援於我、我兵至肥前、陷隆信所置千々輪、又陷肥後比々良城、隆信猶不解筑後之圍、鑑種拒戍凡五百廿日、至明年冬、糧盡矢竭、失防禦之術、因乞和、與城於隆信天正十年、鑑種公在八代、十一月、鑑種降、

蒲地鎮守一作筑後山下城主、蒲地守隆廣、富饒鎮連、久留目林慶入道、黒木宗龍入道、溝口周防守益家、西牟田左近將監種純、皆降屬我、

星野九郎、草野宗養、高良山執行良觀九幡也、以上大友氏敗日州之日俱降我、

上野介筑紫廣門、勝山城主也、天正十四年、六月、我兵入筑後、軍高良山、陷鷹取城、廣門一族左衛門尉晴門陣沒、日當山城亦陷、廣門遂下勝山城、以女年甫十三為質、而降屬我、是歲三月、我將伊集院忠棟自八代遣使者於廣門、說而使降我、是時廣門屬大友氏、不聽命、於是我有此舉、至是遂降焉、

田原下總守茂種、亦降屬我、三池某、天正十四年、春、遣使者甕府、賀年首之儀、

筑前六

秋月三郎種實、秋月城主也、天正十三年、八月、降屬我、十四年、三月、我命伊集院忠棟、自八代城遣使者秋月而出質子、種實唯諾、其後我賜種實岩屋實滿二城、

秋月種直、蓋種實子、

高橋主膳兵衛尉鎮種、剃髮號紹雲、父曰吉弘某、紹雲出為寶滿城主
高橋三河守鑑種養子、冒高橋氏、為岩屋城主、天正十四年、我兵攻
陷岩屋城、紹雲自殺、紹雲二男、長立花左近將監宗虎、為立花城
主、次彌七郎直次、為寶滿城主、岩屋陷之日、遁入立花城、

豐前七

原田伊賀守、降屬我、

城井民部少輔友綱初稱彌、三稱彌、常陸介長甫之長子也、有弟稱彌二郎、父常
欲立彌二郎、而家臣等不聽、其後友綱先九州諸侯而降屬我、及秀吉
西下、賜友綱豐前白石之地、其後友綱與黑田如水不睦、數及戰鬪、
如水乃誑誘友綱一族、而盡誅之席上、自是友綱勢孤弱、以其有來由
於我故、遂來歸薩、

長野三郎左衛門尉前或云、筑、降服我、

高橋九郎元種、秋月種實子也、出為高橋三河守鑑種養子、冒高橋
氏、領豐前田河築城南郡、居河原岡城、元種子種直降我、自有傳、
英彥山僧、天正六年、大友氏侵我日州、是時我密謀誘山僧、於是其
徒三百餘人出豐後東連見、切流大友氏戰艦數百艘、以故宗麟大怒、
遣兵盡燒亡英彥山云、十二年、我兵往救肥前有馬氏、是時山徒一
二人來留家口營、而禱我軍勝利、十四年、我出征豐後、是時借山
徒糧、於是山徒盡獻東連見所貯米、七月、我兵攻岩屋城、山徒復

獻米穀云、十五年、公初朝京師、至筑前博多、而饗秀吉麾下、是
時山徒政所坊等至博多、竭力資給饗應之具、松齡公婦自關原、路
過彥山、留數日、因約年々賜政所坊馬三十五匹、七十五坊各一匹、
凡百十匹此說與吾所聞異、俟再考、慶長十九年、慈眼公有永獻彥山神祠田祿六十石
之事云此說亦不足深信、姑記俟後之識者、

對馬宗氏義或云、名、浦或云、壹岐某氏義或云、天正十三年、貫明公遣井尻伊賀守
至五島對馬、壹岐說屬我麾下、十四年、我陷岩屋城、此時皆各遣使
者賀焉、

上原氏列傳第七十四

上原尚信軍人、依、又、複姓藤原、薩摩人、其先伊作田道材兵部大、事足利直
冬、有戰功、觀應二年、十一月廿九日、以道材為伊作田在薩摩地頭
職、因氏焉、尚信以上至道材、年月失譜、（頭注）朱子曰、所以當然之故也、此可為法也、以故子孫不知其所以改伊
作田氏為上原氏、及失伊作田地之故直冬所稱道材之者、今猶藏之子孫上原尚續家、尚信
有男曰尚氏守、又源右衛門尉、事 貫明公、為步卒將、兼會於郡地頭職、
某年從之原山地名、田獲獸頗多、賞賜眉尖刀兼光所、鳥銃三銃、天正八
年、賜田祿若干石、國老連名書其牒後此云附、紙尾書曰、四三、二十年、又賜
田祿、亦有國老照書末白、十二月二日、慶長六年、公以世々所傳時雨旗公家以南為吉兆、
集院忠棟照契末白、六月廿日、文祿五年、又益賜田祿、亦有國老伊
讓之必建之中軍、慈眼公、而使尚氏執其禮、因又命尚氏子孫、世々掌
每歲七月七日曬此旗之儀、是時又增賜田祿五十石、亦有國老書牒同
列姓名并押字紙尾書曰、二月三日、至元和間、尚氏食田祿百三十六石慶府田、
其後家產年衰、至四世孫尚益、（頭注）嘗乏之作竊因、嘗乏之日甚、遂至無朝服、因請官永蠲

曬旗事尚氏無男，以小宗者在衛門尚數為嗣，尚數生源右衛門尚繼，尚繼生源右衛門尚口，尚口生源右衛門尚茲，尚、益無男，以嫡口氏為養子，是日源左衛門尚清，尚清生二子，長源右衛門尚傳，次即先考也，尚傳尚續。

上原尚常，一名尚近守長門，尚信次弟也，為人忠勇，才氣過人，始事

梅岳君，有戰功，君賜書末曰：霜月二十日，日賞之。至天文六年，丁酉，九

月，賜伊集院之地公田數頃，是月，大中公又賜日置莊之地上原屋是時所賜之書曰：天文六年，丁酉，九月廿五日，口押字，上原長門守殿。數是時所賜之書曰：天文六年，丁酉，九月廿五日，口押字，上原長門守殿。頃，

天正元年，三月，禰寢重長以城屬我，貫明公即使尚常及新納忠元

等，討其黨肝付氏，俱進放火於高須村落，十八日，擊破肝付氏兵，

十二月，進攻牛根城安樂備前，明年正月，城兵出降，是歲八月二日，命

為使役，四年，丙子，八月十九日，公自將攻降高原城下百州，伊東義祐部，

尚常從，大有斬獲，九月九日，公賞其功，為高原地頭職，而徙戰

士三百五十人屬焉，自此，公威振山東，義祐側席而座須木，須師

備中其女為義益妻所殺，亦怨焉，二人乃謀歸於薩，於是十二月六

日，丹波陰告于尚常曰，伊東氏流毒下民，黜斥諫臣，是天奪之鑿，

而益其疾，吾請獻城以屬乎子之君，以定民弭憂與丹波傳有言，雖然，彼成

兵在城中，子若以兵來，吾則為道，敢布中情，於是尚常即日使人告

之于麿府及飯野城公在焉，是時，急命。而急使部將竹內實康率步卒六十五人，由

猿瀨口經野尻谷，登油平山，至野尻，城險不能登，丹波縋焉，遂入

內城，時天寒冰凍，丹波煮粥進，妻行酒，夜半，丹波大呼曰，城已

降薩，薩兵盡在城，汝等不急退去，徒遺之禽耳，我兵亦鼓譟，伊東

大炊介等大驚惶，皆棄城而遁去義祐所置，成兵。松齡公旦日從牙隊五十餘

騎，來赴野尻城，丹波出城迎謁，從入城，七日，尚常所遣使者至于

麿府，是時，貫明公遇往謁隅州正八幡祠，聞之，即急發，踰霧峰至

花堂，則聞丹波已降於我，八日，公進兵陷戶崎城野史氏曰：兵開御道，公之不自

且歸孫謀也，宜矣，尚常從有功，自此伊東氏兵日散潰，義祐遂出走豐後，

尚常有力焉是日我兵入紙屋者凡六千餘人，當此之時，野村等亦謀叛以應我，

故俱收軍而退，九月，尚常及島津以久復攻石城，城中兵少食盡乃

降，日州悉定，是年十月，大友氏大兵入日州，於是，公自將兵發麿

府，廿六日，至高原，宿尚常內城，翌日去高原，十一月十二日，進

兵大破大友氏於耳川，尚常從，大有功，廿六日，公班師，翌日至

高原，是夜復宿尚常內城，廿八日，去高原，尚常率兵，送至花堂而

辭焉，公既反乎麿府，論功行賞，以為義祐出走，日州平定，尚常

功最盛，於是拜為飢肥院東方地方五百町宰，而屬戰士一千人，威信

著於日境谷口宮內承高自記云：茲歲從上原長門守為飢肥院宰，戰士千人，七年，己卯，三月，益食

府公田若干石是時亦有國老，是歲肥後熊本城主親政屬於我，

於是我始有事于北肥，六月，遣尚常及佐多久政往圍矢崎城，十月十

五日，城陷，十六日，陷綱田城，十二月，進放火於合志城外，殺敵

兵數十百人，明年辛巳，八月，公自將軍水股，尚常引飢肥兵從

焉，而與島津義虎，俱軍於井川平，十年，壬午，十二月，從公軍八

代，十一年，癸未，九月，復軍八代，十二年，甲申，三月，與諸

將，俱往救肥前有馬城，與龍造寺氏戰，大敗之於島原，九月，尚常

復出軍肥後，十三年，乙酉，九月，日州高知尾人納欵，公遣尚常等

往董之，事畢而歸報，十四年，丙戌，七月，與諸將俱攻破岩屋城，

十月，進入豐後，十五年，丁亥，四月，從戰於目白坂，不利，退據

飢肥城自是至尚常之卒，無舊記可據，而獨有公命尚常下城之書，末曰：閏五月，

文祿元年，壬辰，九

月五日、卒、法號久全源昌居士、墳墓在高原繩瀨小牧以上二十八字、據本、尚常生右衛門佐五郎、天正二年、九月六日、將軍使者至薩、公命右衛門等享之、六年、九月、從父攻石城、十一月、從耳川役、及公

班師、踰霧峰、至濱之市、右衛門齋酒肴往謁焉、十二年、與父俱如島原之役、慶長五年、祇役于大坂、九月、関原師敗、公退至大坂、竊謀奪二夫人而遁去、是時國老平田增宗、以右衛門等護衛侍婢

阿松、詐為君夫人、留之邸中、尋而右衛門等亦相謀、以金啗門吏、而與阿松及衆俱出城、追及公舟于須磨、從帰國、某年五月十三日、卒法號泰應靜安庵主、慶長十六年、國分諸士田藤種曰、右衛門、額四百七石、又元和間、慶府田藤種曰、右衛門、額五百石、右衛門佐無男、以三原重

種種守稱中次子某為養子、名尚演稱昌十郎、大藏大輔、又、後更名尚政、以父任為橫川地頭職、某年三月朔日、卒法號心空即遊居士、尚初娶島津忠直第一女、早卒、無子、繼娶藤山久高第三女、未幾、重朝稱騎馬人、步卒十八、額第一、元初七年、十一月、命重朝等習勒大追物、重朝射大四匹云、寬永九年、兵賦稱云、浪華之後兵賦稱騎馬二人、步卒三十人、槍十八、鳥銃二、弓一、寬永十七年、兵賦稱云、尚常稱田藤三千八百八十石、而出兵卒十五人、某年八月廿九日、卒、法號聖聖三居士、尚常生長左衛門尚昌、寬又二年、五月五日、卒、年三十五、尚昌生長左衛門尚興、尚興生長七郎左衛門尚道、尚道生長彌七兵衛尚利、尚利稱後於江戶、有故出奔、遂為僧、至此家已。

上原土佐者、尚信之第三弟也、命保守清水邑、因居焉及子孫今在清水邑、及垂水邑云、、

久富木撰津介者不知其改、尚信之第四弟也、從戰岩屋、被重創、又從入豐後、及班師之日、與伊勢貞昌、俱擊清田賊、身斬賊一人、

上原尚弘稱勘解由兵衛、或云、按久段自謂、天正六年、有尚、是即尚弘也、或曰、非也、俟再考、從軍耳川、又從肥後、放火合志城外、其後陳沒於島原天正十四年、三月廿四日、、

上原兵部、上原彦五郎號肥人、從、赴島原、羽柴氏西下之日、二人俱入成高城、

上原下總、岩屋之役、從公留成八代城、

上原丹後、事梅岳君、後屬公子家口、徙佐土原城、賜田祿二百五十石、無男、以長野下總長子為嗣、冒上原氏、是曰佐太右衛門、亦

事家口、後從豐久、戰沒於関原、年二十五法號節義玄庵定門、墳墓在佐土原天島、子尚辰稱休、及父戰沒之日、去佐土原居本城邑、寬永十四年、從諸將討島原賊今上原休、即、

上原久洪號道顯、事梅岳君、居伊作、為加世田七浦地頭職、長子久次稱五郎、天文七年、十二月、戰沒於加世田城、年十六、次子久通稱新左、嗣家、為隅州笑隈地頭職、因移居數年矣、其後轉居谿山・寛府・飢肥・福島、又移於橫川、卒法號性、子久昌稱內藏、以步卒將居大口、其後從尚常、移飢肥城、賜田祿若干石、從耳川之役、又從戰沒於肥後矢崎城天正五年、十月十日、法號秋香、、子久治稱五郎、陣沒於豐後法號玄、無嗣、以湯地藤兵衛次子為之嗣、冒上原氏、名久根稱小助、賜宅地及田祿若干石、年甫七、慈眼公召擊鼓於公座久根擊鼓於、川內重利云、其聲調和、因賜稱鼓助、至寬永九年、食田祿百四十一石稱田祿、十四年、使琉球國、其後命學連歌、後累遷物奉行・及長崎附人、寬文八年、十月廿四日、卒法號

上原安房、戰沒於木崎原、

上原勘兵衛、飢肥人、天正中、置謀臣、勘兵衛亦與選焉、

上原十郎左衛門、從松齡公、移飯野城、

野史氏曰、擾攘之世、方急於用折衝之材、而尚信功名不傳於世、惜夫、尚氏終身為步卒將、則其功烈亦不及叔父、一初余觀貫明公賜尚常下城之書、而惜不知其所終、其後福崎正澄持一冊子、來告余曰、此本府大史本田親孚往至高原、躬覽尚常君之墓于繩瀨小牧之記也、予觀之不堪喜、因為尚常嘗以繩瀨為采地、則其奉命之後、去

上原下總、岩屋之役、從公留成八代城、

上原丹後、事梅岳君、後屬公子家口、徙佐土原城、賜田祿二百五十石、無男、以長野下總長子為嗣、冒上原氏、是曰佐太右衛門、亦

事家口、後從豐久、戰沒於関原、年二十五法號節義玄庵定門、墳墓在佐土原天島、子尚辰稱休、及父戰沒之日、去佐土原居本城邑、寬永十四年、從諸將討島原賊今上原休、即、

上原久洪號道顯、事梅岳君、居伊作、為加世田七浦地頭職、長子久次稱五郎、天文七年、十二月、戰沒於加世田城、年十六、次子久通稱新左、嗣家、為隅州笑隈地頭職、因移居數年矣、其後轉居谿山・寛府・飢肥・福島、又移於橫川、卒法號性、子久昌稱內藏、以步卒將居大口、其後從尚常、移飢肥城、賜田祿若干石、從耳川之役、又從戰沒於肥後矢崎城天正五年、十月十日、法號秋香、、子久治稱五郎、陣沒於豐後法號玄、無嗣、以湯地藤兵衛次子為之嗣、冒上原氏、名久根稱小助、賜宅地及田祿若干石、年甫七、慈眼公召擊鼓於公座久根擊鼓於、川內重利云、其聲調和、因賜稱鼓助、至寬永九年、食田祿百四十一石稱田祿、十四年、使琉球國、其後命學連歌、後累遷物奉行・及長崎附人、寬文八年、十月廿四日、卒法號

上原安房、戰沒於木崎原、

上原勘兵衛、飢肥人、天正中、置謀臣、勘兵衛亦與選焉、

上原十郎左衛門、從松齡公、移飯野城、

事一
飲肥遂遜于此、度外功名榮利、遂其不屈於威武之本心焉、則亦謂之

知進退非邪者、權也、尚書去飲肥、非不愛其地也、雖曰、驚鳥不擊兮、自前世而臨

鮮之禍也、夫孰異而相安、又曰、玉世貞云、龜也、仲連與張良也、其所、一余嘗跋、公賜尚常書

後曰、天正丁亥、豐公大兵入薩、軍水引太平寺、五月、公往謁

焉、諸將亦降、六月、公始朝京師、明年戊子、松齡公亦朝京師、

自是諸將士往來于京師、今據、公賜書、則至豐公入薩之明年、尚常

猶據飲肥城而不降、當是時、國勢危悚、人心洶々、獨尚常據孤城、

無所撓屈、則有其勇略不可及者、自此以來不復聞尚常之事蹟、蓋以

此遂獲罪於公、沈滯以終身者也邪、抑尚常知勇絕倫、歷事三世、

為世所推尊、其奉上尊君、有所不自恣者、則得公之書、即立止戈

下城、遜世晦行、悠悠全其天年、亦未可知也、然無他據、惜哉、其

後得福崎氏冊子、始知尚常所終、與管見脗合、因作尚常傳、而後余

喜可知也、蘇賦曰、范蠡知錢可與患難、則為之誠具、以致其功、即其不可與同安樂、則辭之浮江湖、如去也、是以言臣

歡、豈不稱奇、假令可樂而獲之、直與唯免伍耳、黃帝曰、范蠡逃跡于泛江、留侯拒撓于訪於、是亦拂窳完、

指、而虎口求生也、何孟春曰、張孟誠嘗伯而去之、橫於負親之丘、可與范蠡五湖同歸、尚常亦有類之者、

西藩烈士干城錄卷之三十五 大尾

西藩者何、我薩摩州也、烈士者何、州之古將士也、干城者何、扞外
衛內、以報我國家也、迂愚居士者誰、仙禽山下之狂生也、居士以狂
故、國人無相與友者、於是乎進取諸古、而親作之傳以友焉、又將昭
揭其莫逆者、以告天下後世之交、而尚信者也、

迂愚居士跋

附錄烈士傳跋後

野史氏曰、每歲春秋余卜日焚香、設蔬菓酒饌、以祭我先師及州古烈
士、因誦讀嘗受命於先師書一篇、及自著烈士傳一篇、且末辭曰、春
露秋霜、追感歲時、不勝永慕、敢以薄奠、祇薦歲事、尚鑒、此我致
愆之道也、世人觀之、或擲揄之、曰、甚哉、其迂愚而闕於事情也、
糟糠不厭、山中一狂生、何以是嚶々也、于嗟、此其稱善人焉者也、
是遵何德哉、亦各從其志也、

迂愚上原居士之墓

居士姓藤原、氏上原、名尚賢、字子順、一名鴻、字伯羽、俗稱善
藏、別號迂愚、又號天數、其先伊作田兵部大輔道材、事足利氏有戰
功、褒賜薩州市來鄉伊作田、因為氏、九世祖筑前守尚信、尚信以
上至道材、年月失譜、以故不知其所以改氏之由云、皇考諱尚志、妣
山下氏、以明和元年、甲申之歲、八月朔日、生尚賢於薩州躰島平
里、因亦號飛鸞齋、幼充府學童子員、及長、遊學於江戶、受業精里
古賀先生之門、蒙命為御近習通、每講書于世子前、既反、而為史
館肄業、行府學訓導師、至文政六年、癸未之歲、五月十五日、擢御
廣敷番之頭、而為第三公子之傳、兼任讀、前此五日、選御廣敷番
之頭兒玉儉之、教書于公子、初居士與儉之交、儉之嗜旨、居士好
酒、儉之老益壯、居士軟弱不堪事、儉之善書、廣教于右族、居士讀
書、獨閉戶、凡事多相反、而莫逆於心、至是俱侍公子、一日從容
相與語、因各問其自號、曰頑翁、曰迂愚、二人相視而笑曰、何不期
而其號之相似也、二人乃相謂曰、由號觀之、其為人亦可知也、而今
與儉、則人謂之公子之不幸也宜、雖然、二人質朴純樸、無他材
能、而惟守勿欺之訓、比之於險躁愒慢之徒、或為較愈、則其謂之

公子之幸也亦宜、於是乃相共同心竭力、以左右 公子、庶幾庸玉之於成也、其後居士以勞息無端倪、因據前語、述其本末、而請儉之書、遂以為墓誌、而遺命書、天保五年、甲午、十一月二日、没、享年七十一、葬松原山先塋之次、居士娶吉利氏、生二男、長尚質、次尚德、長女夭、次三女、吉利氏先没、繼娶佐々木氏、生一女、系以銘曰、

天地變化、 陰陽死生、 掩之誠是、

安此佳城、

迂愚居士誌

予一日飲酒既醉、適停觀家語、曰、既死而議論、臨定而卜葬、既葬而立廟、皆臣子之事、非所屬也、況自為之誌銘哉、則予亦為夫子之所非耶、嗚々、

(頭注)市來君微評 嗚呼達人之事、迥出於世習俗風如此、陶元亮之挽歌、先生之墓誌、君竊并以為千古雙奇事云、

鮎洞拜

鹿児島県史料集刊行一覽

集	史	料	名	執	筆	者	集	史	料	名	執	筆	者
1	薩藩政要録			桃園恵真・五味克夫	26	桂久武日記				村野守次	村野守次		
2	丁丑日誌(上)			村野守次	27	明赫記				宮下満郎	宮下満郎		
3	薩摩国新田神社文書			芳 即正	28	要用集(上)				芳 即正	芳 即正		
4	一向宗禁制関係資料			五味克夫	29	要用集(下)				村野守次	村野守次		
5	薩摩国山田文書			桃園恵真	30	桂久武書翰				桐野利彦	桐野利彦		
6	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜			五味克夫・郡山良光	31	本藩地理拾遺集(上)(薩摩国)				宮下満郎	宮下満郎		
7	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記			五味克夫・郡山良光	32	本藩地理拾遺集(下)(大隅国・諸縣国)				山田尚二	山田尚二		
8	御登御道中日帳下向・列朝制度			原口虎雄	33	江夏十郎関係文書				宮下満郎	宮下満郎		
9	明治元年戊辰戦役関係資料			村野守次	34	示現流関係史料				晋 哲哉	晋 哲哉		
10	伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説			増村 宏	35	榊山玄佐自記並雑書・榊山紹劍自記				山田尚二	山田尚二		
11	管窺愚考・雲遊雜記傳			五味克夫	36	島津世禄記				島中 彬	島中 彬		
12	川上忠塞一流家譜			五味克夫・桑波田興	37	島津世家				宮下満郎	宮下満郎		
13	本藩人物誌			桃園恵真	38	譯司冥加録・漂流民関係史料				尾口義男	尾口義男		
14	薩陽過去帳			宮下満郎	39	薩摩藩天保改革関係史料一				宮下満郎	宮下満郎		
15	備忘抄・家久公御養子御願一見			五味克夫	40	薩藩学事一・鹿児島師範学校史料				島中 彬	島中 彬		
16	鹿児島縣他誌(上)			桐野利彦	41	薩藩学事二・薩藩学事三				吉元正幸	吉元正幸		
17	鹿児島縣他誌(下)			桐野利彦	42	薩藩名勝志(その一)				吉元正幸	吉元正幸		
18	薩藩舊土文章			五味克夫・桑波田興	43	薩藩名勝志(その二)				吉元正幸	吉元正幸		
19	薩藩先公貴翰(乾)			五味克夫・桑波田興	44	薩藩名勝志(その三)				吉元正幸・塩満郁夫	吉元正幸・塩満郁夫		
20	薩藩先公貴翰(坤)			五味克夫・桑波田興	45	鹿児島県布達(上)				宮下満郎	宮下満郎		
21	小松帯刀傳・薩藩小松帯刀履歴・小松公之記事			芳 即正	46	鹿児島県布達(下)				堂満幸子・林 匡	堂満幸子・林 匡		
22	小松帯刀日記			芳 即正	47	伊地知権左右衛門日記・先君掖官遺抄				安藤 保・徳永和喜	安藤 保・徳永和喜		
23	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(上)			原口虎雄	48	加治木古老物語・薩藩雜事録・雜事奇談集・舊薩藩奇譚日記集 上下				徳永和喜	徳永和喜		
24	新修舊鹿児島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(下)			原口虎雄	49	西藩烈士干城録(一)				徳永和喜	徳永和喜		
25	三州御治世要覽			宮下満郎・桑波田興	50	西藩烈士干城録(二)				徳永和喜	徳永和喜		
					51	西藩烈士干城録(三)				徳永和喜	徳永和喜		

鹿児島県史料集刊行委員会委員

五十音順

安藤 保 九州大学名誉教授

尾口 義男 始良市歴史民俗資料館長

五味 克夫 鹿児島大学名誉教授

塩満 郁夫 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

清水 勝 志学館大学非常勤講師

晋 哲哉 元蒲生町長

堂満 幸子 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

徳永 和喜 鹿児島県歴史資料センター黎明館
学芸課長

中野 翠 鹿児島高等予備校講師

丹羽 謙治 鹿児島大学教授

原口 泉 志学館大学教授

日限 正守 鹿児島大学教授

三木 靖 鹿児島国際短期大学部名誉教授

宮下 満郎 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

「西藩烈士干城録」(三)

(鹿児島県史料集 第五十一集)

平成二十四年三月

発行

鹿児島市城山町七一一
鹿児島県立図書館

電話 ○九九―三二四―九五一一
FAX ○九九―三二四―五八二四

印刷

鹿児島市中央町二七一―一六
かわち印刷有限公司
電話 ○九九―二五四―五〇五四